

れり。何が故に此の如くなる、只だ本分の事を以て人を接せざるが爲なり。若し是れ大龍ならば、必らず恚麼ならず。

第八十三則

【本則】 舉す、雲門衆に示して云く、「古佛と露柱と相交る。是れ第幾機ぞ。」(三千里外没交涉、七花八裂。)自ら代つて云く、「東家の入死すれば西家の入哀を助く、一合相不可得。」(南山雲起れば、(乾坤視ること莫し、刀斫れども入らず。)北山雨下る。)(點滴も施さず、半は河南半は河北。)

【評唱】 雲門大師、八十餘員の善知識を出す、遷化の後七十餘年にして、塔を開いて之を観るに、儼然として故の如し。他見地明白にして、機境迅速なり。大凡そ垂語別語代語、直下に孤峻なり。只だ這の公案、擊石火の如く、閃電光に似たり、直に是れ神出鬼没。慶藏主云く、「一大藏教に、還つて這般の説話有り麼。」如今の人多く情解の上に向つて、活計を作して道く、「佛は是れ三界の導師、四生の慈父、既に是れ古佛、什麼と爲

【本則】 東嶺師云く、八十三則、傾ち雲門の言句、益々意味に参す可きことを明す、雪竇の頌中に曰く、「苦中の樂、樂中の苦、誰れか道ふ黄金粟土の如し」と、先師曰く、「是れ雪竇の一家風、又東山下の調最も絶唱なり。」

①幻住曰く、「會元に七十六人を載す、佛祖宗派圖に九十四人を載す、今八十餘員と謂ふ者は、其の大数を擧ぐるのみ。」②七十餘年當に十七年と作すべし、本録に云く、「師歸寂の後十七載にして、夢を維武軍節

てか卻つて露柱と相交る。」若し恚麼に會せば、卒に摸索不着ならん。有る者は喚んで無中に唱へ出すと作す。殊に知らず宗師家の説話、意識を絶し、情量を絶し、生死を絶し、法塵を絶して、正位に入つて更に一法を存せざることを。備纏かに道理計較を作さば、便ち脚に纏ひ手に纏はん。且く道へ、他の古人の意作麼生、但只心境をして一如ならしむれば、好惡是非、他を撼動することを得ず。便ち有と説くも也た得たり、無も也た得たり、有機も也た得たり、無機も也た得たり。這裏に到つて、拍拍是れ令五祖先師道く、「大小の雲門、元來膽小なり、若し是れ山僧ならば、只だ他に向つて第八機と道はん。」他道ふ、「古佛と露柱と相交る、是れ第幾機ぞ。」一時の間且く目前に向つて包裹す。僧問ふ、「未審し意旨如何。」門云く、「一條の條二十文に買ふ」と。他乾坤を定むる底の眼有り、既に人の會する無し。後來自ら代つて云く、「南山雲起れば、北山雨下る」と。且く後學の與に、箇の入路を通ず、所以に雪竇只だ他乾坤を定むる處を拈じて人をして見せしむ。若し纔かに計較を犯して、箇の鋒銛を露さば、則ち當面に蹉過せん。只だ他の雲門の宗旨に原いて、他の峻機を明さんことを要す。所以に頌出して云く、

度推官阮紹莊に感ず云云、「會元にも亦謂ふ、後、十七載にして夢を阮紹莊に示す」と。③並に本録に見ゆ。垂語とは、學人に垂示するの語、別語とは、古人曾て答語有り、今、別に一見を出して答語するを謂ふ、代語とは、古人答語無し、今、之に代つて答語するを謂ふなり。④三界は欲界、色界、無色界、即ち依報なり。⑤四生は卵、胎、濕、化、即ち正報なり。⑥摸索不着は「さぐりあてえず」と譯す。⑦拍手の一拍、一拍は是れ號令なり。⑧五祖上堂の語、四面録に出づ、又禪林頌聚第二に出づ。

【頌】南山の雲、(乾坤觀ること莫し、刀斫れども入らず。)北山の雨。(點滴も施さず、半は河南半は河北。)四七二三面り相觀る。(幾處にか見ゆるに見えず、傍人を帶累す、露柱燈籠を掛く。)新羅國裡會て上堂す。(東湧西沒、東行西行の利を見ず、那裏よりか這の消息を得來る。)大唐國裡未だ鼓を打せず。(遅一刻、我に話頭を還し來れ、先行到らず未後太だ過ぎたり。)苦中の樂、(阿誰をしてか知らしめん。)樂中の苦。(兩重の公案誰をしてか舉せしめん、苦は便ち苦、樂は便ち樂、那裏にか兩頭三面有り來る。)誰か道ふ黃金糞土の如しと。(具眼の者辨せよ、試みに拂拭して看よ。阿刺刺、可惜許。且く道へ是れ古佛か是れ露柱か。)

【評唱】「南山の雲、北山の雨。」雪竇帽を買ふに頭を相す、風を看て帆を使ふ、劍刃上に向つて、爾が與に箇の注脚を下す。直に得たり、四七二三面り相觀ることを。也た錯つて會すること莫れ。此れ只だ古佛と露柱と相交る、是れ第幾機ぞと云ふことを頌了り。後面に路を劈開し葛藤を打して、他の意を見んことを要す。「新羅國裏會て上堂、大唐國裏未だ鼓を打せず。」雪竇雷轉じ星飛ぶ處に向つて便ち道ふ「苦中の樂、樂中の苦。」雪竇七珍八寶を堆一推して、這裏に在き了るに似たり。所以に末後に這の一句子有り、云く「誰か道ふ黃金糞土の如し」と。此の一句は是れ禪月行路難の詩なり、雪竇引き來つて用ふ。禪月云く「山高く海深うして人測らず、古往今來轉た青碧、淺近輕浮與に交

①張耳、陳餘俱に大梁の人なり、餘少うして、耳に父として事ふ、相共に劍頭之交を爲す、後に陳有り、射狼の如し、史記評林に詳なり。

る莫れ、地卑うして只だ荆棘を生ずることを解す、誰か道ふ黃金糞土の如しと。張耳陳餘消息を斷ず、行路難、君自ら看よ」と。且く土曠く人稀なること莫しや、雲居の羅漢。

第八十四則

垂示に云く、是と道ふも是の是とすべき無く、非と言ふも非の非とすべき無し。是非已に去つて得失兩ながら忘す。淨裸々赤灑々。且く道へ、面前背後、是れ箇の什麼ぞ。或は箇の稍僧あり出で來つて道はん、「面前は是れ佛殿三門、背後は是れ寢堂方丈」と。且く道へ、此の人還つて眼を具するや也た無や。若し此の人を辨得せば、爾に許す親しく古人に見え來ることを。

【本則】 舉す、維摩詰、文殊師利に問ふ、(這の漢太煞だ合關一場、口を合取せよ。)
 何等か是れ菩薩入不二法門。(知つて故に犯す。)文殊曰く、「我が意の如くんば、(什麼と道ふぞ、直に得たり分疎不下なることを、擔枷過狀、髻を把つて衝に投す。)一切の法に於て、(什麼を喚んでか一切の法と作ん。)無言無説、(什麼と道ふぞ。)無示無識、(別人を瞞することは即ち得たり。)
 諸の問答を離る。(什麼をか道ふ。)是を入不二法門と爲す。」(入ることを用て什麼か作ん、許多の葛藤を用て什麼か作ん。)是に於て文殊師利、維摩詰に問ふ、「吾等各自に説き已る。仁者當に説くべし、何等か是れ菩薩入不

【本則】 東嶽禪師云く、八十四則、便ち維摩の不二に別に千細有り、參決す可きに堪ふることを明す。

二法門。「這の二靠道ふこと莫れ金粟如來と、設使ひ三世の諸佛も也た口を開くことを得ず、倒に鎗頭を轉じ來れり。一人を刺殺す、箭に中ることは還つて人を射る時に似たり。」雪竇云く、「維摩什麼とか道ひし。」咄、萬箭心に撥る、他に替つて道理を説く。復た云く、「勘破了也。」(但だ當時のみに非ず即今也た恁麼、雪竇也た是れ賊過ぎて後弓を張る、然も衆の爲に力を竭すと雖も、爭奈せん禍の私門より出づることを。且く道へ雪竇還つて落處を見得するや、夢にも也た未だ夢見す、什麼の勘破とか説かん。嶮、金毛の獅子也た摸索不著。)

【評唱】 維摩詰、諸大菩薩をして、各不二法門を説かしむ。時に三十二の菩薩皆二見の有爲無爲、眞俗二諦を以て、合して一見と爲して、不二法門と爲す。後に文殊に問ふ、文殊云く、「我が意の如きんば、一切の法に於て、無言無説、無示無識、諸の問答を離る、是を入不二法門と爲す」と。蓋し三十二人は、言を以て言を遣り、文殊は無言を以て言を遣るが爲に、一時に掃蕩して總に要せず、是を入不二法門と爲す。殊に知らず、靈龜尾を曳く、迹を拂へば痕を作すことを。又掃帚の塵を掃ふが如くに相似たり、塵去ると雖も、帚迹猶ほ存す。未後依前として蹤跡を餘す。是に於て文殊卻つて維摩詰に問うて云く、「我等各自に説き已る、仁者當に自ら説くべし、何等か是れ菩薩入不二法門。」維摩詰默然たり。若し是れ活漢ならば、終に死

①此の緣維摩經不二法門品に出づ。
②維摩經の註に、肇曰く、「上の諸の菩薩は、言を法相に借り、文殊は無言に言有り、淨名は無言に言無し、此の三宗を明むること同じと雖も、迹に深淺有り。」

水裏に去つて浸卻せず、若し恁麼の見解を作さば、狂狗の塊を逐ふに似たり。雪竇亦良久と説かず、亦默然據坐と説かず、只だ急急の處に去つて云く、「維摩什麼とか道ひし」と。只だ雪竇恁麼に道ふが如きんば、還つて維摩を見る麼、夢にも也た未だ夢見ざること存らん。維摩は乃ち過去古佛、亦た眷屬有つて、佛の宣化を助く。不可思議の辯才を具し、不可思議の境界有り、不可思議の神通妙用有り。方丈室中に於て、三萬二千の獅子の寶座を容れて、八萬の大衆に與ふるに、亦寛狹ならず。且く道へ、是れ什麼の道理ぞ、喚んで神通妙用と作し得てん麼。且く錯つて會すること莫れ、若し是れ不二法門ならば、同得同證して、方に乃ち相共に證和すと雖も、獨り文殊のみ有つて、與に酬對するに可なり。然も恁麼なりと雖も、還つて雪竇の檢責を免れ得てんや也た無や。雪竇恁麼に道ふ、也た這の二人と相見えんことを要す。云く、「維摩什麼とか道ひし。」又云く、「勘破了也」と。爾且く道へ、是れ什麼の處か是れ勘破の處、只だ這の些子得失に拘らず、是非に落ちず、萬仞懸崖の如し。上に向つて性命を捨得して、跳得過し去らば、爾に許す親しく維摩を見ることを。如し捨不得ならば、大いに羶羊の藩に觸るるに似ん。雪竇故然として是れ性命を捨得する底の人。所以に頌出して云く、

【頌】 咄這の維摩老、他を咄して什麼か作ん、朝打三千暮打八百、咄し得るとも事を濟さじ、好し三十棒を與ふるに、生を悲んで空しく懊惱す。(他を悲んで什麼か作ん、自ら金剛王寶劍有り、他の

③金粟如來なり。
④易の大壯の卦に、羶羊藩に觸れて其の角を羶く。進退の自由ならざるを云ふ。

閑事の爲に無明を長ず、勞して功無し。疾に毘耶離に臥す。誰に因つてか致し得たる、一切の人を帯累す。全身太だ枯槁す。病むことは則ち且く置く、什麼として口區擔に似たる、飯も也た喫することを得ず、喘ぐことも也た喘ぎ得じ。七佛の祖師來る。客來らば須らく看るべし、賊來らば須らく打すべし、群を成し隊を作す、也た須らく是れ作家にして始めて得べし。一室且つ頻りに掃ふ。猶ほ這箇の有る在り、元來鬼窟裏に在りて活計を作す。不二門を請問す。若し説く可き有りとも他に説きたらる、打して云く、闇黎に和して也た尋ぬるも見えず。當時便ち靠倒す、蒼天蒼天、什麼と道ふぞ。靠倒せず。死中に活と得たり、猶ほ氣息の有る在り。金毛の獅子討ぬるに處なし。咄、還つて見るや、蒼天蒼天。

【評唱】雪竇道く、「咄這の維摩老」と。頭上に先づ一咄を下して什麼をか作ん。金剛王寶劍を以て、當頭に直截す、須らく朝打三千、暮打八百にして始めて得べし。梵語には維摩詰と云ふ、此には無垢稱と云ひ、又淨名と云ふ、乃ち過去の金粟如來なり。見すや僧。雲居の簡和尚に問ふ、「既に是れ金粟如來、什麼と爲てか卻つて釋迦如來の會中に於て聽法する。」簡云く、「他、人我を争はず。」大解脱の人は、成佛不成佛に拘らず、若し他修行して、務めて佛道を成すと道はゞ、轉た没交渉。譬へば圓覺經に云ふが如し、輪廻の心を以て、輪廻

⑤道生曰く、「其れ跡を五欲に晦して超然として染まること無し、清名温かに布く、故に無垢稱と云ふ。」
⑥雲居の簡は、曹原下六世雲居、膏の法嗣、傳燈二十、會元十三に傳あり。

の眼を生じて、如來の大寂滅海に入らんとせば、終に至ること能はず。永嘉云く、「或は是或は非、人識らず、逆行順行天も測ること莫し。若し順行する則んば佛果の位中に趣く、若し逆行する則んば衆生の境界に入る。」壽禪師道く、「直饒ひ彌磨鍊して這の田地に到ることを得るも、亦未だ汝が意に順す可らざること所在。直に無漏の聲身を證せんを待つて、始めて逆行順行す可し」と。所以に雪竇道く、「生を悲しんで空しく懊惱す。」維摩經に云く、「衆生に病有るが爲の故に、我れも亦病有り」と。懊惱は則ち悲絶なり、疾に毗耶離に臥すとは、維摩疾を毗耶離城に示すなり。唐の時王玄策、西域に使用して、其の居を過る、遂に手板を以て、縱横其の室を量るに、十笏を得たり、因つて方丈と名く、「全身太だ枯槁す。」因に身の疾を以て、廣く爲に説法して云く、「是の身無常無強、無力無堅にして速朽の法なり、信す可らず。苦を爲し惱を爲す、衆病の集る所、乃至、陰界入の共に合成する所なり。」七佛の祖師來る」と。文殊は是れ七佛の祖師、世尊の旨を承けて彼に往いて疾を問ふ。「一室且つ頻りに掃ふ」と、方丈の内皆所有を除去して、唯だ一榻を留め、文殊の至るを等つて、不二法門を請問す。所以に雪竇道く、「不二法門を請問す、當時便ち靠倒す」と。

⑦壽禪師垂誡に云く、若し心肝を割くに、木石の如くに相似たらば、便ち肉を食ふべし、若し酒を喫すること、屎尿を喫するが如くに相似たらば、便ち酒を飲むべし、若し漏止の男女を見ること、死尸の如くに相似たらば、便ち淫を行すべし、若し己財他財を見ること、糞土の如くに相似たらば、便ち盜を侵すべし、饑ひ你饑得して、此の田地に到るとも、亦未だ汝が意に順ふ可らざること所在、直に無量の聖身を證するを待つて、始めて世間逆順の事を行すべし。
⑧維摩經問疾品。
⑨廣額に、「懊惱は痛聲。」

維摩口、圓擔に似たり、如今の禪和子、便ち道ふ、「無語是れ靠倒」と。且く錯つて定盤星を認むること莫れ。雪竇萬仞懸崖の上に撈到して卻つて云く、「靠倒せず」と。一手擡一手擲、他這般の手脚有り、直に是れ用ひ得て玲瓏なり。此は前回に拈じて維摩什麼とか道ひしと云ふを頌す、「金毛の獅子討ぬるに處無し」と。但だ當時のみに非ず、即今も也た恁麼、還つて維摩老を見る麼。盡山河大地、草木叢林、皆變じて金毛の獅子と作るも、也た摸索不著ならん。

第八十五則

垂示に云く、世界を把定して、鐵毫を漏さず。盡大地の人、鋒を亡じ舌を結ぶ、是れ禪僧の正令なり。頂門に光を放つて、四天下を照破す、是れ禪僧金剛の眼睛なり。鐵を點じて金と成し、金を點じて鐵と成す、忽ちに擒忽ちに縦、是れ禪僧の拄杖子なり。天下の人の舌頭を坐斷して、直に氣を出す處なく、倒退三千里なることを得る、是れ禪僧の氣宇なり。且く道へ、總に不恁麼の時、畢竟是れ箇の什麼人ぞ。試みに舉す看よ。

- ① 摩曰く、毘耶離は國土の名なり、秦には廣嚴と言ふ、其の土平廣にして嚴事あり、因つて以て名と爲すなり。
- ② 姓は王、名は支婁。
- ③ 唐の會要に曰く、「笏は周の制なり、周禮に諸侯は象、大夫は魚鱗、士は竹を以てす、晉宋以來之を手板と謂ふ云云。」
- ④ 以下合成する所なりに至る、本經の方便品。
- ⑤ 摩曰く、陰は五陰、界は十八界、入は十二入、此の三法假りに合して身を成す、猶ほ空聚一として寄る可き無き若し。
- ⑥ 祖庭事苑第二に云く、七佛の祖師は文殊を指すなり、盧胎經を按ずるに、文殊の偈に云く、「我が佛身を成するを計るに、此の刹最小有り、座中疑有るが故に、胎に於て變化有り、我が身數塵の如し、今他

【本則】 舉す、僧、桐峰庵主の處に到つて便ち問ふ、「這裡忽ち大蟲に逢はん時、又作麼生。」(作家影を弄する漢、草窠裏一箇半箇。)庵主便ち虎聲を作す。(錯を將て錯に就く、卻つて牙爪有り、同生同死、言を承けては須らく宗を會すべし。)僧便ち怕る、勢を作す。(兩箇泥團を弄する漢機を見て作す、似たることは則ち也た似たり、是なることは則ち未だ是ならず。)庵主呵々大笑す。(猶ほ些子に較れり、笑中に刀有り、亦能く放、亦能く收。)僧云く、「這の老賊。」(也た須らく識破すべし、敗也、兩箇都て放行す。)庵主云く、「老僧を爭奈何せん。」(劈耳便ち掌せん、惜む可し放過することを、雪上に霜を加ふ又一重。)僧休し去る。(恁麼に休し去る、二り俱に了せず、蒼天蒼天。)雪竇云く、「是は則ち是、兩箇の惡賊、只だ耳を掩うて鈴を偷むことを解す。」(言猶ほ耳に在り、他の雪竇の點檢に遭ふ、且く道へ當時什麼生か點檢を免れ得べき、天下の禪僧到らじ。)【評唱】 大雄の宗派下に、四庵主を出す、大梅・白雲・虎溪・桐峰なり。看よ他の兩人恁麼に眼親しく手辨することを。且く道へ、誦訛什麼の處に在る。古人一機一境、一言一句、然も出する時に臨むに在りと雖も、若し

- の國土に在りて、三十二相明にして在現せずと云ふこと無し、昔は能仁師と爲り、今乃ち弟子と爲る、佛道極めて廣大、清淨にして増減無し、我れ佛身を現せんと欲す、二尊竝び立たず、此の界既に教を受く、我が刹に佛身を見さん。
- ⑦ 以下疾を問ふに至る、本經問疾品。
- ⑧ 以下不二法門を請問すに至る、本經問疾品。
- ⑨ 摩は靠倚、推し倒すを靠倒と云ふなり。
- ⑩ 圓擔は、への字なりに結びたる、言はぬ口元に譬へたるなり、圓は平たく、擔は荷なひ棒を云ふ、棒のしわりたる形。
- 【本則】 東嶺禪師云く、八十五則、便ち桐峰の機鋒高しと雖も、宗旨又別に道理有ることを明

是れ眼目周正なれば、自然に活潑潑地なり。雪竇拈じて、人をして邪正を識り得失を辨せしむ。然も此の如くなりとも雖も、他の達人分上に在つて、得失に處すと雖も、卻つて得失無し。若し得失を以て、他の古人を見れば、則ち沒交渉。如今の人須らく是れ各各窮めて得失無き處に到つて、然る後に得失を以て人を辨すべし。若し一向に言句を揀擇する處に去つて用心せば、又幾時に到つてか了することを得去らん。見すや、雲門大師道く、「行脚の漢、只だ空しく遊州獵縣すること莫れ、只だ閑言語を提、擲することを得んと欲して、老和尚の口の動するを待つて、便ち禪を問ひ道を問ひ、向上向下、如何若何と。大卷に抄し將ち去つて、肚皮裏に壑向して卜度し、到る處の火爐邊に三箇五箇、頭を聚め口を擧つて、喃喃地にして便ち道ふ、「這箇は是れ公才の語、這箇は是れ身に就いて打出する語、這箇は是れ事上に道ふ底の語、這箇は是れ體裏の語。」備が屋裏の老爺老娘を體む。飯を噉卻し了つて、只管に夢を説いて、便ち我れ佛法を會し了れりと道ふ。將に知んぬ恁麼の行脚、驢年にも休歇し去ることを得んや。古人暫時の間の拈弄、豈に勝負得失是非等の見有らんや。桐峰臨濟に見ゆ、其の時深山に在つて庵を卓つ。這の僧彼の中に到つて遂に問ふ、「這裏忽ち大蟲に逢はん時又作麼生。」峯便ち虎聲を作す、也た好し事に

- ①臨濟は是れ百丈の法孫、故に大雄宗派下と云ふ、四庵主は即ち臨濟の法嗣なり。
- ②以下、休歇し去ることを得んやに至る、雲門上堂の語。
- ③擲は持なり、按なり。
- ④抄は寫なり。
- ⑤喃喃は多言の貌。
- ⑥公界上才の語。
- ⑦體は物狀を體するなり、體屋裏の語を謂ふ。
- ⑧老爺老娘は、父母、即ち自己の主人公なり。

就いて便ち行す。這の僧也た錯を將て錯に就くことを會して、便ち怕るゝ勢を作す、庵主呵呵大笑す。僧云く、「這の老賊。」峯云く、「老僧を爭奈何せん。」是なることは則ち是、二り俱に了せず、千古の下、人の點檢に遭ふ。所以に雪竇道く、「是は則ち是、兩箇の惡賊、只だ耳を掩ふて鈴を偷むことを解す」と。他の二人皆是れ賊なりと雖も、機に當つて卻つて用ひす、所以に耳を掩ふて鈴を偷む。此の二老百萬の軍陣を排して、卻つて只だ掃帚を闘はしむるが如し。若し此の事を論せば、須らく是れ人を殺すに眼を眩せざる底の手脚なるべし。若し一向に縦にして擒せず、一向に殺して活せずんば、人の怪笑に遭はんことを免れず。然も是の如くなりとも雖も、他の古人亦許多の事無し。看よ他の兩箇の恁麼、總に是れ機を見て作す。五祖道く、「神通遊戲三昧、慧炬三昧、莊嚴王三昧。」自らは是れ後人脚跟地に點せず、只だ去つて古人を點檢して便ち道ふ、「得有り失有り。」有る底は道ふ、「分明に是れ庵主落節す」と、且得沒交涉。雪竇道ふ、「他の二人相見、皆放過の處有り」と。其の僧道ふ、「這裏忽ち大蟲に逢はん時又作麼生。」峯便ち虎聲を作す、此は是れ放過の處なり。乃至道ふ、「老僧を爭奈何せん」と、此れ亦放過の處なり。著著第二機に落在す。雪竇道く、「用ひんと要せば便ち用ひよ」と。如今の人恁麼に道ふことを聞いて便ち道ふ、「當時好し與に令を行するに、且く盲柳瞎棒すること莫れ、只だ德山門に入れば便ち棒し、臨濟門に入れば便

- ①淮南子説山訓に曰く、范子が敗に其の鐘を竊んで、負うて走る者有り、鎗然として聲有り、人之之を聞かんことを懼る、遽に其の耳を掩ふ、人之之を聞くことを憎むは可なり、自ら其の耳を掩ふは悖れり。

ち喝するが如きんば、且く道へ、古人の意如何。「雪竇後面に便ち只此の如く頌出す、且く道へ、畢竟作麼生か耳を掩うて鈴を偷むことを免れ得去らん。頌に云く、

【頌】之を見て取らざれば、(蹉過了也、已に是れ千里萬里)之を思ふこと千里。(悔らくは當初を慎まざりしことを、蒼天蒼天。)好箇斑斑。(閻黎自領出去、爭奈せん未だ用を解せざる在ることを。)爪牙未だ備らす。(只だ恐らくは用處明かならざらんことを、爪牙の備はらんを待つて備に向つて道はん。)君見すや大雄山下に忽ち相逢ふ。(條有れば條を攀ち條無くんば例を攀づ。)落落たる聲光皆地に振ふ。(這の大蟲卻つて恁麼に去る、猶ほ此子に較れり、幾箇の男兒か是れ丈夫。)大丈夫見るや也た無や。(老婆心切、若し眼を開くを解せば同生同死、雪竇葛藤を打す。)虎尾を收め虎鬚を持つ。(忽然として突出せば如何が收めん、天下の衲僧を收めて這裏に在く、忽ちに箇の出で來る有らば便ち一撈を與へん、若し收むること無くんば備に三十棒を放す、備をして身を轉じ氣を吐かしむ。喝、打つて云く、何ぞ這の老賊と道はざる。)

【評唱】「之を見て取らざれば之を思ふこと千里。」正に嶮處に當つて、都て使ふこと能はず、他の老僧を爭奈何せんと道はんを等つて、好し本分の草料を與ふるに。當時若し這の手脚を下し得ば、他必らず須らく後語有るべし。二人只だ放つことを解して收むることを解せず、之を見て取らざれば、早く是れ白雲萬里、更に什麼の之を思ふこと千里とか説かん。「好箇斑斑、爪牙未だ備らす。」是は則ち是、箇

の大蟲也た牙を藏し爪を伏することを解す。爭奈せん人を咬むことを解せざることを。「君見すや大雄山下に忽ち相逢ふ、落落たる聲光皆地に振ふ。」百丈一日黃檗に問うて云く、「什麼の處より來る。」檗云く、「山下に菌子を探り來る。」丈云く、「還つて大蟲を見る麼。」檗便ち虎聲を作す、丈腰下に於て、斧を取つて斫る勢を作す、檗約住して便ち掌す。丈晚に至つて上堂して云く、「大雄山下に一の虎有り、汝等諸人出入に切に須らく好く看るべし、老僧今日親しく一口に遭ふ」と。後來瀉山仰山に問ふ、「黃檗の虎話作麼生。」仰云く、「和尚の尊意如何。」瀉山云く、「百丈當時合に一斧に斫殺すべし、什麼に因つてか此の如くなるに到る。」仰山云く、「然らず。」瀉山云く、「子又作麼生。」仰山云く、「唯だ虎頭に騎るのみにあらず、亦虎尾を收むることを解す。」瀉山云く、「寂子甚だ嶮崖の句有り。」雪竇引き用ひて前面の公案を明す、聲光落落大地に振ふ。這箇の些子、轉變自在にして、句中に出身の路有らんことを要す。「大丈夫見るや也た無や。」還つて見る麼、虎尾を收め虎鬚を持つることを。也た須らく是れ本分なるべし。任ひ備虎尾を收め虎鬚を持つるも、未だ免れず一時に鼻孔を穿御せらるゝことを。

第八十六則

垂示に云く、世界を把定して、絲毫を漏さず。衆流を截斷して、涓滴を存せず。口を開けば便ち錯り、擬議すれば即ち差ふ。且く道へ、作麼生か是れ透關底の眼。試みに道へ看ん。

【本則】 擧す、雲門垂語して云く、「人々盡く光明の在るあり。(黒漆桶) 看る時見えず暗昏々。(看る時暗す) 作麼生か是れ諸人の光明。」(山は是れ山、水は是れ水、漆桶裏に黒汁を洗ふ。) 自ら代つて云く、「厨庫三門。」(老婆心切、葛藤を打して什麼か作ん。) 又云く、「好事も無きには如かず。」(自ら知ぬ一半に較ることを、猶ほ些子に較れり。)

【評唱】 雲門室中に垂語して人を接す、爾等諸人の脚跟下に、各各一段の光明有り。今古に輝騰して、迦かに見知を絶す。然も光明なりと雖も、恰も問著するに到つて又會せず、豈に是れ暗昏昏地なるにあらずや。二十年垂示するに、都て人の他の意を會する無し。香林後來代語を請ふ、門云く、「厨庫三門。」又云く、「好事も無きには如かず」と。尋常代語は只だ一句、什麼と爲てか這裏卻つて兩句なる。前頭の一句爾が爲に略一線路を開いて爾をし

て見せしむ。若し是れ箇の漢ならば、聊か擧著するを聞いて、別起して便ち行かん。他人の此に滞在せんことを怕れて、又云く、「好事も無きには如かず。」依前として爾が與に掃卻す。如今の人纔かに光明を擧著するを聞いて、便ち去つて瞠眼して云く、「那裏か是れ厨庫、那裏か是れ三門」と。且得沒交涉。所以に道ふ、「鉤頭の意を識取せよ、定盤星を認むること莫れ」と。此の事眼上に在らず、亦境上に在らず。須らく是れ知見を絶して得失を忘じ、淨裸裸赤漉漉として、各各當人分上に究取して始

【本則】 東嶺禪師云く、八十六則、便ち雲門室中別に道理有るを明す、雪竇の頌に、自照孤明を列すと曰ふ、先師其だ雲門宗の眞の名劍なりと嘆す、古今の評判は搥に取る可らず。

めて得べし。雲門云く、「日裏に來往し、日裏に人を辨す、忽然として半夜、日月燈光無きに、曾て到る處、則ち故に是、未だ曾て到らざる處に、一件の物を取らん、還つて取り得てん麼。」參同契に云く、「明中に當つて暗有り、暗相を以て觀ること勿れ、暗中に當つて明有り、明相を以て遇ふこと勿れ。」若し明暗を坐斷せば、且く道へ、是れ箇の什麼ぞ。所以に道ふ、「心花發明して、十方刹を照す」と。盤山云く、「光、境を照すに非ず、境亦存するに非ず、光境俱に亡す、復た是れ何物ぞ。」又云く、「此の見聞に即して見聞に非ず、餘の聲色の君に呈す可き無し。箇の中若し了せば全く無事ならん、體用何ぞ妨げん分と不分と。」但だ最後の一句を會取して了つて、卻つて前頭に去つて游戲せば、畢竟裏頭に在つて活計を作さず。古人道く、「無住の本を以て、一切の法を立す」と。這裏に去つて光影を弄し精魂を弄することを得ざれ、又無事の會を作すことを得ざれ。古人道く、「寧ろ有の見を起すと須彌山の如くなる可くとも、無の見を起すと芥子許の如くもす可らず。」二乗の人多く偏に此の見に墜つ。雪竇の頌に云く、

① 圓覺の第五普覺菩薩の章の文。
② 此の見聞より、不分とに至る三平義忠の頌、傳燈の三に見えたり。
③ 維摩經觀衆生品に云く、文殊師利又問ふ、「虛妄分別執れをか本と爲す、答へて曰く、「願倒想を本と爲す、又問ふ、「願倒想執れをか本と爲す、答へて曰く、「無住を本と爲す、又問ふ、「無住執れをか本と爲す、答へて曰く、「無住は則ち本無し、文殊師利、無住の本より一切の法立す。
④ 楞嚴經要鈔第一に、龍樹の云く、「寧ろ有の見を起すこと須彌山の如くすとも、空見を起すこと芥子許の如くもすべからず。」

【頌】 自照孤明を列す。(森羅萬象、賓主交參す。鼻孔を裂轉す、瞎漢什

麼か作ん。君が爲に一線を通す。(何ぞ止だ一線のみならん十日並照す、一線道を放つことは即ち得たり。)花謝して樹に影無し。(葛藤を打せば什麼の了期か有らん、什麼の處に向つてか摸索せん、黒漆桶裏に黒汁を盛る。)看る時誰か見ざらん。(瞎、總に扶維摸壁す可らず、兩瞎三瞎。)見不見。(兩頭俱に坐斷す、瞎。)倒に牛に騎つて佛殿に入る。(中れり、三門合掌す、我に話頭を還し來れ、打つて云く、什麼の處に向つてか去る。雪竇也た只だ鬼窟裏に向つて活計を作す。還つて會すや、半夜日頭出で日午に三更を打す。)

【評唱】「自照孤明を列す。」自家の脚跟下、本此の一段光明有り、只だ是れ尋常用ひ得て暗し。所以に雲門大師、備が與に此の光明を羅列して、備が面前に在く。且く作麼生か是れ諸人の光明、厨庫三門。此は是れ雲門孤明を列する處なり。盤山道く、「心月孤圓にして、光萬像を含む」と。這箇使ち是れ眞常獨露。然して後君が與に一線を通す、亦人の厨庫三門の處に著在せんことを怕る。厨庫三門は則ち且く從卻す。朝花亦謝し、樹亦影無し。

①眞常常住。從卻は從他の義、任すこと。

日又落ち、月又暗し。盡乾坤大地、黒漫漫地、諸人還つて見る麼、看る時誰か見ざらん。且く道へ、是れ誰か見ざる。這裏に到つて、明中に當つて暗有り、暗中に明有り、皆前後の歩の如し、自ら見る可し。雪竇云く、「見不見」と、好事も無きには如かすと云ふことを頷す。見合して又不見、明合して又不明。倒に牛に騎つて佛殿に入る。」黒漆桶裏に入り去る。須らく是れ備自ら牛に騎つて佛殿に入り、是れ箇の什麼の道理ぞと道ふことを看るべし。

第八十七則

垂示に云く、明眼の漢は窺白没し。有る時は孤峰頂上草漫々、有る時は鬧市裏頭赤灑々。忽ち若し忿怒の那吒、三頭六臂を現じ、忽ち若し日月面、普攝の慈光を放ち、一塵に於て一切身を現じ、隨類人となつて、和泥合水。若し向上の竅を撥著せば、佛眼も也た観ることを著す。設使ひ千聖出頭し來るも、也た須らく倒退三千里なるべし。還つて同得同證の者ありや。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、雲門、衆に示して云く、「藥病相治す。(一合相不可得。盡大地是れ藥。(苦瓠は根に連りて苦く、一邊に擺向す。)那箇か是れ自己。」(甜瓜は蒂に徹して甜し、那裏よりか這の消息を得來る。)

【評唱】雲門道く、「藥病相治す、盡大地是れ藥、那箇か是れ自己」と。諸人還つて出身の處有り麼。二六時中、壁立千仞なることを管取せよ。徳山の棒雨點の如く、臨濟の喝雷奔に似たることは則ち且く致く。釋迦は自ら釋迦、彌勒は自ら彌勒。未だ落處を知らざる者は、往往に喚んで藥病相投するの會を作し去る。世尊四十九年、三百餘會、機に應じて教を説く。

【本則】東嶺禪師云く、八十七則、便ち雲門の宗旨得るに隨つて益進むを明す。

先師曰く、是れ向上の金鷄一粒粟、著語して曰く、三叉路口盡く、大地是れ藥、著語して曰く、門に風字を題す、那箇か是れ自己、著語して曰く、板齒朱砂を咬む、先師頷を作りて曰く、藥病誰れ相治す、

皆是れ病に應じて薬を與ふ、蜜果を將て苦葫蘆に換ふるが如くに相似たり。既に汝諸人の業根を洵つて、灑灑落落たらしむ。盡大地是れ藥、爾什麼の處に向つてか拈を挿まん。若し拈を挿み得ば、爾に許す身を轉じ氣を吐く處有つて、便ち親しく雲門を見ることを。爾若し回顧躊躇せば、拈を挿むことを得ざることを管取せん。雲門爾が脚跟底に在り、藥病相治、也た只

火を求むるは水を求むるが如し、苦瓜と甜瓜と、昨日懸滿地。
①管取は「してとる」と譯す。
②已下に金身を現じてに至る、雪竇の語。
③天光は天曉と同じ。

だ是れ尋常の語論、爾若し有に著すれば、爾が與に無と説き、爾若し無に著すれば、爾が與に有と説き、爾若し不有不無に著すれば、爾が與に糞掃堆上に去つて、丈六の金身を現じて、頭出頭沒す。只だ如今盡大地森羅萬象、乃至自己、一時に是れ藥。恁麼の時に當つて、卻つて那箇を喚んでか是れ自己とせん。爾一向に喚んで薬と作さば、彌勒佛下生にも、也た未だ夢にだも雲門を見ざることを在らん。畢竟如何、鈎頭の意を識取せよ、定盤星を認むること莫れ。文殊一日、善財をして去つて薬を探らしめて云く、「是れ藥ならざる者を探り將ち來れ。」善財徧く探るに、是れ藥ならざる無し。卻り來つて白して云く、「是れ藥ならざる者無し。」文殊云く、「是れ藥なる者を探り將ち來れ。」善財乃ち一枝草を拈じて、文殊に度與す。文殊提起して衆に示して云く、「此の藥亦能く人を殺し、亦能く人を活す」と。此の藥病相治の話、最も看難し。雲門室中尋常用て人を接す。金鵝長老、一日雪竇を訪ふ、他は是れ箇の作家、乃ち臨濟下の尊宿、雪竇と此の藥病相治の話を論ず。一夜天光に至り、方に能く善を盡

す。這裏に到つて、學解思量計較、總に使ふことを著す。雪竇後に頌有り、他に送つて道く、「藥病相治見ること最も難し、萬重の關鎖太だ端無し、金鵝道者來つて相訪ふ、學海の波瀾一夜に乾く。」雪竇後面に頌し得て最も工夫有り、他の意亦實に在るか亦主に在るか、自ら見る可し。頌に云く、
【頌】 盡大地是れ藥、誰をして的を辨せしめん、沙を撒し土を撒す、高處に架して看よ。古今何を太だ錯る。(言中に響有り、一筆に勾下す、咄。) 門を閉ちて車を造らす。(大小の雪竇衆の爲に力を竭す、禍私門より出づ、坦蕩として一絲毫を掛けず、阿誰か閑工夫有らん、鬼窟裏に向つて活計を作す。) 途に通すれば自ら寥廓たり。(脚下便ち草に入る、馬に上つて路を見る、手に信せて拈じ來る、妨げず奇特なることを。) 錯々。(雙劍空に倚つて飛ぶ、一箭雙鵰を落す。) 鼻孔遼天も亦穿卻す。(頭落ちぬ、打つて云く、穿卻了也。)
【評唱】「盡大地是れ藥、古今何を太だ錯る。爾若し喚んで藥の會を作さば、自古自今一時に錯り了れり。雪竇云く、「有般の漢、大梅の脚跟を截斷すること」を解せずして、只管に道ふ、程を食ること太だ遠かなり。」他は雲門

④韻英集下卷の題に曰く、金鵝和尚藥病を語るに因て。
⑤禪林類聚十三大梅の常禪師、臨終に徒に示して曰く、來るも仰ぐべき莫く、往くも追ふべき莫し。從容として颺風鳥の鳴くを聞いて、乃ち曰く、此の物に即して他物に非ず、汝善く護持せよ、吾れ當に逝くべし。雪竇曰く、者の誕生前葬前、死後顧頌、此の物に即して他物に非ず、是れ何物ぞ、還つて分付の處有りや也た無や、有般の漢は、大梅の脚跟を截斷することを解せずして、只管に道ふ、程を食ること太だ遠なり。
⑥已下頭出頭沒に至る、雪竇後錄上堂、雲門大師の禪河浪に隨つて靜に、山河大地是れ浪にあらすやと云ふを擧しての拈語、圓悟誤りて雲門と作す。

の脚眼を截つことを解す、雲門の這の一句、天下の人を惑亂するが爲なり。
 雲門云く、「拄杖子是れ浪ならば、欄に許す七縦八横。盡大地是れ浪ならば、
 看よ欄が頭出頭没することを。」門を閉ちて車を造らず、途に通すれば自ら寥廓たり。「雪竇云く、「欄
 が爲に一線路を通す、欄若し門を閉ちて車を造り、門を出でて轍に合せば、箇の甚の事をか濟さん。
 我が這裏門を閉ちて也た車を造らず、門を出づれば自然に寥廓たり。他這裏に略些子の縫罅を露して
 人をして見せしむ。」又連忙して卻つて道ふ、「錯錯」と。前頭も也た錯、後頭も也た錯、誰か知る雪竇
 一線路を開くも、也た是れ錯なることを。既に然も鼻孔遼天、什麼と爲てか也た穿卻す。會せんと要
 す麼、且く參せよ三十年。欄に拄杖子有らば、我れ欄に拄杖子を與へん、欄若し拄杖子無くんば、免
 れず人に鼻孔を穿卻せらるゝことを。

①文選に、「門を開ちて車を造り、戸を出づれば轍に合す。」

第八十八則

垂示に云く、門庭の施設、且く慙麼に二を破つて三と作す、入理の深談也た須らく是れ七穿八穴なるべし。當機敲點、金鎖玄關を擊碎す。令に據つて行す、直に得たり蹤を掃ひ跡を滅することを。且く道へ、誦說什麼の處にか在る。頂門の眼を具する者、請ふ試みに擧す看よ。

【本則】擧す、玄沙衆に示して曰く、「諸方の老宿盡く道ふ、接物利生と。(分に隨つて箇の鋪席を

開く、家の豊儉に隨ふ。)忽ち三種の病人來るに遇はゞ、作麼生か接せん。(草を打つことは只だ蛇の驚かんことを要す。山僧直に得たり目瞪し口呿することを、倒退三千里せんことを管取せよ。)患盲の者は、拈鏡豎拂、他又見す。(端的瞎す、是れ則ち接物利生、未だ必らずしも見ざることを在り。)患聾の者は、語言三昧、他又聞かす。(端的聾す、是れ則ち接物利生、未だ必らずしも聾せざることを在り、是れ那箇か未だ聞かざることを在り。)患啞の者は、伊をして説かしむるも、又説き得ず。(端的啞す、是れ則ち接物利生、未だ必らずしも啞せざることを在り、是れ那箇か未だ説かざることを在り。)且く作麼生か接せん。若し此の人を接し得ずんば、佛法靈驗無からん。)(誠なるかな是の言、山僧手を拱して歸降せん、已に接し了れり。便ち打つ。)僧、雲門に請益す、(也た諸方共に知らんことを要す。着。)雲門云く、「汝禮拜著せよ。」(風行けば草偃す、咄。)僧禮拜して起つ。(這の僧拄杖子を拗折す。)雲門拄杖を以て拄く。僧退後す。門云く、「汝是れ患盲にあらず。」(端的瞎す、這の僧患盲と道ふこと莫くんば好し。)復た近前來と喚ぶ、僧近前す。(第二杓の惡水澆ぐ、觀音來也、當時好し一喝を與ふるに。)門云く、「汝是れ患聾にあらず。」(端的聾す、這の僧患聾と道ふ莫くんば好し。)門乃ち云く、「還つて會すや。」(何ぞ本分の草料を與へざる、當時好し聲を作すこと莫き。)僧云

【本則】東嶺禪師云く、八十八則、偈ち玄沙の三種病、只だ受用自在の雲門のみ有ることを明す。先師頌を作りて曰く、釣鉢水を絞る謝郎が舟、明眼の納僧暗に愁を結ぶ、白紙端無く六字を書す、此の僧昨日岩頭よりす。

く、「不會。」(兩重の公案、蒼天蒼天。)門曰く、「汝是れ患啞にあらす。」(端的啞す、口吧吧地、這の僧啞と道ふこと莫くんば好し。)僧此に於て省あり。(賊過ぎて後弓を張る、什麼の碗をか討ねん。)

【評唱】 玄沙參じて情塵意想を絶して、淨裸赤灑灑地の處に到つて、方に恁麼に道ふことを解す、是の時諸方の列刹相望む。尋常衆に示して云く、「諸方の老宿盡く道ふ、接物利生と。忽ち三種病人の來るに遇はん時、作麼生か接せん。患旨の者は、拈鏡豎拂、他又見えす。患聾の者は、語言三昧、他又聞かす。患啞の者は、他をして説かしむるも、又説くことを得ず。且く作麼生か接せん。若し此の人を接することを得ずんば、佛法靈驗無し」と。

如今の人若し盲聾瘖啞の會を作さば、卒に摸索不着ならん。所以に道ふ、「句中に向つて死卻すること莫れ。」須らく是れ佗の玄沙の意を會して始めて得べし。玄沙常に此の語を以て人を接す。僧有り、久しく玄沙の處に在り、一日上堂す。僧問ふ、「和尚云ふ、三種病人の話、還つて學人が道理を説くことを許さんや也た無や。」玄沙云く、「許す。」僧便ち珍重して下り去る。沙云く、「不是不是」と。這の僧他の玄沙の意を會得す。後來法眼云く、「我れ 地藏和尚の這の僧の語を擧するを聞いて、方に三種病人の話を會す」と。若し這の僧不會と道はゞ、法眼什麼と爲てか卻つて恁麼に道ふ、若し他會すと道はゞ、玄沙什麼と爲てか卻つて道ふ、「不是不是」と。一日地藏道く、「某甲聞く、和尚に三種病人の話有りと、是なりや否

①玄沙は、青原下六世靈暉の法嗣、傳燈十八、會元第七に傳あり。
 ②地藏瑤瑤は、青原下七世玄沙の法嗣、傳燈二十七、會元第八に傳あり。

や。」沙云く、「是。」藏云く、「瑤瑤現に眼耳鼻舌有り、和尚作麼生か接せん。」玄沙便ち休し去る。若し玄沙の意を會得せば、豈に言句上に在らんや。他の會する底自然に殊別なり。後僧有り、雲門に擧似す、門便ち他の意を會して云く、「汝禮拜著せよ。」僧禮拜して起つ、門拄杖を以て 拈く。這の僧退後す。門云く、「汝是れ患旨にあらす。」復た近前來と喚ぶ、僧近前す、門云く、「汝是れ患聾にあらす。」乃ち云く、「會す麼。」僧云く、「不會。」門云く、「汝是れ患啞にあらす。」其の僧此に於て省有り。當時若し是れ箇の漢ならば、他の禮拜著せよと道はんを等つて、便ち與に禪床を掀倒せば、豈に許多の葛藤有ることを見んや。且く道へ、雲門と玄沙と會處、是れ同か是れ別か、他の兩人の會處、都て只だ一般なり。看よ 他の古人出で來つて、千萬種の方便を作すことを。意鈞頭上に在り、多少か 苦口なる。只だ諸人をして各各此の一段の事を明めしむ。

五祖老師云く、「一人は説き得て卻つて不會、一人は卻つて會して説き得ず、二人若し來參せば、如何が他を辨得せん。若し這の兩人を辨することを得ずんば、人の爲に粘を解き縛を去り得ざること不在らんことを管取せよ。若し辨得せば、纔かに門に入るを見て、我れ便ち草鞋を著けて、偏が肚裏に向つて走ること幾遭し了れり。猶ほ自ら省せずんば、什麼の碗をか討ね出で去らん」と。且く盲聾瘖啞の會を作すこと莫くんば好し。若し恁麼に計較せば、所以に道ふ、「眼色を見て盲の如く等しく、耳聲を聞いて聾の如く等しく。」又道く、「滿眼色を視

①拈は撥なり。
 ②玄沙、雲門。
 ③苦口、叮嚀。
 ④碗の字別に意義なし。
 ⑤福本に此の句無し。

す、滿耳聲を聞かず。① 文殊常に目に觸れ、② 觀音耳根に塞る。③ 這裏に到つて眼見て盲の如くに相似、耳聞いて聾の如くに相似て、方に能く玄沙の意と多きことを争はざれ。諸人還つて盲聾瘖底の漢子の落處を識る。雪竇の頌を看取せよ。云く、

【頌】 盲聾瘖啞、(已に言前に在り、三竅俱に明なり、已に一段と做し了れり。) 杳として機宜を絶す。(什麼の處に向つてか摸索せん。還つて計較を做し得てんや、什麼の交渉か有らん。) 天上天下、(正理自由、我も也た恁麼。) 笑ふに堪へたり悲むに堪へたり。(箇の什麼をか笑ひ箇の什麼をか悲まらん。半明半暗。) 離婁正色を辨せず、(瞎漢、巧匠蹤を留めず、端的瞎す。) 師曠豈に玄絲を識らんや。(聾漢、大功は賞を立せず、端的聾す。) 争か如かん獨坐虛窓の下、(須らく是れ恁麼にして始めて得べし。鬼窟裏に向つて活計を作すこと莫れ。一時に漆桶を打破す。) 葉落花開いて自ら時あらんには。(即今什麼の時節ぞ、切に無事の會を作すことを得ざれ。今日も也た朝より暮に至り、明日も也た朝より暮に至る。) 復た云く、還つて會すや也た無や。(重説偈言。) 無孔の鐵鏡。(自領出去、惜む可し放過することを。便ち打つ。)

①以下、耳根に塞るに至る、長沙峯禪師の偈、傳燈第十に見たり。
②文殊の知見。
③觀音の三摩地。

【評唱】 「盲聾瘖啞、杳として機宜を絶す。」 偏が見と不見と、聞と不聞と、説と不説とを盡して、雪竇一時に偏が與に掃卻し了れり。直に得たり盲聾瘖啞の見解、機宜計較、一時に杳として絶して、總に用

不着なることを。這箇向上の事、謂つ可し眞盲眞聾眞啞、機無く宜無しと。「天上天下、笑ふに堪へたり悲むに堪へたり。」雪竇一手擲一手搦。且く道へ、箇の什麼をか笑ひ、箇の什麼をか悲む。笑ふに堪へたり、是れ啞卻つて啞せず、是れ聾卻つて聾せざることを。悲むに堪へたり、明明として盲せずして盲つて盲し、明明として聾せずして聾することを。離婁正色を辨せず、青黃赤白を辨する能はず、正に是れ瞎。離婁は黃帝の時の人なり、百歩の外能く秋毫の末を見る、其の目甚だ明かなり。① 黃帝赤水に遊んで珠を沈む、離婁をして之を尋ねしむるに見えず、契詔をして之を尋ねしむるに亦得ず。後に象罔をして之を尋ねしめて方に之を獲たり。故に云く、「象罔到る時光燦爛、離婁行く處浪滔天」と。這箇高處の一著、直に是れ離婁が目も、亦他の正色を辨することを得ず。師曠豈に玄絲を識らんや。周の時絳州晉の景公の子なり。師曠字は子野(一)に云く、晉の平公の樂太師なり、善く五音六律を別つ、山を隔て、蟻の鬪ふを聞く。時に晉、楚と覇を争ふ、師曠唯だ琴を鼓して、風絃を撥動して、戦は楚の必らず功無からんことを知る。然も是の如くなりと雖も、雪竇道く、「他尙は未だ玄絲を識らざること有り。」 聾せざる卻つて是れ聾底の人、這箇高處の玄音、直に是れ師曠亦識り得ず。雪竇道く、「我れ亦離婁と作らず、亦師曠と作らず、争か如かん虛窓の下に獨坐して、

①以下之を獲たりに至る、莊子天地篇の文なり。
②汾陽十八問の中情事問に、僧、風穴に問ふ、「大海に珠有り、如何が取り得ん、」次云く、「象罔云云。」無心也。
③離婁云く、「師曠は晉の賢大夫なり、音律を善くして能く鬼神を致す、」史記に云く、「襄州南和の人、生れながらにして目無し。」

葉落ち花開いて自ら時有らんには。若し此の境界に到らば、然も見ると雖も見ざるに似たり、聞けども聞かざるに似たり、説けども説かざるに似たり。飢うれば即ち喫飯し、困すれば即ち打眠す、任佗あれ葉落ち花開くことを。葉落つる時は是れ秋、花開く時は是れ春、各各自ら時節有り。雪竇懶が與に一時に掃蕩し了れり。又一線道を放つて云く、「還つて會すや也た無や」と。雪竇力盡き神疲れて、只だ箇の無孔の鐵鏈と道ひ得たり。この一句急に眼を著けて看ば方に見ん、若し擬議せば又蹉過せん。師拂子を舉して云く、「還つて見る麼。」遂に禪床を敲くこと一下して云く、「還つて聞く麼。」禪床を下つて云く、「還つて説得す麼。」

第八十九則

垂示に云く、通身是れ眼、見不到。通身是れ耳、聞不及。通身是れ口、説不著。通身是れ心、鑒不出。通身是れ即ち且く止く。忽ち若し眼無くんば作麼生か見ん。耳無くんば作麼生か聞かん。口無くんば作麼生か説かん。心無くんば作麼生か鑒せん。若し這裡に向つて一線道を撥轉し得ば、便ち古佛と同參。參は則ち且く止く、箇の什麼人にか參せん。

【本則】 擧す、雲巖、道吾に問ふ、「大悲菩薩、許多の天眼を用ひて、什麼をか作す。」(當時好し本分の草料を與ふるに、備尋常走上走下什麼をか作ん。閑黎問うて什麼か作ん。)吾云く、「人の夜半

に背手にして枕子を摸るが如し。」(何ぞ本分の草料を用ひざる、一盲、衆盲を引く。)巖云く、「吾れ會せり。」(錯を將て錯に就く、一船の人を賺殺す。同坑に異土無し、未だ鋒を傷り手を犯すことを免れず。)吾云く、「汝作麼生か會す。」(何ぞ更に問ふことを勞せん、也た問過せんことを要す、好し一擲を與ふるに。)巖云く、「偏身是れ手眼。」(什麼の交渉か有らん。鬼窟裏に活計を作す、泥裏に土塊を洗ふ。)吾云く、「道ふことは則ち太然だ道ふ、只だ八成を道ひ得たり。」(同坑に異土無し。奴は婢を見て慙慙。癡兒伴を牽く。)巖云く、「師兄作麼生。」(人の處分を取らば争か得ん、也た好し一擲を與ふるに。)吾云く、「通身是れ手眼。」(蝦跳れども斗を出でず、備が眼睛を換卻し舌頭を移卻す。還つて十成なることを得るや未だしや。爹を喚んで爺と作す。)

【評唱】 雲巖、道吾と同じく藥山に參す、四十年脇席に著けず。藥山曹洞の二宗を出す、三人有つて法道盛に行はる。雲巖下の洞山、道吾下の石霜、船子下の夾山なり。大悲菩薩、八萬四千の母陀羅臂有り、大悲許多の手眼有り、諸人還つて有りや也た無や。百丈云く、「一切の語言文字、俱に皆

【本則】 東嶺禪師云く、「八十九則、俱ち大悲手眼別に參到す可きを明す。評に曰く、「争奈せん彼面に舊に依つて漏返して、箇の喻子を説くことを。」先師曰く、「雪竇是れ漏返せず、肝臟毛を生じて、恐るべき事有り。」

① 八萬四千の母陀羅臂、楞嚴第六に見ゆ、註に溫陵の曰く、「母陀羅、印と云ふ、各の妙印有り。」

② 從容錄第四に、天覺曰く、「千手とは迷を引いて物を接するの多きを示すなり、千眼とは光を放つて暗を照すの廣きを示すなり、苟も衆生無く、塵勞無きときは、則ち一指存せず、況んや千萬臂をや、一臂具せず、況んや千萬目をや。」

宛轉して自己に歸す。雲巖常に道吾に隨つて、咨參決擇す。一日他に問うて道く、「大悲菩薩、許多の天眼を用て什麼をか作す。當初好し他の與に劈脊に便ち棒せば、後に許多の葛藤有ることを見ることを免れん。道吾慈悲にして此の如くなること能はず、卻つて他の與に道理を説く、意他をして便ち會せしめんと要す。卻つて道ふ、「人の夜半に背手にして枕子を摸るが如し」と。深夜、燈光無き時に當つて、手を將て枕子を摸る。且く道へ、眼、什麼の處にか在る。他便ち道く、「我れ會せり」と。吾云く、「汝作麼生か會す。」巖云く、「偏身是れ天眼。」吾云く、「道ふことは即ち太煞だ道ふ、只だ八成を道ひ得たり。」巖云く、「師兄又作麼生。」吾云く、「通身是れ天眼」と。且く道へ、偏身底が是か、通身底が是か、爛泥に似たりと雖も卻つて脱漚。如今の人多くは去つて情解を作して道ふ、「偏身底は不是、通身底は是」と。只管に古人の言句を咬んで、古人の言下に於て死したる。殊に知らず古人の意言句上に在らず、此れ皆是れ事已むことを獲ずして之を用ふ。如今注脚を下し、格則を立てて道ふ、「若し此の公案を透得せば、便ち罷參の會を作さん」と。手を以て渾身を摸り、燈籠露柱を摸つて、盡く通身の話會を作す。若し恁麼に會せば、他の古人を壞すること少からず。所以に道ふ、「他活句に參じて、死句に參せざれ」と。須らく是れ情塵意想を絶して、淨裸裸赤漚漚にして、方に大悲の語を見得するに可なるべし。見ずや曹山、僧に問ふ、「物に應じて形を現すること、水中の月の如くなる時如何。」僧云く、「驢の井を覗るが如し。」山云く、「道ふことは則ち太煞だ道ふ、只だ八成を道ひ得たり。」僧云く、

「和尚又作麼生。」山云く、「井の驢を覗るが如し」と、便ち此の意に同じ。偏若し語上に去つて見ば、總に道吾雲巖の圍繞を出づることを得ず。雪竇は作家、更に句下に向つて死せず、直に頭上に向つて行く。頌に云く、

【頌】 偏身是。(四肢八節、未だ是れ稍僧極則の處にあらず。)通身是。(頂門上半邊有り。猶は窠窟裏に在り、睛。)拈じ來つて猶は十萬里に較れり。(放過せば則ち不可、何ぞ止だ十萬里のみならん。)翅を展べて騰騰る六合の雲。(些子の境界、將に謂へり奇特と。點。)風に搏つて鼓蕩す四溟の水。(些子の塵埃、天下の人偏を奈何ともせず。過。)是れ何の埃壙ぞ忽ちに生ず。(重ねて禪人の爲に注脚を下す。斬。拈却して那裏にか著けん。)那箇の毫釐ぞ未だ止まざる。(別別、吹き散じ了れり。截。)君見すや、(又恁麼に去る。)網珠籠を垂れて影重々。(大小の雪竇這箇の去就を作す。可惜許。舊に依つて葛藤を打す。)棒頭の手眼何れよりか起る。(咄。賊過ぎて後弓を張る、偏を放すこと得ず、盡大地の人氣を出す處無し、放得せば又須らく棒を喫すべし。又打つて咄して云く、且く道へ山僧底が是か、雪竇底が是か。)咄。(三喝四喝の後作麼生。)

【評唱】 「偏身是通身是。」若し背手に枕子を摸る底は便ち是、手を以て身を摸る底は便ち是なりと道つて、若し恁麼の見解を作さば、盡く鬼窟裏に向つて活計を作す。畢竟偏身通身都て不是。若し情識を以て去つて、他の大悲の語を見んと要せば、直に是れ猶は十萬里に較れり。雪竇一句を弄し得て

活せしめて道く、「拈じ來る猶は十萬里に較れり。」後句に雲巖道吾奇特の處を頌して云く、「翅を展べて
 騰騰る六合の雲、風に搏つて鼓蕩す四溟の水」と。大鵬龍を呑むに、翼を以て風に搏つて浪を鼓す。
 其の水開くること三千里、遂に龍を取つて之を呑む。雪竇道く、「爾若し大鵬にして能く風に搏ち浪を
 鼓して、也た太煞だ雄壯なるも、若し大悲千手眼を以て之を觀れば、只だ是れ些子の塵埃忽ち生ずる
 に相似たり。又一毫釐の風に吹れて未だ止まざるに似て相似たり。」雪竇道
 く、「爾若し手を以て身を摸つて用て手眼と作さば、何の用を作すにか堪へ
 ん。」此の大悲の話上に於て、直に是れ未だ止まざる。所以に道ふ、「是れ何の埃塵ぞ
 忽ちに生ず、那箇の毫釐ぞ未だ止まざる。」雪竇自ら謂らく、「作家にして一
 時に迹を拂ひ了れり。」爭奈せん後面に舊に依つて漏返して箇の論子を説く
 ことを。依前として只だ圈續の裏に在り。「君見すや網珠籠を垂れて影重重」
 雪竇帝網の明珠を引いて、以て籠を垂るることを用ふ。手眼且く道へ、「什麼
 の處にか落在す。華嚴宗の中に、四法界を立つ。一には理法界、一味平等を明すが故に。二には事法
 界、理を全うして事を成すことを明すが故に。三には理事無礙法界、理事相融して、大小無礙なること
 を明すが故に。四には事事無礙法界、一事徧く一切事に入り、一切事徧く一切事を攝して、同時に
 交參無礙なることを明すが故に。所以に道ふ、「一塵纔かに擧ぐれば大地全く收る」と。一一の塵無邊法

① 莊子逍遙遊篇に云く、「北溟に魚有り、其の名を鯀と爲す、鯀の大き其の幾千里なるを知らず、化して鳥と爲る、其の名を鵬と爲す、鵬の背其の幾千里なるを知らず、怒つて飛ぶ、其の翼垂天の雲の若し云云。」
 ② 幻住曰く、切の字恐らくは行ならん。

界を含む、一塵既に徧り、諸塵も亦然り。網珠は、乃ち天帝釋善法堂の前に、摩尼珠を以て網を爲る。凡そ一珠の中に百千珠を映現し、而も百千珠俱に一珠の中に現す。交映重重にして、主伴無盡なり。此を用て事事無礙法界を明す。昔賢首國師、立て、鏡燈の論を爲す、圓かに十鏡を列ねて、中に一燈を設く。若し東鏡を看れば、則ち九鏡の鏡燈、歴然として齊しく現す。若し南鏡を看んも、則ち鏡鏡 如然たり。所以に世尊初め正覺を成じて、菩提道場を離れずして、徧く切利諸天に昇り、乃至一切處に於て、七處九會、華嚴經を説く。雪竇帝網珠を以て、事事無礙法界を垂示す。然も六相の義甚だ明白なり。① 即總、② 即別、③ 即同、④ 即異、⑤ 即成、⑥ 即壞、一相を擧すれば則ち六相俱に該ぬ。但だ衆生日に用ひて知らざるが爲に、雪竇帝網明珠を拈じて、籠を垂れて此の大悲の事に況ふることを、直に是れ此の如し。爾若し善能く此の珠網の中に向つて、拄杖子を明得して、神通妙用、出入無礙ならば、方に手眼を見得す可し。所以に雪竇云く、「棒頭の手眼何れよか起る」と。爾をして棒頭に取證し、喝下に承當せしむ。只だ德山門に入れば便ち棒するが如きんば、且く道へ、手

① 賢首國師は華嚴宗第三祖なり、香象國師と名く。
 ② 法門光顯志に曰く、「無盡燈は賢首法藏法師、則天の爲に十鏡を以て八隅に置き、中に佛像を安じ燈を燃し之を照す、則ち鏡鏡に像を現す、以て圓海重重無盡の意を表す」と。
 ③ 十鏡は十界を標す。
 ④ 七處九會は、華嚴隨疏演義鈔十五に云く、「第一菩提場會、第二普光法堂會、第三切利天宮會、第四夜摩天宮會、第五兜率天宮會、第六他化自在天會、第七重會普光法堂會、第八三會普光明會、第九進多圖林會。」
 ⑤ 即は一法界の當體なり、六義を攝するに約して總の名を得たり、一には總相と云ふ、人の身能く眼耳鼻舌の諸根を具して、一體と爲るが如し。

眼什麼の處にか在る。臨濟門に入れば便ち喝す。且く道へ、手眼什麼の處にか在る。且く道へ、雪竇末後什麼と爲てか更に箇の咄の字を著く。參。

第九十則

垂示に云く、聲前の一句、千聖不傳。面前の一丝、長時無間。淨裸々、赤灑々、頭髮鬆、耳卓朔。且く道へ、作麼生。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧、智門に問ふ、「如何なるか是れ般若の體。」(通身影象無し、天下の人の舌頭を坐斷す。體を用て什麼か作ん)門云く、「蚌明月を含む。」(光萬象を呑むことは則ち且つ止だ棒頭正眼の事、如何せん曲直を藏さざるを。雪上に霜を加ふ又一重)僧云く、「如何なるか是れ般若の用。」(倒退三千里、用を要して什麼か作ん)門云く、「兔子懷胎。」(嶮苦瓠は根に連つて苦く、甜瓜は蒂に徹して甜し。光影の中に向つて活計を作す、智門の窠窟を出でず、若し箇の出で來る有らば、且く道へ、是れ般若の體か是れ般若の用か。且く要す土上に泥を加へんことを)。

【評唱】智門道く、「蚌明月を含む、兔子懷胎」と、都て中秋の意を用ふ。

- ② 二は別相、譬へば身體一なりと雖も、眼耳鼻舌の諸根、各各同じぢらざるが如し。
- ③ 三は同相、譬へば眼耳鼻舌等の諸根、各各不同なりと雖も、而も共に一身にして、相違背せざるが如し。
- ④ 四は異相、譬へば眼耳鼻等の諸根、各各其の用を得て雜亂せざるが如し。
- ⑤ 五は成相、譬へば眼耳鼻等の諸根、和合して共に一身の用を成するが如し。
- ⑥ 六は壞相、眼耳鼻等の諸根、各各自位に住し、一體ならざるが如し。
- ⑦ 易鑿辭の上に云く、「百姓は日に用ひて相知らず。」
- ⑧ 承當は「ひきうけて、吾がものにす」と譯す。

【本則】

東嶺禪師云く、九十則、似ち般若の體用別に參問す可く、

然も此の如くなりと雖も、古人の意卻つて蚌兔の上に在らず、他は是れ雲門會下の尊宿。一句語に須らく三句を具すべし。所謂函蓋乾坤の句、截斷衆流の句、隨波逐浪の句、亦安排を消ひざれども、自然に恰好なり。便ち嶮處に去つて、這の僧の語に答へて、略些子に鋒鋒を露す。妨げず奇特なることを。然も恁麼なりと雖も、他の古人終に去つて光影を弄せず、只だ偏が與に些の路頭を指して人をして見せしむ。這の僧問ふ、「如何なるか是れ般若の體。」智門云く、「蚌明月を含む」と。漢江に蚌を出す、蚌中に明珠有り。中秋月の出づるに到つて、蚌水面に於て浮んで、口を開いて月光を含む、感じて珠を産す、合浦の珠是れなり。若し中秋月有るときは則ち珠多く、月無きときは則ち珠少し。「如何なるか是れ般若の用。」門云く、「兔子懷胎」と。此の意亦異なること無し。兔は陰に屬す、中秋の月生するに、口を開いて其の光を呑んで便乃ち懷胎す、口中より兒を産す。亦是れ月有るときは則ち多く、月無きときは則ち少し。他の古人の答處、許多の事無し。他只だ其の意を借つて般若の光に答ふ。然も恁麼なりと雖も、他の意言句上に在らず、自ら是れ後人言句上に去つて活計を作す。見すや盤山道く、「心月孤明にして、光萬象を含む。光境を照すに非ず、境も亦存するに非ず、光境俱に亡す、復た是れ何物ぞ。」如今の人但だ瞪眼して喚んで光と作して、只だ情上に去つて解を生じ、

●空裏に概を釘す。○古人道く、「汝等諸人、六根門頭に晝夜大光明を放つて、山河大地を照破す。只止眼根より光を放つのみならず、鼻舌身意も亦皆光を放つ。這裏に到つて須らく六根下を打疊して、星事無く、淨裸裸赤灑灑地にして、方に此の話の落處を見るべし。雪竇正恁麼に頌出す。

【頌】一片虚疑にして謂情を絶す。(心を擬すれば即ち隔たる。佛眼も也た観れども見えず。)人天此れより空生を見る。(須菩提に好し三十棒を與ふるに、這の老漢を用て什麼か作ん。設使ひ須菩提も也た倒退三千里。)蚌玄兔を含む深々たる意。(也た須らく是れ當人にして始めて得べし。什麼の意か有らん、何ぞ須ひん更に深深たる意を用ふることを。)曾て禪家に與へて戰爭を作さしむ。(干戈已に息んで天下太平、還つて會すや。打つて云く、闍黎多少をか喫得す。)

【評唱】「一片虚疑にして謂情を絶す。」雪竇一句に便ち頌し得て好し、自然に古人の意を見得す。六根湛然たる、是れ箇の什麼ぞ。只だ這の一片虚明に凝寂なり。天上に去つて討ぬることを消ひす、必らずしも別人に向つて求めざれ。自然に常光現前す、是の處壁立千仞なり。謂情は即ち言謂情塵を絶するなり。法眼の圓成實性の頌に云く、「理極つて情謂を忘す、如何が論齊することを得ん。到頭霜夜の月、任運前溪に落つ。果熟して猿を兼ねて重く、山遙かにして路の迷へるに似たり。頭を擧すれば殘照在り、

●涅槃經二十五に云く、「譬へば人有りて概を空に安するが如し、終に住することを得ず。」
●傳燈第九、福州大安禪師云く、「汝諸人各自に無價の大寶有り、眼門より光を放つて、山河大地を照し、耳門より光を放つて、一切の善惡音聲を領覽す、六門晝夜常に光明を放つ、亦放光三昧と名く。」

元是れ住居の西。」所以に道ふ、「心は是れ根、法は是れ塵、兩種は猶は鏡上の痕の如し。塵垢盡くる時光始めて現す、心法雙べ忘すれば、性即ち眞なり。」又道く、「三間の茅屋從來住す、一道の神光萬境閑なり。是非を把り來つて我を辨すること莫れ、浮生の穿鑿相關らず」と。只だ此の頌亦一片の虚疑にして謂情を絶することを見る。「人天此れより空生を見る」と。見すや須菩提巖中に宴坐す、諸天花を雨らして讚歎す。尊者云く、「空中花を雨らして讚歎するは、復た是れ何人ぞ。」天云く、「

●圓成實性の頌、三十四則に註す。
●永嘉の證道歌。
●龍山の頌、傳燈第八、會元第三に見えたり。

「我は是れ梵天。」尊者云く、「汝云何が讚歎す。」天云く、「我れ尊者の善く般若波羅蜜多を説くことを重んず。」尊者云く、「我れ般若に於て未だ嘗て一字を説かず、汝云何が讚歎す。」天云く、「尊者無説、我れ乃ち無聞、無説無聞、是れ眞の般若」と。又復た地を動して花を雨らす。看よ他の須菩提善く般若を説くことを。且つ體用と説かず、若し此に於て見得せば、便ち智門の蚌明月を含み、兔子懐胎すと道ふことを見る可し。古人の意言句上に在らずと雖も、爭奈せん答處に深深の旨有ることを。雪竇の蚌玄兔を含む深深の意と道ふことを惹き得たり。這裏に到つて曾て禪家に與へて戰爭を作さしむ。天下の禪和子、闊浩浩地に商量す。未だ嘗て一人も夢にだも見ることを有らざること有り。若し智門雪竇と同參ならんことを要せば、也た須らく是れ自ら眼を著けて始めて得べし。

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第九終

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第十

第九十一則

垂示に云く、情を超え見を離れ、縛を去り粘を解く。向上の宗乘を提起し、正法眼藏を扶堅することとは、也た須らく十方齊しく應じ、八面玲瓏として、直に恁麼の田地に到るべし。且く道へ、還つて同得同證、同死同生底ありや。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、鹽官一日侍者を喚ぶ、「我が與に犀牛の扇子を將ち來れ」と。(葛藤を打すること少からず、這箇好箇の消息に何似ぞ。)侍者云く、「扇子破れぬ。」(可惜許。好箇の消息、什麼と道ふぞ。)官云く、「扇子既に破れなば、我れに犀牛兒を還し來れ。」(漏逗少からず。幽州は猶は自ら可なり、最も苦しきは是れ新羅、和尚犀牛兒を用て什麼か作ん。)侍者無對。(果然として是れ箇の無孔の鐵鏈。可惜許。)投子云く、「將ち出すことを辭せず、恐らくは頭角全からざらんことを。」(似たることは則ち似たり、爭奈せん兩頭三面なることを。也た是れ道理を説く。)雪竇拈じて云く、「我れ全からざる底の頭角を要す。」(何の用を作すにか堪へん。錯を將て錯に就く。)石霜云く、「若し和尚に

【本則】 東嶺禪師云く、九十一則、便ち鹽官犀牛の扇子、若し諸老の商略有るに非ずんば、大いに難過す可きことを明す。

還さば即ち無からん。」(什麼と道ふぞ、鼻孔に撞着す。)雪竇拈じて云く、「犀牛兒猶は在り。」(峻。洎乎と錯つて認めて、頭を收め去る。)資福一圓相を畫き、中に於て一の牛の字を書す。(草葉拈出することを勞せず、影を弄する漢。)雪竇拈じて云く、「適來什麼としてか將ち出さざる。」(金鉢拈せず、也た是れ草裏の漢。)保福云く、「和尚年尊し、別に人を請せば好し。」(僻地裏に官人を罵る、辛を辭し苦を道つて什麼か作ん。)雪竇拈じて云く、「惜むべし勞して功無きことを。」(身を兼ねて内に在り、也た好し三十棒を與ふるに。灼然。)

【評唱】 鹽官一日侍者を喚ぶ、「我が與に犀牛の扇子を將ち來れ」と。此の事言句上に在らずと雖も、且く人の平生の意氣作略を驗せんことを要せば、又須らく此の如く言を藉りて顯すことを得べし。臘月三十日に於て、力を著得して主と作り得ば、萬境攢然たりとも、之を觀て動せず、無功の功、無力の力と謂つ可し。鹽官は乃ち齊安禪師なり、古時犀牛の角を以て扇を爲る。時に鹽官豈に犀牛の扇子の破るゝことを知らざらんや。故に侍者に問ふ、侍者云く、「扇子破れぬ」と、看よ他の古人、十二時中、常に裏許に在つて、撞著磕著することを。鹽官云く、「扇子既に破れなば、我れ犀牛兒を還し來れ」と。且く道へ、他犀牛兒を要して、什麼をか作ん。也た只だ人の落處を知得するや也た無やを驗せんことを要す。投子云く、「將ち出でんことを辭せず、恐らくは頭角全からざらんことを。」

①杭州鹽官の鎮國海昌院の齊安禪師は、南嶽下二世馬祖の法嗣、傳燈第七、會元第三に傳あり。

雪竇云く、「我は全からざる底の頭角を要す」と。亦句下に向つて便ち機を投す。石霜云く、「若し和尚に還さば、即ち無からん。」雪竇云く、「犀牛角猶ほ在り」と。資福一圓相を畫き、中に於て一の牛の字を書す。他は仰山に承嗣するが爲に、平生境致を以て人を接して、此の事を明さんことを愛す。雪竇云く、「適來什麼と爲てか將ち出さざる」と。又他の鼻孔を穿ち了れり。保福云く、「和尚年尊し、別に人を請せば好し」と。此の語道ひ得て穩當なり、前の三則の語は卻つて見易し。此の一句の語は遠意有り、雪竇亦打破了れり。山僧舊日慶藏主の處に在つて理會す。道く、「和尚年尊く老耄せり。頭を得ては尾を忘す、適來は扇子を索め、如今は犀牛角を索む、執侍を爲し難し。故に云ふ、別に人を請せば好し」と。雪竇云く、「惜む可し勞して功無きことを。」此れ皆此れ下語の格式なり、古人此の事を見徹す。各各不同なりと雖も、道ひ得出し來れば、百發百中、須らく出身の路有つて、句句血脈を失せざるべし。如今の人問著すれば、只管に道理計較を作す。所以に十二時中、人の咬嚼して、滴水滴凍ならしめて、箇の證悟の處を求めんことを要す。看よ他の雪竇一串に頌して云ふことを。

【頌】犀牛角の扇子用ふると多時。(夏に遇ふては則ち涼しく、冬に遇ふては則ち暖なり。人人具足す、甚と爲てか知らざる。阿誰か會て用ひざる。)問著すれば元來總に知らず。(知ることは則ち知る、會

①資福如實は南嶽下六世西塔種
の法嗣、傳燈十二、會元第九
に傳あり。
②仰山は即ち西塔光種禪師な
り、南嶽下五世仰山寂の法嗣、
傳燈十二、會元第九に傳あり。
③禮記曲禮に、「八十九十を耄と
曰ふ、」註に「憊忘。」

することは便ち會せず、人を瞞する莫くんば好し。也た別人を怪むことを得ず。限り無き清風と頭角と。(什麼の處に在る、自己の上に向つて會せずんば什麼の處に向つてか會せん。天上天下頭角重ねて生ず。是れ什麼ぞ、風無きに浪を起す。)盡く雲雨の去つて追ひ難きに同じ。(蒼天蒼天、也た是れ失錢遺罪。)雪竇復た云く、「若し清風の再び復し、頭角の重ねて生せんことを要せば、(人人箇の犀牛角の扇子有り、十二時中全く他の力を得たり。什麼に因つてか問著すれば總に知らざる、還つて道ひ得てんや)請ふ禪客各一轉語を下せ」と。(鹽官猶ほ在り、三轉了れり。)問うて云く、「扇子既に破れなば、我れに犀牛角を還し來れ。」(也た一箇半箇有り、咄。也た好し禪床を推倒するに。)時に僧あり出でて云く、「大衆參堂し去れ。」(賊過ぎて後弓を張る、槍を奪卻せらる。前、村に構らず、後、店に逃らす。)雪竇喝して云く、「釣を抛つて鯢鯨を釣らんとして、箇の蝦蟇を釣り得たり」と。便ち下座す。(他の慈麼地なることを招き得たり、賊過ぎて後弓を張る。佛果自ら此の語を徴して云く、「又直に爾諸人に問はん、這の僧道ふ、大衆參堂し去れと、是れ會か不會か。若し是れ會せずんば争か慈麼に道ふことを解せん。若し會と道はん時、雪竇又道く、「釣を抛つて鯢鯨を釣る、只だ箇の蝦蟇を釣り得たり」と。便ち下座且く道へ、誦說什麼の處に在る、試みに請ふ參詳して看よ。)

【評唱】「犀牛角の扇子用ふると多時、問著すれば元來總に知らず。」人人箇の犀牛角の扇子有り、十二時中、全く他の力を得たり。什麼と爲てか問著す

④翻本には去書の二字無し。

れば總に去著を知らざる。侍者投子、乃至保福も、亦總に知らず。且く道へ、雪竇還つて知る麼。見すや無著文殊を訪ひ、喫茶の次、文殊玻璃の盞子を舉起して云く、「南方に還つて這箇有り麼。」著云く、「無し。」殊云く、「尋常什麼を用てか茶を喫す。」著無語。若し這箇の公案の落處を知得せば、便ち犀牛の扇子に、限り無き清風有ることを知得せん。亦犀牛の頭角崢嶸たるを見ん。四箇の老漢恁麼に道ふ、朝雲暮雨の一たび去つて追ひ難きが如し。雪竇復た云く、「若し清風の再び復し、頭角の重ねて生せんことを要せば、請ふ禪客各一轉語を下せ。」問うて云く、「扇子既に破れたば、我れに犀牛兒を還し來れ。」時に禪客有り出でて云く、「大衆參堂し去れ」と。這の僧主家の權柄を奪ひ得たり。道ひ得ることとは也た煞だ道ふ、只だ八成を道ひ得たり。若し十成を要せば、便ち與に禪床を抵倒せん。爾且く道へ、這の僧犀牛兒を會するか會せざるか。若し會せざれば、卻つて恁麼に道ふことを解せんや。若し會せば、雪竇何に因つてか伊を肯はざる。什麼と爲てか道ふ、「釣を抛つて鯉鯪を釣る、只だ箇の蝦蟇を釣り得たり」と。且く道へ、畢竟作麼生か。諸人無事にして、試みに拈擷して看よ。

第九十二則

垂示に云く、絃を動して曲を別つ、千載にも逢ひ難し。兔を見て鷹を放つ、一時に俊を取る。一切の語言を總べて一句と爲し、大千沙界を攝して一塵と爲す。同死同生、七穿八穴。還つて證據の者ありや。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、世尊一日陞座。(賓主俱に失す、是れ一回漏逗するのみにあらず。)文殊白槌して云く、「諦觀法王法、法王法如是。」(一子親み得たり。)世尊便ち下座。(愁人、愁人に向つて説くこと莫れ、愁人に説向すれば人を愁殺す。鼓を打ち琵琶を弄す、相逢ふ兩會家。)

【評唱】 世尊未だ拈花せざる已前、早く這箇の消息有り。始め鹿野苑より終り、拔提河に至るまで、幾たびか會て金剛王寶劍を用著す。當時衆中に若し稍僧の氣息有る底の漢、綽得し去らば、他の末後に拈花一場の狼藉を免れ得ん。世尊良久の間、文殊に一拶せられて、便ち下座。那時也た這箇の消息有り。釋迦室を掩ひ、淨名口を杜づ。皆此の這箇に似て、則ち已に説き了れり。肅宗、忠國師に問うて、無縫塔を造る話の如き、又外道佛に問ふ、有言を問はず、無言を問はざるの語の如きは、看よ佗の向上の人の行履、幾か會て鬼窟裏に入つて活計を作さん。有る者は道ふ、「意默然の處に在り」と。有る者は道ふ、「良久の處に在り」と。有言は無言底の事を明し、無言は有言底の事を明すと。永嘉道く、「默の時説、説の時默」

【本則】

東嶺禪師云く、十二則、便ち世尊上堂、密に拈花微笑の因縁のみにあらざるを明す。
① 拔提河、此には金河と云ふ。
② 綽は「オットル」と譯す、又綽捉と音通すとの説あれども、唐音にては、綽は「チャ」、捉は「チヨ」にして相同じからず。

③ 涅槃無名論に云く、「所以に釋迦室を塵埃に掩ひ、淨明口を昆耶に杜づ、」或は云く、「釋迦成道後、七日の中に於て、是の事を思惟す」と、義は掩室に同じ。
④ 第八十四則に見ゆ。
⑤ 九十九則なり。
⑥ 六十五則なり。
⑦ 金剛經の文。

と。總に恁麼に會せば、三生六十劫にも、也た未だ夢にも見ざること。在ら
ん。爾若し便ち直下に承當得し去らば、更に凡有り聖有ることを見す。
是の法は平等にして、高下有ること無し。日日三世の諸佛と手を把つて共
に行かん。後面に雪竇の自然に見得して頌出するを看よ。

【頌】列聖叢中作者知る。(釋迦老子を誘ふこと莫くんば好し。佗の臨濟德山に還す、千箇萬箇の
中、一箇半箇を得難し。)法王の法令斯の如くならず。(他に隨つて走る底麻の如く衆に似たり。三頭
兩面、灼然として能く幾人有つてか這裏に到る。)會中若し仙陀の客あらば、(中に就いて俗例の人を
得難し。文殊是れ作家にあらず、闍黎定めて不是。)何ぞ必らずしも文殊一槌を下さん。(更に一槌を
下すこと又何ぞ妨げん。第二第三槌總に要せず、當機の一句作廢生か道はん。峻。)

【評唱】「列聖叢中作者知る」と。靈山八萬の大衆、皆是れ列聖なり。文殊普賢、乃至彌勒、主伴同會す。
須らく是れ巧中の巧、奇中の奇にして、方に他の落處を知るべし。雪竇の意に謂へらく、列聖叢中
一箇も人の有ることを知る無し。若し箇の作家の者有らば、方に不恁麼なることを知らん。何が故ぞ、
文殊白槌して云く、「諦觀法王法、法王法如是」と。雪竇道く、「法王の法令斯の如くならず」と。何が
故ぞ此の如くなる。當時會中に若し箇の漢有り、頂門に眼を具し、肘後に符有つて、世尊未だ陞座せ
ざる已前に向つて觀得破せば、更に何ぞ必らずしも文殊白槌せん。涅槃經に云く、「仙陀婆は一名四

以下、箇の俗例の漢にして始
めて得べしに至る、福本に此
れ無し。

實、一には鹽、二には水、三には器、四には馬。一りの智臣有つて、善く四義を會す。王若し灑洗せ
んと欲して、仙陀婆を要すれば、臣即ち水を奉じ、食するときに索むれば鹽を奉じ、食し訖れば器を
奉じて漿を飲ましむ。出でんと欲すれば馬を奉ず、意に隨つて應用差ふこと無し。灼然として須らく
是れ箇の俗例の漢にして始めて得べし。只だ僧香嚴に問ふが如きんば、「如何なるか是れ王仙陀婆を索
む。」嚴云く、「這邊に過ぎ來れ。」僧過ぐ。嚴云く、「人を鈍置殺す。」又趙州に問ふ、「如何なるか是れ王仙
陀婆を索む。」州禪床を下つて、曲躬叉手す。當時若し箇の仙陀婆有つて、世尊未だ陞座せざる已前
向つて透り去らば、猶ほ些子に較れり。世尊更に陞座し、便ち下り去る。已に是れ便を著けずして
れり、那ぞ文殊更に白槌するに堪へん。妨げず他の世尊一上の提唱を鈍置することを。且く作廢生か
是れ鈍置の處。

第九十三則

【本則】擧す、僧、大光に問ふ、「長慶道く、齋に因つて慶讚すと、意旨
如何。」(重光、這の漆桶、妨げず疑着を問はずんば知らじ。)大光舞を作
す。(人を賺殺すること莫れ、舊に依つて従前恁麼にし來る。)僧禮拜す。
(又恁麼にし去る、是なることは則ち是、只だ恐らくは錯つて會せんこと

【本則】
東嶺禪師云く、九十三則、假
ち大光の一機、衲子の基爲る
ことを明す。

を。光云く、「箇の什麼を見ても便ち禮拜す。」也た好し一拶するに、須らく辨過して始めて得べし。僧舞を作す。様に依つて猫兒を畫く。果然として錯つて會す、光影を弄する漢。光云く、「這の野狐精。」此の恩報し難し、三十二祖只だ這箇を傳ふ。

【評唱】 西天の四七、唐土の二三、只だ這箇の些子を傳ふ。諸人還つて落處を知る麼。若し知らば、此の過を免れ得ん。若し知らずんば、舊に依つて只だ是れ野狐精。有る者は道ふ、「是れ他の鼻孔を裂轉し來つて人を瞞す」と。若し眞箇恁麼ならば、何の道理をか成さん。大光善能く人の爲にす、他の句中に出身の路有り。大凡そ宗師は須らく人の與に釘を抽き楔を抜き、粘を去り縛を解くべし。方に之を善知識と謂ふ。大光舞を作す、這の僧禮拜す、最後に僧卻つて舞を作す。大光云く、「這の野狐精」と。是れ這の僧を轉するにあらず、畢竟的當を知らずして、偏只管に舞を作して、遞相に恁麼ならば、幾時に到つてか休歇し去ることを得ん。大光道く、「野狐精」と。此の語 ① 金牛を截斷す、妨げず奇特なることを。所以に道ふ、「他活句に參じて、死句に參せざれ」と。

【頌】 前箇は猶ほ軽く後箇は深し。百發百中、什麼の處に向つてか廻避せん。誰か云ふ黃葉是れらば、泥團を弄する漢什麼の限りか有らん。様に依つて猫兒を畫く、一路を放行す。限り無き平人も陸沈せられん。活底の人に遇着す、天下の衲僧を帶累して摸索不着ならしむ。閻黎を帶累して出頭することを得ず。

【評唱】 「前箇は猶ほ軽く後箇は深し」と。大光舞を作す、是れ前箇。復た云く、「這の野狐精」と、是れ後箇。此れは是れ從上來の爪牙なり。誰か云ふ ② 黃葉是れ黃金と。仰山衆に示して云く、「汝等諸人、各自に回光返照せよ、吾が言を記すること莫れ。汝等無始劫來、明に背いて暗に投じ、妄想根深うして、卒に頓に抜き難し。所以に假りに方便を設けて、汝が龜識を奪ふ。黃葉を將て小兒の啼を止むるが如く、蜜果を將て苦葫蘆に換ふるが如くに相似たり。古人權に方便を設けて人の爲にす、其の啼を止むるに及んで、黃葉金に非ず。世尊一代時教を説く、也た只だ是れ啼を止むるの説なり。這の野狐精、只だ他の業識を換へんことを要す。中に於て也た權實有り、也た照用有り、方に衲僧の巴鼻有ることを見ん。若し會得せば、虎の翼を挿むが如くならん。曹溪の波浪如し相似たらば、儘し忽ち四方八面の學者、只管大家、此の如く舞を作して、一向に恁麼ならば、限り無き平人も陸沈せられん。什麼の

① 涅槃經二十に云く、嬰兒行もは、彼の嬰兒啼哭の時、父母即ち楊樹の黃葉を以て、之に語けて言ふ、「啼くこと莫れ、啼くこと莫れ、我れ汝に金を與へん、嬰兒見已つて眞金の想を生じて、便ち止んで啼かず、然も此の楊葉實に金に非ざるなり。

救ふ處か有らん。

第九十四則

垂示に云く、聲前の一句、千聖不傳。面前の一丝、長時無間。淨裸々赤灑々、露地の白牛。眼卓翹耳卓翹、金毛の獅子は則ち且く置く。且く道へ、作麼生か是れ露地の白牛。

【本則】擧す、楞嚴經に云く、「吾が不見の時、何ぞ吾が不見の處を見ざる。(好箇の消息、見ることを用て什麼か作ん。釋迦老子漏逗少からず。)若し不見を見ば、自然に彼の不見の相に非ず。(咄、甚の閑工夫か有らん、山僧をして兩頭三面と作し去らしむ可らず。)若し吾が不見の地を見ずんば、(什麼の處に向つてか去る。鐵櫛を釘つに相似たり。咄。)自然に物に非ず。(牛頭を按じて草を喫せしめんや、更に什麼の口頭の聲色をか説かん。)云何ぞ汝に非ざらん。(爾と説き我と説く、總に沒交涉。打つて云く、脚跟下自家に看取せよ、還つて會すや。)

【評唱】楞嚴經に云く、「吾が不見の時、何ぞ吾が不見の處を見ざる。若し不見を見ば、自然に彼の不見の相に非ず。若し吾が不見の地を見ずんば、

【本則】東嶺禪師云く、「九十四則、便ち楞嚴の大事、恐る可き事有るを明す。」先師曰く、「垂示を見るときは、則ち開悟和尙は眞眼息災にして、法座上に在るが如く、評と著語とを見れば、則ち大寂滅海に入ること已に多時なり。」又曰く、「本文楞嚴經を擧す、深く甚理有り、古今大いに備る、實此の文を頌する底意は、評抄には未だ曾て夢にだも見ざること有り、頌に曰く、

自然に物に非ず、云何ぞ汝に非ざらん」と。雪竇此に到つて、經文を引き盡さず、全く引かば則ち見る可し。經に云く、「若し見是れ物ならば、則ち汝も亦吾が見を見る可し。若し同じく見る者を、名けて吾を見ると爲さば、吾が不見の時、何ぞ吾が不見の處を見ざる。若し不見を見ば、自然に彼の不見の相に非ず。若し吾が不見の地を見ずんば、自然に物に非ず。云何ぞ汝に非ざらん」と。辭は多くして録せず。阿難の意に道く、「世界の燈籠露柱、皆名有る可し。亦世尊此の妙精元明を指出して、喚んで什麼物と作して、我れをして佛意を見せしめんことを要す。」世尊云く、「我れ香臺を見る。」阿難云く、「我れも亦香臺を見る。」即ち是れ佛見なり。」世尊云く、「我れ香臺を見ることは則ち知る可し、我れ若し香臺を見ざる時、爾作麼生か見る。」阿難云く、「我れ香臺を見ざる時、即ち是れ佛を見る。」佛云く、「我が不見と云ふは、自らはれ我れ知る。汝が不見と云ふは、自らはれ汝知る。他人の不見の處、爾如何が知ることを得ん」と。古人云く、「這裏に到つて、只だ自知す可し、人の與に説くことを得ず」と。只だ世尊の吾が不見の時、何ぞ吾が不見の處を見ざる。若し不見を見ば、自然に彼の不見の相に非ず。

「知見に見を立つ即ち無明の本」と、脱體現成、汝に三十棒を許す。」又一偈有り、「徳雲の閑古鐘、幾くか妙時頂を下る、他の眞聖人を備ひて、響か擔ふて共に非み填む。」又一偈を打す、「苦瓠は根に連りて苦く、甜瓜は蒂に徹して甜し、是れ我れ三界を越え、却つて阿師に録はる。」棒を打つて曰く、「見上觀者驚頭山、見降亦驚下鹿濱の釣船。」楞嚴の第二に出づ。永覺曰く、「以下數句、又物を見る可し、見は見る可らざるを以て、以て見の物に非ざることを明す。」從容錄に、佛果の語を引き、即ち是れ佛の見處を見ると作す。

若し吾が不見の地を見ざれば、自然に物に非ず。云何が汝に非ざらんと道ふが如きんば、若し見を認めて物有りと爲すと道はば、未だ迹を拂ふこと能はず。吾が不見の時、羚羊の角を掛くるが如し。聲響蹤跡、氣息都て絶す。爾什麼の處に向つてか摸索せん。經の意、初は縦破、後は奪破。雪竇教眼を出でて頌す、亦物を頌せず、亦見と不見とを頌せず、直に只だ見佛を頌す。

【頌】 全象全牛皆殊ならず。(半邊瞎漢、半開半合。扶維摸壁して什麼か作ん。一刀兩段。)從來の作者共に名摸す。(西天の四七、唐土の二三、天下の老和尚麻の如く粟に似たり。猶ほ自ら少くることあり。)如今黃頭老を見んと要せば、(咄。這の老胡、瞎漢爾が脚跟下に在り。)刹々塵々半途に在り。(脚跟下蹉過了也、更に山僧をして什麼をか説かしめん。驢年にも還つて曾て夢にも見んや。)

【評唱】 「全象全牛皆殊ならず」と。衆盲象を摸つて、各異端を説く。① 涅槃經に出づ。僧、仰山和尚に問ふ、「人の禪を問ひ道を問ふを見て、便ち一圓相を作して、中に於て牛の字を書す、意何にか在る。」仰山云く、「這箇也た是れ閑事。忽ち若し會得せば、外より來らず、忽ち若し會せずんば、決定して識らず。我れ且く爾に問はん、諸方の老宿、爾が身上に於て、那箇か是れ爾が佛性と指出する。爲復語底是か默底是か、是れ不語不默底是なること莫しや。爲復總に是か爲復總に不是か。爾若し語底是と認めれば、

① 北本の三十二に云く、善男子譬へば云云、大王衆盲を喚んで、各各に問うて言く、「汝、象を見るや、」各各言ふ、「我れ已に見ることを得る」と、王言く、「象何に類すとか爲す、」其の牙に觸るゝ者は、「即ち象の形蘆菴の根の如し」と、其の耳に觸るゝ者は、「象は其の如し」と言ふ、其の頭に觸るゝ

盲人の象尾を摸著するが如し。若し默底是と認めれば、盲人の象耳を摸著するが如し。若し不語不默底是と認めれば、盲人の象鼻を摸著するが如し。若し物物都て是と道はゞ、盲人の象の四足を摸著するが如し。若し總に不是と道はゞ、本象を抛つて空見に落在す。是の如く衆盲の所見、只だ象上に於て、名邊差別す。爾好からんことを要せば、切に象を摸すること莫れ。道ふこと莫れ見覺是と、亦道ふこと莫れ不是と。祖師云く、「菩提本樹無く、明鏡亦臺無し。本來無一物、爭か塵埃に染むることを得ん。」又云く、「道本形相無し、智慧即ち是れ道。此の見解を作す者、是を眞の般若と名く」と。明眼の人は、象を見て其の全體を得、佛の見性の如きも亦然り。① 全牛とは莊子に出でたり。庖丁、牛を解く、未だ背て其の全牛を見ず。理に順つて解く、刃を遊ばしむること自在なり、更に手を下すことを須ひず。纔かに目を擧する時、頭角蹄肉、一時に自ら解き了る。是の如くすること十九年、其の刃利きこと新に鋼に發げるが如し、之を全牛と謂ふ。然も此の如く奇特なりと雖も、雪竇道く、「縱使此の如くなることを得るも、全象全牛、眼中の智と更に殊ならず。從來作者共に名摸す」と。直に是れ作

者は「象は石の如し」と言ふ、其の鼻に觸るゝ者は、「象は竹の如し」と言ふ、其の脚に觸るゝ者は、「象は木白の如し」と言ふ、其の脊に觸るゝ者は、「象は牀の如し」と、其の腹に觸るゝ者は、「象は鏡の如し」と言ふ、其の尾に觸るゝ者は、「象は繩の如し」と言ふ、云云。
② 以下亦然りに至る、此の緣、林同録下卷に出づ、文小異。
③ 正約に「人物を描畫して其の形に類するを觀と云ふ、今は相想して、さぐりあつるを云ふなり。
④ 六祖大師の偈。
⑤ 莊子養生主篇に云く、庖丁、文惠君の爲に牛を解く、君曰く、「唯善いかな、技蓋し此に至るか、」庖丁、刀を釋いて對へて曰く、「臣が好む所の者は道なり、技より過ぎたり、

家なるも、也た裏頭に去つて摸索不着。迦葉より乃至西天、此土の祖師、天下の老和尚、皆只だ是れ名摸す。雪竇直截して道く、「如今黃頭老を見んと要するや」と。所以に道ふ、「見んと要せば即便ち見よ、更に尋覓して方に見んと要せば、則ち千里萬里。黃頭老は乃ち黃面老子なり。彌如今見んと要するや。刹利塵塵半途に在り」と。尋常道ふ、「一塵一佛刹、一葉一釋迦。」盡三千大千世界の所有微塵、只だ一塵の中に向つて見るも、懸塵の時に當つて、猶は半途に在り、那邊更に半途の在る有り。且く道へ、什麼の處にか在る。釋迦老子尚ほ自ら知らず、山僧をして作廢生か説得せしめん。

第九十五則

垂示に云く、有佛の處住することを得ざれ。住著すれば頭角生ず。無佛の處急に走過せよ。走過せざれば草深きこと一丈。直饒ひ淨躰々赤灑々、事外に機無く、機外に事無きも、未だ免れず株を守つて兔を待つことを。且く道へ、總に不恁麼ならば、作廢生か行履せん。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、長慶有る時云く、「寧ろ阿羅漢に三毒ありと説くも、(焦穀

め臣が牛を解くの時、見る所、牛に非ざる者無し、三年の後未だ嘗て全牛を見ず、今の時に方つて、臣、神を以て遇す、而して目を以て視す云云。」

以下二句梵經に出づ。

【本則】

東嶺禪師云く、九十五則、彌ち保福、長慶、互に衲子の作用を争ふことを明すのみ。先師曰く、此の則甚深にして、評と下語に依つて見る可らず、嚙糞は保福の喫茶去を賞するに似たり、又必ずしも然らず、我れば長慶驢人の句を賞す、若し此の二人受用の處を見做せざれば、争ひ此の則些子の妙處を知ることを得ん。先師曰く、長慶讓つて路を開く、保福受けて能く用ふ、是れを曰ふ、頭たり第一第二と。特に些子の道理有り。東嶺又一偈を打して曰く、「一や

芽を生せず。如來に二種の語ありと説かず、(已に是れ釋迦老子を謗り了れり。)如來に語なしとは道はず。(猶ほ自ら顛頂、早に是れ七穿八穴。)只だ是れ二種の語なし。(周由者也、什麼の第三第四種とか説かん。)保福云く、「作廢生か是れ如來の語。」(好一撈、什麼と道ふぞ。)慶云く、「雙人争か聞くことを得ん。」(空に望んで啓告す。七花八裂。)保福云く、「情に知んぬ彌が第二頭に向つて道ふことを。」(争か明眼の人を瞞じ得ん。鼻孔を裂轉すること、何ぞ止た第二頭のみならん。)慶云く、「作廢生か是れ如來の語。」(錯、卻つて些子に較れり。)保福云く、「喫茶去。」(領。復た云く、還つて會すや、蹉過了也。)

【評唱】長慶保福、雪峯の會下に在つて、常に互に相舉覺商量す。一日平常に此の如く説話して云く、「寧ろ阿羅漢に三毒有りと説くも、如來に二種の語有りと説かず。」梵語には阿羅漢、此には殺賊と云ふ、功能を以て名を彰す。能く九九八十一品の煩惱を斷す。諸漏已に盡き、梵行已に立す、此は是れ無學阿羅漢の位なり。三毒は即ち是れ貪瞋癡の根本煩惱なり。八十一品すら、尚ほ自ら斷じ盡す、何ぞ況んや三毒をや。長慶道く、「寧ろ阿羅漢に三毒有りと説くも、如來に二種の語有りと説かず。」大意如來に不實の語無きことを顯さんことを要す。法華經に云く、「唯だ此の一事實のみ、餘の二は則ち眞に非ず。」又云く、「唯だ一乗の法のみ有つて、二も無く亦三も無し」と。世尊三百餘會、機を觀て

教を返し、病に應じて藥を與ふ。萬種千般の説法畢竟二種の語無し。他の意這裏に到つて諸人作麼生
 が見得せん。佛一音を以て法を演説することは、則ち無きにあらず。長慶要且つ未だ夢にも如來の語
 を見ざるに在り。何が故ぞ。大いに人の食を説いて、終に飽くこと能はざるに似たり。保福他の平地
 上に教を説くを見て、遂に問ふ、「作麼生か是れ如來の語。」慶云く、「聾人争か聞くを得ん。」この漢知
 んぬ他幾時か、鬼窟裏に在つて活計を作し來る。保福云く、「情に知んぬ爾が第二頭に向つて道ふこと
 を。」果して其の言に中れり。卻つて問ふ、「師兄作麼生か是れ如來の語。」福
 云く、「喫茶去。」鎗頭倒に別人に奪卻し了らる。大小の長慶、失錢遭罪。
 且く諸人に問はん、如來の語還つて幾箇か有る。須らく知るべし恁麼に見
 得して、方に這の兩箇の漢の敗缺を見んことを。子細に檢點し將ち來らば、
 盡く棒を喫すべし。一線道を放つて、他に與へて理會せしむ。有る底は

●此の一句、維摩經佛國品に出
 づ。
 ●楞嚴經第一に云く、多聞有り
 と雖も、若し修行せずんば聞
 かざると等し、人の食を説い
 て終に飽く能はざるが如し。

云ふ、「保福道ひ得て是なり、長慶道ひ得て不是なり」と。只管に語に随つて解を生じて便ち道ふ、「得
 有り失有り」と。殊に知らず、古人擊石火の如く、閃電光に似たることを。如今の人他の古人の轉處に
 去つて看す。只管に句下に去つて走つて便ち道ふ、「長慶當時便ち用ひす、所以に第二頭に落つ。」保福
 云く、「喫茶去」と。便ち是れ第一頭と。若し只だ恁麼に看ば、彌勒下生に到るとも、也た古人の意を
 見ず。若し是れ作家ならば、終に這般の見解を作さず。這の窠窟を跳出して、向上に自ら一條の路有

り、爾若し聾人争か聞くことを得んと云ふ、什麼の不是處か有らん。保福喫茶去と云ふ、什麼の是處
 か有らんと、轉た沒交涉。是の故に道く、「他活句に參じて、死句に參せざれ」と。這の因縁、偏身是
 通身是の因縁と一般なり。爾が計較是非の處無し、須らく是れ爾が脚跟下、
 淨裸裸地にして、方に古人相見の處を見るべし。五祖老師云く、「馬前の相
 撲の如くに相似たり。」須らく是れ眼に辨じ手親しかるべし。這箇の公案、若し正眼を以て之を觀て、
 俱に得失無き處、箇の得失を辨じ、親疎無き處に、這の親疎を分たば、長慶も也た須らく保福を禮拜
 して始めて得べし。何が故ぞ、這箇の些子の巧處用ひ得て好し。電轉じ星飛ぶが如くに相似たり。保
 福妨げず牙上に牙を生じ、爪上に爪を生ずることを。頰に云く、

●第八十九則。
 ●第十八則の頰。

【頰】頭たり第一第二。(我が王庫の中には是の如き事無し。古今の榜樣、邪に隨ひ惡を逐うて什麼か
 作ん)臥龍止水を鑿みす。(同道方に知る)無處には月あつて波澄み、(四海孤舟獨り自ら行く)徒に
 ト度するに勞す、什麼の椀をか討ねん。(有處には風なきに浪起る)人を嚇殺す、還つて寒毛卓豎す
 ることを覺ゆるや。打つて云く、來也。(稜)禪客稜(禪客)。(勾賊破家、鬧市裏に出頭すること莫れ。
 失錢遭罪)三月禹門點額に遭ふ。(己を退けて人に讓る、萬が中一りも無し。只だ氣を飲み聲を吞む
 ことを得たり。)

【評唱】「頭たり第一第二。」人只管に第一第二を理會せば、正に是れ死水裏に活計を作す。這箇の機

巧、爾只だ第一第二の會を作さば、且く摸索不着なること存らん。雪竇云く、「臥龍止水を鑿みす」と。死水裏に豈に龍有つて藏れんや。若し是れ第一第二ならば、正に是れ止水裏に活計を作す。須らく是れ洪波浩渺、白浪滔天の處に、方に龍有つて藏るべし。正に前頭に澄潭許さず蒼龍の蟠ることをと云ふに似たり。道ふことを見ずや、「死水龍を藏さず」と。又道ふ、「臥龍長へに怖る碧潭の清きを」と。所以に道ふ、「龍無き處には月有つて波澄み、風恬かに浪靜かなり。龍有る處には風無きに浪を起す」と。大いに保福の喫茶去と道ふに似たり。正に是れ風無きに浪を起す、雪竇這裏に到つて、一時に爾が與に情解を打疊して、頌し了れり。佗餘韻有つて、文理を成さしむ。依前として裏頭に就いて一隻眼を著く。也た妨げず奇特なることを。卻つて道ふ、「稜禪客稜禪客、三月禹門點額に遭ふ」と。長慶是れ龍門を透る底の龍なりと雖も、卻つて保福に驀頭に一點せらる。

第九十六則

【本則】 擧す、趙州、衆に示す三轉語。(什麼と道ふぞ、三段同じからず。)
 【評唱】 趙州此の三轉語を示し了つて、末後に卻つて云く、「眞佛屋裏に坐す」と。這の一句忒煞だ。郎當。他の古人一隻眼を出して、手を垂れて人を接す。略ぼ此の語を借つて箇の消息を通じ、人の爲にせんことを要す。

【本則】 東嶺禪師云く、九十六則、則ち趙州兒孫の爲に三轉語を垂る、雪竇三頌を拈出し、轉語毎に、語許多の工夫を盡して、

爾若し一向に正令全提せば、法堂前草深きこと一丈。雪竇他の最後の一句漏逗することを嫌うて、所以に削り去つて、只だ三句を頌す。泥佛若し水を渡らば、則ち爛卻し了らん。金佛若し鐘中を渡らば、則ち鎔卻し了らん。木佛若し火を渡らば、便ち燒却し了らん。什麼の會し難きことか有らん。雪竇一百則の頌古、計較葛藤す、唯だ此の三頌、直下に衲僧の氣息有り。只だ是れ這の頌、也た妨げず會し難きことを。爾若し此の三頌を透得せば、便ち爾に罷參を許す。

【頌】 泥佛水を渡らす。(鼻孔を浸爛す、風無きに浪を起す。)神光天地を照す。(他の什麼の事にか干らん、兔を見て鷹を放つ。)雪に立つて如し未だ休せずんば、(一人虚を傳ふれば萬人實を傳ふ、錯を將て錯に就く。阿誰か會て爾を見來る。)何人か雕僞せざらん。(寺に入つて額を見る、二六時中走上走下是れ什麼ぞ、閻黎使ち是。)

【評唱】 「泥佛水を渡らす、神光天地を照す」と。這の一句に頌して分明に了る。且く道へ、什麼と爲てか卻つて神光を引く。二祖初め生る、時神光室を燭して、霏漢に亘る。又一夕神人現じて、二祖に謂つて曰く、

別に大事有ることを諷す。先師曰く、「此の公案に、千七百則の公案と銜合の詮訣有り、都来一則の精要、今、三轉を分つば、恐らくは是れ雪竇の錯りならん、老僧若し對話せば必ず道はん、請ふ再び語る莫れ」と、是れ南泉門下の調べ、恐る可く憶む可し。先師七十八の卷、別に毒爪牙を制し、意趣を通ずるのみ。又一偈を打す、最も趙州の長處を補ふ、曰く、「眞佛屋裡に坐し、病猿金鎖を咬む、金色の僧を賺殺して、塔前に半座を分つ。」
 ① 郎當は「おちぶれる」と譯す、詳解は前に出づ。
 ② 傳燈第三、會元第一、正宗記第六に傳あり。
 ③ 伊水浴水なり。
 ④ 福聖の二本、傳燈、會元、並に禮術と作す。

「何ぞ此に久しき。汝當に道を得べき時至れり、宜しく即ち南に之くべし。」
二祖神遇を以て、遂に神光と名く。久しく伊洛に居して、博く群書を極む。毎に嘆じて曰く、「孔老の教は、風規を祖述す、近ろ聞く、達磨大師少林に住すと。」乃ち彼に往いて晨夕參扣す。達磨端坐面壁して、誨勵を聞くこと莫し。光自ら忖つて曰く、「昔人道を求むるに、骨を敲いて髓を出し、血を刺して飢を濟ひ、髪を布いて泥を掩ひ、崖に投じて虎に飼ふ。古尙ほ此の若し、我れ又何如ぞや。」其の年十二月九日の夜、大いに雪ふる、二祖砌下に立つ。明くる遅ひ積雪膝を過ぐ。達磨之を憫んで曰く、「汝雪に此に立つ、當に何事をか求むべき。」二祖悲涙して曰く、「惟だ願はくは慈悲、甘露門を開いて、廣く群品を度し玉へ。」達磨曰く、「諸佛の妙道、曠劫に精勤して、行じ難きを能く行じ、忍ぶに非ざるを而も忍ぶ。豈に小徳小智、輕心慢心を以て、眞乘を冀はんと欲せば、是の處り有ること無し。」二祖誨勵を聞いて、道に向ふこと益切なり。潛に利刀を取つて、自ら左臂を斷つて、達磨の前に致く。磨是れ法器なることを知つて、遂に問うて曰く、「汝雪に立つて臂を斷つ、當に何事の爲にすべき。」二祖曰く、「某

⑤大般若三百九十八卷に曰く、常啼菩薩、法湧菩薩の所に往いて、供養して甚深般若を聽聞せんと欲す、以て供養の具無し、故に市に於て身を賣る、時に天帝釋、身を變じて娑羅門と爲りて、買ひて天を祀らんと欲す、時に常啼手に利刀を取りて、皮を剥ぎ肉を刺き髓を出す、天帝釋喜して本形に復して、讚すれば將處平復す、遂に曼無德城に到りて、法湧菩薩に見ゆと云云。

⑥賢愚因緣經第二慈力王血施緣品の其の大意に云く、過去此の闍浮提に大國王有り、彌佉羅提羅と名づく、慈悲にして常に十善を以て民庶を教ふ、國土安穩なり、諸疫鬼の輩恒に人の血氣を吸ふて、用つて自ら濟活す、爾の時人民數く十善に従ふ、衆邪惡疫故て健し近せず、飢羸困乏瘦悴して

甲心未だ安からず、乞ふ師安心せしめよ。」磨曰く、「心を將ち來れ、汝が與に安んせん。」祖曰く、「心を覓むるに了に不可得なり。」達磨云く、「汝が與に安心し竟んぬ。」後達磨爲に其の名を易へて慧可と曰ふ。後に三祖の燦大師を接待す、既に法を傳へて舒州の皖公山に隱る。後周の武帝、佛法を破滅し僧を沙汰するに屬して、師太湖縣の司空山に往來す。居に常處無く、十餘載を積むまで、人の知る者無し。宣律師の高僧傳に、二祖の事を載すること詳かならず。三祖の傳に云く、「二祖の妙法、世に傳らず、頼に末後依前として他の當時雪に立つことを悟るに値ふ」と。所以に雪竇道く、「雪に立つて如し未だ休せずんば、何人か雕僞せざらん」と。雪に立つて若し未だ休せずんば、足恭詭詐の人皆之に效うて、一時に只だ雕僞を成して、則ち是れ詭詐の徒ならん。雪竇泥佛水を渡らざることを頌す。什麼と爲てか、卻つて這の因縁を引き來つて用ふる。他意根下に參得して一星事無く、淨裸躰地にして、方に頌し得ること此の如し。五祖尋常人をして此の三頌を看せしむ。豈に見すや、洞山の初和尚頌有り、衆に示して云く、「五臺山上雲飯を蒸し、古佛堂前狗天に尿す。刹竿頭上に髓子を煎す、三箇の

力無し、五夜又來りて王に問みを乞ふ、王即ち自ら脈を觸し身の五處を刺す、時に五夜又各自に器を持し來りて血を承けて飲む、飽滿して成く王の思を頼む、王復た告げて曰く、汝若し克足せば十善を念修すべし、我れ今身血を以て、汝が飢渴を濟ふて、安穩を得せしむ、後成佛の時、當に法身戒定慧血を以て、汝が三毒諸欲の飢渴を除いて、涅槃安穩の處に安置すべし。云云。
⑦此の緣六十則の評に見えたり。
⑧金光明經第四捨身品に、摩訶羅陀王の第三王子摩訶薩埵、飢虎の爲に自ら身を捨つるの緣を載す、其の誓言に云く、我れ今諸の衆生を利せんが爲の故に、最勝無上道を證せんがための故に云云。高山の上より身を虎前に投ず云云。

胡孫夜錢を簞る。又杜順和尚道く、「懷州の牛禾を喫すれば、益州の馬腹脹る。天下に醫人を覓めて、猪の左膊の上に灸す。」又傳大士の頌に云く、「空手にして鋤頭を把り、歩行にして水牛に騎る、人は橋上より過ぐ、橋は流れて水は流れず。」又云く、「石人の機汝に似たらば、也た巴歌を唱ふることを解せん、汝若し石人に似たらば、雪曲も應に須らく和すべし。」若し此の語を會得せば、便ち他の雪竇の頌を會せん。

【頌】金佛鐘を渡らす。(眉毛を燎卻す、天上天下唯我獨尊。)人來つて紫胡を訪ふ。(又恁麼にし去るや、只だ恐らくは喪身失命せんことを。)牌中數箇の字。(字を識らざる底の猫兒も也た話會の處無し。天下の禪僧皆を挿むことを得ず、只だ恐らくは喪身失命せんことを。)清風何の處にか無からん。(又恁麼に去るや、頭上漫漫脚下漫漫。又云く、來也。)

【評唱】「金佛鐘を渡らす、人來つて紫胡を訪ふ」と。此の一句に亦頌し了れり。什麼と爲てか卻つて人の來つて紫胡を訪ふことを引く。須らく是れ作家の鐘輪にして始めて得べし。紫胡和尚、山門に一の牌を立つ、牌中に字有り、云く、「紫胡に一狗有り、上は人の頭を取り、中は人の腰を取り、下は人の脚を取る。擬議す

⑥六學高僧傳に云く、達磨乃ち曰く、諸佛最初に道を求め、法の爲に身を忘る、汝今賢を吾が前に斷ち、以て佛慧を求むること可なり、遂に與に名を易へて慧可と曰ふ。

⑦傳燈第三、會元第一、正宗記第六に傳あり。

⑧律の第九祖、宋の高僧傳十四、佛祖統紀の三十に傳あり。

⑨論語公冶長の篇に、子の曰く、「言を巧にし、色を令くし、恭を足すは左丘明之を耻づ、丘も亦之を耻づ。足は過なり。

⑩杜順和尚は、姓は杜、名は法順、華嚴法師なり。

⑪林間錄の下卷、禪林類聚第八に、法身の偈と作す。

⑫此の頌、傳燈二十七に出づ。

⑬洛浦の頌、會元第六に見ゆ。

れば則ち喪身失命す」と。凡そ新到を見ては、便ち喝して云く、「狗を看よ」と。僧纒かに首を回せば、紫胡便ち方丈に歸る。且く道へ、什麼と爲てか、卻つて趙州を咬むことを得ざる。紫胡又一夕夜深けて、後架に於て叫んで云く、「捉賊捉賊」と。黒地に一僧に逢著す。欄杆に捉住して云く、「捉へ得たり捉へ得たり」と。僧云く、「和尚是れ某甲にあらずや。」胡云く、「是なることは則ち是、只だ是れ肯て承當せず。爾若し這の話を會得せば、便ち爾に許す一切の人を咬殺して、處處清風凜凜たることを。若し也た未だ然らずんば、牌中數箇の字、決定して奈何ともせず。若し他を見んと要せば、但だ透得盡して方に見よ。頌に云く、

【頌】木佛火を渡らす。(燒卻し了れり、唯だ我れ能く知る。)常に思ふ破竈墮。(東行西行何の不可か有らん。癡兒伴を索く。)杖子忽ちに擊著す。

⑭後架は照堂の後にあり、大衆洗面の處、架は欄なり。

(山僧が手裏に在り、山僧人を用ひず、阿誰か手裏に無き。)方に知んぬ我れに辜負すること。(爾に似て相似たり、摸索不着せば什麼の用處か有らん。蒼天蒼天。三十年の後始めて得ん。寧ろ永劫に沉淪す可くとも、諸聖の解脱を求めじ、若し箇の裏に向つて薦得するも未だ免れず辜負すること。作麼生か辜負せざることを得去らん。拄杖子未だ免れず別人の手裏に在ることを。)

【評唱】「木佛火を渡らす、常に思ふ破竈墮」と。此の一句に亦頌し了れり。雪竇此の木佛火を渡らざるに因つて、常に破竈墮を思ふ。破竈墮和尚、姓字を稱せず、言行測り叵し、嵩山に隱居す。一日

徒を領じて、山塙の間に入るに、廟有り甚だ靈なり、殿中に唯だ一の竈を安す。遠近祭祀して輟まず、物の命を烹殺したること甚だ多し。師、廟中に入り、拄杖を以て竈を敲つこと三下して云く、「咄、汝本博士合成す、靈何れよりか來り、聖何れよりか起つて、恁麼に物の命を烹殺す」と云つて、又乃ち擊つこと三下。竈乃ち自ら傾破墮落す。須臾にして一人有つて、青衣峨冠、忽然として師の前に立つて拜を設けて曰く、「我は乃ち竈神なり、久しく業報を受く、今日師の無生の法を説くことを蒙つて、已に此の處を脱して、生じて天中に在り、特に來つて謝を致す。」師曰く、「汝が本有の性なり、吾が強ひて言ふに非ず。」神再び拜して没す。侍者曰く、「某甲等、久しく和尚に參侍すれども、未だ指示を蒙らず、竈神何の徑旨を得てか、便乃ち天に生ず。」師曰く、「我れ只だ伊れに向つて道ふ、汝本博士合成す、靈何れよりか來り、聖何れよりか起る」と。侍僧俱に對無し。師曰く、「會す麼。」僧云く、「不會。」師云く、「禮拜著せよ。」僧禮拜す。師云く、「破也破也、墮也墮也。」侍者忽然として大悟す。後に僧有り、安國師に舉似す、師歎じて云く、「此の子物我一如なることを會し盡す」と。竈神此を悟ることは則ち故に是。其の僧乃ち五蘊の成身、亦破也墮也と云へば、二り俱に開悟す。且く四大五蘊と埒瓦泥土と、是れ同か是れ別か、既に是れ此の如し。雪竇什麼と爲てか道ふ、「杖子忽ち擊著す。方に知んぬ我れに辜

①破竈墮和尚は、嵩山安國師の法嗣、傳燈第四、會元第二に傳あり、傳燈傾破墮落の下の註に云く、「安國師號して破竈墮と爲す。」
 ②安國師は、五祖大滿禪師旁出の法嗣、傳燈第四、會元第二に傳あり。
 ③四大は地水火風、五蘊は色受想行識。

負することを。甚に因つてか卻つて箇の辜負と成り去る、只だ是れ未だ拄杖子を得ざることに在り。且く道へ、雪竇木佛火を渡らざることを頌す、什麼と爲てか卻つて破竈墮の公案を引く。老僧直截に備が與に説く、他の意只だ是れ得失情塵意想を絶して、淨裸裸地にして、自然に他の親切の處を見ん。

第九十七則

垂示に云く、一を拈じて二を放つ、未だ是れ作家ならず。一を擧げて三を明らむ、猶は宗旨に乘く。直に天地陡變し、四方絶唱し、雷奔り雷馳せ、雲行き雨驟き、傾湫倒嶽、變瀉ぎ盆傾くことを得るも、未だ一半を提得せざることあり。還つて天關を轉ずることを解し、能く地軸を移す底ありや。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、金剛經に云く、「若し人の爲に輕賤せられんに、(一線道を放つ。又且つ何ぞ妨げん。)是の人先世の罪業あつて、(驢駝馬載。)應に惡道に墮すべきに、(陷墮し了れり。)今世の人に輕賤せらるゝを以ての故に、(本を酬いて末に及ばず、只だ忍受することを得たり。)先世の罪業、(什麼の處に向つてか摸索せん。穀を種ゑて豆苗を生せず。)則ち爲に消滅す」と。(雪上に霜を加ふ又一重、湯の水を消すが如し。)

【本則】東嶺禪師云く、九十七則、便ち金剛經の大事なり。先師曾て道ふ、「一代藏經多き中に、大般若を撰び、般若多き中に特に此の經を撰び、此の經多し中有る中に、此の語句を撰ぶ、此の經此の頃、最も仔細に參

【評唱】金剛經に云く、「若し人の爲に輕賤せられんに、是の人先世の罪業あつて、應に惡道に墮すべきに、今世の人に輕賤せらるゝを以ての故に、先世の罪業、則ち爲に消滅す」と。只だ平常の講究に據らば、乃ち經中に常に論ず。雪竇拈じ來つて這の意を頌して、敎家鬼窟裏の活計を打破せんと欲す。昭明太子此の一分を科して、能淨業障と爲す。敎中の大意、此の經の靈驗を説く。此の如きの人、先世の地獄の業を造る、善力強きが爲に未だ受けず。今世の人に輕賤せらるゝを以ての故に、先世の罪業、則ち爲に消滅す。此の經故に能く無量劫來の罪業を消して、重を轉じて輕と成し、輕を轉じて受けざらしめ、復た佛果菩提を得せしむ。敎家に據らば此の二十餘張の經を轉するを、便ち喚んで持經と作す。什麼の交渉か有らん。有る底は道ふ、經に自ら靈驗有り。「若し慙廢ならば、備試みに一卷を將て、閑處に放在して看よ、他感應有りや也た無や。法眼云く、佛地を證する者を、此の經を持すと名く。」經中に云く、「一切の諸佛及び諸佛阿耨多羅三藐三菩提の法は、皆此の經より出づ」と。且く道へ、什麼を喚んでか此の經と作さん。是れ黃卷赤軸底是なること莫し廢。且く錯つて定盤星を認むること莫

詳す可きのみ、然らずんば看經の眼を具せず、向上の事全く失す。予、乙丑の比、碧巖錄に於て、則頭俱に到り、一點の疑無し、只だ此の頌のみ有りて徹せざる處有り、先師に請發す、師拈一反して吟弄嗟嘆して曰く、「好頌好則、予此に於て不安、籠に在ること多日、後二歲許りを經て徹處を得ること許多、一偈以て予が志を述ぶ。」

金剛般若上頭の事、其に因つて分つて三十二と爲す、太子汝眼睛を缺擇す、瓊王之嚴責知已無し。

傳燈第二十九、大法眼禪師文益の頌十四首中、金剛經爲人輕賤の章の細字註に云く、「持經とは佛地を證するなり。」

れ。金剛は法に論ふ、體堅固なるが故に、物壞する能はず。利用なるが故に、能く一切の物を摧く。山に擬すれば則ち山摧け、海に擬すれば則ち海竭く。論に就いて名を彰す、其の法亦然り。此の般若に三種有り、一には實相般若、二には觀照般若、三には文字般若。實相般若とは即ち是れ眞智なり。乃ち諸人腳跟下、一段の大事、今古に輝騰して、迥かに知見を絶す、淨裸裸赤灑灑たる者は是れ。觀照般若とは、即ち是れ眞境なり。二六時中、放光動地、聲を聞き色を見る者は是れ。文字般若とは、即ち能詮の文字。即ち如今説く者聽く者、且く道へ、是れ般若か、是れ般若にあらざるか。古人道く、「一人一卷の經有り。」又道く、「手に經卷を執らずして、常に如是經を轉ず」と。若し此の經の靈驗に據らば、何ぞ止だ重を轉じて輕ならしめ、輕を轉じて受けざらしむるのみならん。設使ひ聖に敵する功能も、未だ奇特と爲さず。見すや龐居士、金剛經を講するを聽いて、座主に問うて曰く、「俗人敢て小問有り、知らず如何。」主云く、「疑有らば請ふ問へ。」士云く、「無我相無人相と、既に我人の相無くんば、阿誰をして講せしめ、阿誰をして聽かしめん。」座主對無し。卻つて云く、「某甲文に依つて義を解す、此の意を知らず」と。居士乃ち頌有り、云く、「無我亦無人、作麼ぞ疎親有らん。君に勸む座を歷ることを休めよ。爭か直に眞を求むるに似かん。金剛般若の性、外一纖塵を絶す。我聞并に信受、總に是れ假りに名を稱す」と。此の頌最も好し、分明に一時に説き了れり。圭峰四句の偈を科して云

①丹丘の與成、法華經台宗の諸義を叙ぶる中に、智者の云く、「手に經卷を執らず、常に是の經を讀み、口に言音無うして、獨く衆典を誦す云云。」

く、「凡そ所有の相は、皆是れ虚妄なり。若し諸相は非相なりと見ば、即ち如來を見ん。」此の四句の偈の義、全く佛地を證する者を、此の經を持すと名づくこと云ふに同じ。又道く、「若し色を以て我れを見、音聲を以て我れを求めば、是の人邪道を行す、能く如來を見ること能はず」と。此れ亦是の四句の偈、但だ中間其の義全き者を取る。僧 晦堂に問ふ、「如何なるか是れ四句の偈。」晦堂云く、「一話墮するも也た知らず。」雪竇此の經上に於て指出す。若し人有り、此の經を持せん者は、即ち是れ諸人本地の風光、本來の面目なり。若し祖令當行に據らば、本地の風光、本來の面目も、亦斬つて三段と爲さん。三世の諸佛、十二分教、一捏と消せず。這裏に到つて設使ひ萬種の功能有るも、亦管得すること能はず。如今の人只管に經を轉じて、都て是れ箇の什麼の道理と云ふことを知らず。只管に道く、「我れ一日に多少を轉得す」と。只だ黃卷赤軸、巡行數墨を認む。殊に知らず全く自己本心の上より起ることを。這箇、唯だ是れ轉處の些子なり。大珠和尚云く、「空屋裏に向つて、數函の經を堆うして看よ、他光を放つ麼。只だ自家一念發する底の心、是れ功德なるを以てなり。」何が故ぞ、萬法は皆自心より出づ、一念是れ靈なり、既に靈なれば即ち通ず、既に通ずれば即ち變ず。古人道く、「青青たる翠竹、盡く是れ眞如。鬱鬱たる黃花、般若に非すと云ふこと無し。」若し見得徹し去らば、即ち是れ眞如。忽ちに未

④ 晦堂祖心は、南嶽下十一世黃龍南の法嗣、僧寶傳二十三、會元十七に傳あり。
⑤ 話墮は、論に負けるなり。
⑥ 大珠和尚は、南嶽下二世馬祖の法嗣、傳燈第六、會元第三に傳あり。
⑦ 以下、般若に非すと云ふこと無しに至る、道生法師の語、祖庭事苑第五に出づ。

だ見得せずんば、且く道へ、作麼生か喚んで眞如と作さん。華嚴經に云く、「若し人三世一切の佛を了知せんと欲せば、應に法界の性は、一切唯心の造なることを觀すべし。」倘若し識得し去らば、境に逢ひ縁に遇うて、主と爲り宗と爲らん。若し未だ明得すること能はずんば、且く伏して處分を聽け。雪竇眼を出して大槩を頌して、經の靈驗を明めんことを要す。頌に云く、

⑧ 以下、唯心の造なることを觀すべしに至る、唐譯華嚴經十卷、夜摩宮中偈讚品覺林菩薩の偈。

【頌】 明珠掌に在り、(上霄漢に通り、下黃泉に徹す。什麼と道ふぞ、四邊諸訛八面玲瓏。)功ある者を賞す。(多少分明、他に隨ひ去る。忽ちに若し功無き時作麼生か賞せん。)胡漢來らず。(内外消息を絶す、猶ほ些子に較れり。)全く伎倆なし。(展轉して沒交渉。什麼の處に向つてか摸索せん。漆桶打破し來れ相見せん。)伎倆既になし、(休し去り歇し去る、阿誰か恁麼に道ふ。)波旬途を失す。(勘破了也、這の外道魔王蹤跡を尋ぬるに見えず。)瞿曇瞿曇。(佛眼も觀れども見えす。咄。)我れを識るや也た無や。(咄、勘破了也。)復た云く、「勘破了也。」(一棒一條の痕、已に言前に在り。)

【評唱】 「明珠掌に在り、功有る者は賞す。」若し人有つて此の經を持し得て、功驗有る者は、則ち珠を以て之を賞す。他此の珠を得て、自然に用ふることを會す。胡來れば胡現じ、漢來れば漢現す。萬象森羅、縱横顯現す。此は是れ功動有り。法眼云く、「佛地を證する者を、此の經を持すと名く」と。

此の兩句に公案を頌し舉る。「胡漢來らず、全く伎倆無し。」雪竇鼻孔を裂轉す、也た胡漢有つて來る則んば、備をして現せしむ。若し忽ち胡漢俱に來らざる時、又且つ如何。這裏に到つて佛眼も也た觀れども見えず。且く道へ、是れ功勳か是れ罪業か、是れ胡か是れ漢か、直に羚羊の角を掛くるに似たり。道ふこと莫れ、聲響蹤跡、氣息も也た無し、什麼の處に向つてか摸索せん。諸天をして花を捧ぐるに路無く、魔外をして酒かに靦ふに門無からしむるに至る。是の故に洞山和尚、一生住院、土地神他の蹤跡を覺むるに見えず。一日厨前に米麪を抛撒す。洞山心を起して曰く、「常住の物色何ぞ作錢すると此の如きを得たる。」土地神、遂に一見することを得て便ち禮拜す。雪竇道く、「伎倆既に無し」と。若し此の伎倆無き處に到つては、波旬も也た途を失せしむ。世尊一切衆生を以て赤子と爲す。若し一人有つて發心修行すれば、波旬の宮殿之が爲に振裂す、他便ち來つて修行者を惱亂す。雪竇道く、「直饒ひ波旬恁麼に來るも、也た須らく途路を失却して、近傍の處無からしむべし。」雪竇更に自ら點臂して云く、「瞿曇瞿曇、我れを識るや也た無や」と。道ふこと莫れ、是れ波旬と。任ひ是れ佛來るも、還つて我を識るや也た無や。釋迦老子、尙ほ自ら見ず、諸人什麼の處に向つてか摸索せん。復た云く、「勘破了也。」且く道へ、是れ雪竇瞿曇を勘破するか、瞿曇雪竇を勘破するか、具眼の者、試みに定當して看よ。

①物色は猶ほ物事と云ふがことし、色の字事の字別に意義なし。

第九十八則

垂示に云く、一夏嘮々として葛藤を打し、幾ど五湖の僧を絆倒す。金剛の寶劍當頭に截る。始めて覺ゆ從來百不能なることを。且く道へ、作麼生か是れ金剛の寶劍。眉毛を毆上して、試みに請ふ鋒銛を露す、看よ。

【本則】 舉す、天平和尚行脚の時、西院に參す。常に云く、「道ふこと莫れ佛法を會すと、箇の舉話の人を覺むるも也た無し。」(漏逗少からず、この漢是なることは則ち是爭奈せん靈龜尾を曳くことを。)一日西院遙かに見て召して云く、「從游。」(鏡鈎搭索し了れり。)平頭を擧ぐ。(著、兩重の公案。)西院云く、「錯。」(也た須らく是れ鐵裏に鍛過して始めて得べし。劈腹剜心、三要印開して朱點穿し。未だ擬議を容れざるに主賓分る。)平行くこと三兩歩。(已に是れ半前落後。這の漢泥裏に土塊を洗ふ。)西院又云く、「錯。」(劈腹剜心、人皆喚んで兩重の公案と作す。殊に知らず水を入るゝに似、金を金に博ふるが如きことを。)平近前す。(依前として落處を知らず、展轉して摸索不着。)西院云く、「適來這の兩錯、是れ西院が錯か、是れ上座が錯か。」

【本則】 東嶺禪師云く、九十八則、便ち西院兩錯、古今真則たることを明す。西院和尚は、先賢壽延沼禪師に承嗣す、此の師特に扶宗の志有り、今、天平を試むるの一機、甚だ接履を含めり、實壽の嗣爲るに耻づ、夏を過して此の公案を圓にせんことを請求するに、天平の省せざるは、大いに祖師門下の事を失す、惜むべし。

（前簡は猶ほ軽く後簡は深し。）平云く、「從漪が錯。」錯つて驢鞍橋を認めて喚んで爺の下領と作す、恁麼の禪僧に似ば、千箇萬箇を打殺すとも什麼の罪か有らん。西院云く、「錯。」雪上に霜を加ふ。）平休し去る。（錯つて定盤星を認む、果然として落處を知らず、軒かに知んぬ偏か鼻孔別人の手裏に在ることを。）西院云く、「且く這裡に在つて夏を過し、上座と共に這の兩錯を商量せんことを待て。」（西院尋常着梁硬きこと鐵に似たり。當時何ぞ起ひ將て出し去らざる。）平當時使ち行く。（也た禪僧に似たり、似たることは則ち似たり、是なることは則ち未だ是ならず。）後に住院して衆に謂つて云く、（貧兒舊債を思ふ、也た須らく是れ點過すべし。）我れ當初行脚の時、業風に吹かれて、思明長老の處に到る、兩錯を連下せられ、更に我れを留めて夏を過して、我れと共に商量せんことを待たしむ。我れ恁麼の時錯とは道はず、我が發足して南方に向つて去りし時、早く知んぬ錯と道ひ了ることを。）（這の兩錯を争奈何せん。千錯萬錯争奈せん没交渉。轉た見る郎當として人を慈殺すること。）

【評唱】 思明先づ 大覺に參す、後 前寶壽に承嗣す。 一日問ふ、「化城を踏破し來る時如何。」壽云く、「利劍、死漢を斬らす。」明云く、「斬。」壽使ち打つ、思明十回斬と道ふ。壽十回打つて云く、「這の漢、甚の死急を著てか、箇の死屍を將て、他の痛棒に抵する。」遂に喝出す。其の時一僧有つて、

①思明即ち西院なり、南嶽下六世寶壽の法嗣、傳燈十二、會元十一に傳あり。
②大覺は、南嶽下五世臨濟の法嗣、傳燈十二、會元十一に傳あり。

寶壽に問うて云く、「適來問話底の僧、甚だ道理有り、和尚方便して他を接せよ。」寶壽亦打つて、這の僧を趕ひ出す。且く道へ、寶壽亦這の僧を趕ふ。唯だ當に他是と説き非と説くと道ふべき、且つ別に道理有るか、意作麼生。後來俱に寶壽に承嗣す。 思明一日出でて南院に見ゆ、院問うて云く、「甚れの處より來る。」明云く、「許州より來る。」院云く、「什麼をか將り得來る。」明云く、「箇の江西の剃刀を將り得たり、和尚に獻與せん。」院云く、「既に許州より來る、甚に因つてか卻つて江西の剃刀有る。」明、院の手を把つて 招一招す。院云く、「侍者收取せよ。」思明衣袖を以て拂一拂して便ち行く。院云く、「阿刺刺、阿刺刺」と。天平曾て 進山主に參じ來る。他諸方に到つて、此の蘿蔔頭の禪に參得して、肚皮裏に在くが爲に、到る處に便ち軽く大口を開いて道く、「我れ禪を會し道を會す」と。常に云く、「道ふこと莫れ佛法を會すと。箇の擧話の人を覓むるに也た無し」と。屎臭の氣人に薰す、只管に輕薄を放にす。且く諸佛未だ出世せず、祖師未だ西來せず未だ問答有らず、未だ公案有らざる已前の如きんば、還つて禪道有り麼。古人事已むことを獲す、機に對して垂示す、後人喚んで公案と作す。

あり。
①前寶壽は、即ち寶壽沼和尚なり、臨濟の法嗣、傳燈十二、會元十一に傳あり。
②以下、這の僧を趕ひ出すに至る、統要十一思明の章、會元十一寶壽の章に此の縁を收む、各の少異あり。
③以下、阿刺刺に至る、傳燈十二寶壽の章、會元十一南院慧願の章に、此の縁を收む。
④招は説文に「爪刺なり」。
⑤阿刺刺は驚く意なり、「おうおう、又は「おやおや」と譯す。
⑥天平從濟は、青原下九世清蘊の法嗣、傳燈二十六、會元第八に傳あり。
⑦進山主は、青原下八世羅漢の法嗣、傳燈二十四、會元第八に傳あり。
⑧蘿蔔頭は、古抄に家常底と云ふ義あり。

因に世尊拈華、迦葉微笑。後來阿難、迦葉に問ふ、「世尊金襴を傳ふる外、別に何の法をか傳ふ。」迦葉云く、「阿難」と、阿難應諾す。迦葉云く、「門前の刹竿を倒卻著せよ」と。只だ未だ花を拈せず、阿難未だ問はざる已前の如きんば、甚の處よりか公案を得來らん。只管諸方冬瓜の印子に印定し了られて便ち道ふ、「我れ佛法の奇特を會す、人をして知らしむること莫れ」と。天平正に此の如し。西院に叫び來つて兩錯を連下せられて、直に得たり周樟惶怖して、^①分疎不下。^②前村に搆らす、後店に迭らざることを。有る者は道ふ、「箇の西來意を説く、早く錯り了れり」と。殊に西院這の兩錯の落處を知らず、諸人且く道へ、什麼の處にか落在す。所以に道ふ、「他活句に參じて、死句に參せざれ」と。天平頭を擧す、已に是れ二に落ち三に落ち了れり。西院云く、「錯。」他卻つて當用の用處を薦得せず、只だ我が肚皮裏に禪有りと道つて、他に管する莫し。又行くこと三兩歩。西院又曰く、「錯。」卻つて舊に依つて黒漫漫地、天平近前す。西院云く、「適來の兩錯、是れ西院が錯か、是れ上座が錯か。」天平云く、「從湊が錯」と。且喜すらくは沒交涉。已に是れ第七第八頭にし了れり。西院云く、「且く這裏に在つて夏を度つて、上座と共に、這の兩錯を商量せんを待て。」天平當時使ち行く、似たることは則ち也た似たり、是なることは則ち未だ是ならず。也た他不是とは道はず、只だ是れ趕へども^③上らず、然も是の如くなりと雖も、卻つて些子

①分疎不下は、云ひほどき得ずと譯す。

②前村に搆らす、後店に迭らすとは、先きへも着かず、後へも着かざるの義なり。

③上の字は着字の意におひついでと譯す。

納僧の氣息有り。天平後に住院、衆に謂つて云く、「我れ當初行脚の時、業風に吹かれて、思明和尚の處に到るに、兩錯を連下せらる。更に我れを留め夏を度つて、我れと共に商量せんことを待たしむ。我れ恁麼の時、錯と道はず、我れ發足して南方に向つて去る時、早く知んぬ錯と道ひ了ることを。」這の漢也た然だ道ふ、只だ是れ第七第八頭に落つ、^④料掉として沒交涉。如今の人他の發足して南方に向つて去りし時、早く知んぬ錯と道ひ了ることをと道ふを聞いて、便ち去つて卜度して道ふ、「未だ行脚せざる時、自ら許多の佛法禪道無し。行脚するに至るに及んで、諸方に熱瞞せらる。未だ行脚せざる時も、地を喚んで天と作し、山を喚んで水と作す可らず、幸に一星事無し」と。若し總に恁麼に流俗の見解を作さば、^⑤何ぞ一片の帽を買ふて戴いて、大家に時を過ぎざる、什麼の用處か有らん。佛法は是れ這箇の道理にあらず、若し此の事を論せば、豈に許多般の葛藤有らんや。儻若し我れは會す他は會せずと道つて、一擔の禪を擔うて、天下を遶つて走るも、明眼の人に勘破せられて、一點も也た使ふことを著す。雪竇正に此の如く頌出す。

④料は方巾切、掉は律巾切、同韻同等の疊韻なれば、料の一字の意義なり、掉の字意義なし、料は料度、料計の義にて、物事を、つるも意、今は、計較分別では、よつてもつかぬ意なり。度々頭を打ち掉つて背はざるを云ふ。

⑤古抄に、なぜに、頭巾を一つ買ふて、遷俗して時を過ぎぬぞ。

【頌】 禪家流、(漆桶一狀に領過す。)輕薄を愛す。(也た些子有り、佛を呵し祖を罵る麻の如く粟に似たり。)滿肚參じ來つて用ふることを著す。(只だ宜しく用處有るべし、方木圓孔に逗せず、閑黎他と

同參。悲むに堪へたり笑ふに堪へたり天平老。(天下の僧徒不出。旁人の眉を撮むることを恐れず、也た人の鈍悶することを得たり。)卻つて謂ふ當初悔らくは行脚せしことを。(未だ行脚せざる已前に錯り了れり。草鞋を踏破して何の用を作すにか堪へん、一筆に勾下す。)錯錯。(是れ什麼ぞ、雪竇錯つて名言を下し了れり。)西院の清風頓に銷鏤す。(西院什麼の處にか在る、何似生。道ふ莫れ西院と三世の諸佛、天下の老和尚も亦須らく倒退三千して始めて得べし。斯に於て會得せば、偏に許す天下に横行することを。)復た云く、忽ち箇の僧徒あつて出でて云はん錯と。(一狀に領過す、猶ほ此子に較れり。)雪竇が錯は天平が錯と何似ぞ。(西院又出世。款に據つて案に結す。總に没交渉。且く道へ、畢竟して如何。打つて云く、錯。)

【評唱】「禪家流、輕薄を愛す、滿肚參じ來つて用ふることを著す」と。這の漢會することは則ち會す、只だ是れ用ひ得ず。尋常目に雲霄を視て道ふ、他多少の禪を會得す」と。烘鏤裏に向つて纒かに煮るに至るに及んで、元來一點も使ふことを著す。五祖先師道く、「一般の人有つて參禪す、琉璃瓶裏に糞糞を搗くが如くに相似たり。更に動轉することを得ず、抖擻し出さず、觸著すれば即ち破る。若し活潑潑地ならんことを要せば、但だ皮殼漏子の禪に參せよ。直に高山の上に向つて撲將下來するも、亦不破、亦不壞。古人道く、「設使ひ言前に薦得するも、猶ほ浸に滯り封に迷ふ。直饒ひ句下に精通するも、未だ途

①糞糞は牡丹餅の類なるべし。
②抖擻は袋から物を取り出すを云ふ。皮殼漏子は皮袋なり、轉々自在にして破るゝことなきを云ふ。

に觸れて狂見することを免れず。「悲むに堪へたり笑ふに堪へたり天平老。卻つて謂ふ當初悔らくは行脚せしことを。」雪竇道く、「悲むに堪へたり他人に對して説き出さざることを。笑ふに堪へたり他一肚皮の禪を會して、更に些子を使ひ著ざることを。」錯錯、這の兩錯、有る者は道ふ、「天平會せざる是れ錯」と。又有る底は道ふ、「無語底是れ錯」と、什麼の交渉か有らん。殊に知らず這の兩錯、擊石火の如く、閃電光に似たることを。是れ他の向上の人行履の處なり。劔に仗つて人を斬るに、直に人の咽喉を取つて、命根方に斷するが如し。若し此の劔刃上に向つて行じ得ば、便ち七縱八横ならん。若し兩錯を會得せば、便ち以て西院の清風頓に銷鏤することを見る可し。雪竇上堂、此の話を舉し了つて、意に道く、「錯」と。我れ且く偏に問はん、雪竇這の錯、天平の錯に何似ぞ。且つ參せよ三十年。

第九十九則

垂示に云く、龍吟すれば霧起り、虎嘯けば風生ず。出世の宗猷、金玉相振ひ、通方の作略、箭鋒相挂ふ。徧界藏さず、遠近齊しく彰れ、古今明かに辨す。且く道へ、是れ什麼人の境界ぞ。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、肅宗皇帝、忠國師に問ふ、「如何なるか是れ十身調御。」(作家の君主大唐の天子、也た合に恁麼なることを知るべし。頭上の捲輪冠

【本則】東嶽禪師云く、九十九則、便

脚下の無憂履。國師云く、「檀越毘盧頂上を踏んで行け。」(須彌那畔手を把つて共に行く。猶ほ這箇の有る在り。)帝曰く、「寡人不會。」(何ぞ領話せざる、可惜許。好彩分付せず、帝ならば當時便ち喝せん、更に會することを用て什麼か作ん。)國師云く、「自己清淨法身を認むること莫れ。」(然も葛藤すと雖も卻つて出身の處有り、醉後郎當として人を愁殺す。)

【評唱】 肅宗皇帝、東宮に在せし時、已に忠國師に參す。後來即位して、之を敬すること愈篤し、出入迎送、躬自ら車輦を捧ぐ。一日箇の間端を致し來つて、國師に問うて云く、「如何なるか是れ 十身 調御。師云く、「檀越毘盧頂上を踏んで行け。」國師平生、一條の脊梁骨、硬きこと生鐵の如し。帝王の面前に至るに及んで、爛泥の如くに相似たり。然も答へ得て廉纖なりと雖も、卻つて箇の好處有り。他道ふ、「爾會得せんと要せば、檀越須らく是れ毘盧頂上に向つて行いて始めて得べし。」他卻つて薦せず、更に道ふ、「寡人不會」と。國師後面に忒然だ。郎當として草に落ち、更に頭上底の一句を注して云く、「錯つて自己清淨法身と認むること莫れ。」所謂人入具足、箇箇圓成。看よ他の一放一收、八面に敵を受くることを。道ふこ

ち毘盧頂上を生斷す、是れ參禪行脚の根本、人人此に到りて大いに躋過し去るを明す。

①書言故事第一に云く、「太子を東宮と曰ふ。選の時に、正に育徳を少陽に體す、註に謂く、「太子天子の體を繼ぐ、徳を東宮に育ふ、少陽は東方、又靈を長子と爲す、東は靈に屬す、故を以て宮を東に立つ、致に東宮と曰ふ。」

②釋氏要覽中卷、華嚴經に云く、「一には無著佛、二には願佛、三には樂報佛、四には住持佛、五には涅槃佛、六には法界佛、七には心佛、八には三昧佛、九には性佛、十には如意佛、十種の他受用佛亦十身と名く。」

③調御は十號の一なり、調御丈夫とは大丈夫の力用を具して、種種の諸法を脱き、一切衆生を調伏し制御して、垢染を離れて大涅槃を得せしむ、

とを見ずや、善く師と爲る者は、機に應じて教を設け、風を看て帆を使ふ。若し只だ一隅を僻守せば、豈に能く回互せんや。看よ佗の黄檗老、善能く人を接すること。臨濟に遇著して、三回便ち痛く六十棒を施す、臨濟當下に便ち會し去る。裴相國の爲にするに至るに及んで、葛藤忒然だし。此れ豈に是れ善く人の師と爲るにあらずや。忠國師善巧方便して、肅宗帝を接す、蓋し他八面に敵を受くる底の手段有るが爲なり。十身調御とは、即ち是れ十種の他受用身なり。法報化の三身は、即ち法身なり。何が故ぞ、報化は眞佛に非ず、亦說法者に非ず、法身に據るに、則ち一片虚凝にして寂照なり。太原の孚上座、揚州の光孝寺に在つて、涅槃經を講す。游方の僧有り、即ち夾山の典座なり、寺に在つて雪に阻てらる。因に往いて講を聴く。講じて ③三因佛性、三徳法身に至つて、廣く法身の妙理を談す、典座忽然として失笑す。孚乃ち目顧す、講じ罷んで禪者を請せしめて問うて云く、「某素智狭劣にして、文に依つて義を解す、適來講の次、上人の失笑するを見る、某必らず短乏せる處有らん、請ふ上人説け。」典座云く、「座主問はずんば、即ち敢て説かず、座主既に問ふ、則ち言はずんばある可らず、某實に是れ座主の法身を識らざることを笑ふ。孚云く、「此の如く解説す、何れの處か是ならざる。」典座云く、「請ふ座主更に説くこと一徧せよ。孚云く、「法

故に調御丈夫と號す、大明三藏法數三十五に見ゆ。

④郎當は「落ちおれる」と譯す。

⑤天親菩薩金剛經上卷の偈に云く、「應化眞佛に非ず、亦說法者に非ず、說法二取せず、斷無く言相を離る。」

⑥三因とは、一には、正因性、二には、了因性、三には、緣因性。

⑦三徳とは、法身の徳、般若の徳、解脱の徳。

身の理は猶ほ太虚の若し、豈に三際を窮め、横に十方に亘る。八極に彌綸し、二儀を包括す、縁に随ひ感に赴いて、周徧ならずと云ふこと靡し。典座曰く、「座主の説不説とは道はず、只だ法身量邊の事を識り得て、實に未だ法身を識らざること有り。孚曰く、「既に然も是の如くならば、禪者當に我が爲に説くべし。」典座曰く、「若し是の如くならば、座主暫く講を輟め、旬日静室の中に於て、端然として静慮し、心を收め念を攝め、善惡の諸縁一時に放却して、自ら窮究して看よ。」孚一に言ふ所に依る。初夜より五更に至り、鼓角の鳴るを聞いて、忽然として契悟す。便ち去つて禪者の門を叩く。典座曰く、「阿誰ぞ。」孚曰く、「某甲。」典座咄して曰く、「汝をして大教を傳持して、佛に代つて説法せしむ。夜半什麼と爲てか、酒に酔うて街に臥す。」孚曰く、「自來の講經、生身父母の鼻孔を將て扭捏す、今日より已後、更に敢て是の如くならず」と。看よ他の奇特の漢、豈に只だ去つて箇の昭昭靈靈を認めて、驢前馬後に落在せんや。須らく是れ業識を打破して、一絲毫頭の得可き無かるべし。猶ほ只だ一半を得ること有り。古人道く、「纖毫修學の心を起さずんば、無相光中常に自在なり」と。但だ常寂滅底を識つて、聲色を認むること莫れ、但だ靈知を識つて、妄想を認むること莫れと。所以に道

① 三際は前、後、中際を謂ふ。
 ② 十方は東西南北四維上下。
 ③ 東西南北四維を八極と謂ふ。
 ④ 彌綸と言ふは、周徧包羅の義。
 ⑤ 易係辭上篇に云く、易に太極有り、是れ兩儀を生ず、兩儀四象を生ず、四象八卦を生ず。
 ⑥ 唐譯華嚴第六卷、如來現相品に、一切法勝音菩薩の頌に云く、「佛身は法界に充滿し、普く一切衆生の前に現す、縁に隨ひ云云。」
 ⑦ 以下、禪門諸祖傳頌上卷、誌公和尚十二時の歌の二句なり。
 ⑧ 幻住曰く、靈妙の本知なり。

ふ、「假使ひ鐵輪頂上に旋るとも、定慧圓明にして終に失せず」と。達磨二祖に問ふ、「汝雪に立つて臂を斷つ、當に何の事の爲にかすべき。」祖曰く、「某甲心未だ安からず、乞ふ師安心せしめよ。」磨云く、「心を將ち來れ、汝が與に安せん。」祖曰く、「心を覓むるに了に不可得なり。」磨曰く、「汝が與に安心し竟んぬ。」二祖忽然として領悟す。且く道へ、正當恁麼の時、法身什麼の處にか在る。長沙云く、「學道の人眞を識らざること、只だ從前認神を認むるが爲なり。無始劫來生死の本、癡人喚んで本來の人と作す。」如今の人只だ箇の昭昭靈靈を認め得て、便ち瞠眼努目して精魂を弄す、什麼の交渉か有らん。只だ他自己清淨法身と認むること莫れと道ふが如き、且く自己法身の如きんば、偏も也た未だ夢にも見ざること有り、更に什麼の認むること莫れとか説かん。教家には清淨法身を以て極則と爲す、什麼と爲てか卻つて人をして認めしめざる。道ふことを見すや、認著すれば依前として還つて不足、咄。好し便ち棒を與ふるに、此の意を會得せば、始めて他の自己清淨法身と認むること莫れと道ふことを會せん。雪寶他の老婆心切なることを嫌ふ、爭奈せん爛泥裏に刺有ることを。豈に見すや、洞山和尚、人を接するに三路有り、所謂玄路、鳥道、展手なり。初機の學道、且く此の三路に向つて行履せしむ。僧問ふ、「師尋常學人をして鳥道を行かしむ。未審し如何なるか是れ鳥道。」洞山云く、「一人に逢はず。」僧云く、「如何が行かん。」

① 以下失せずに至る、證道歌。
 ② 此の句、傳燈二十九、寶誌和尚十二時の頌中に見ゆ、依前は「相變らず」と譯す。
 ③ 洞山玄中の銘に曰く、舉足下足、鳥道に殊なること無し。坐臥經行玄路に非すと云ふこと莫し。

山云く、「直に須らく、足下無私にして去るべし。」僧云く、「只だ鳥道を行くが如きんば、便ち是れ本來の面目なること莫しや否や。」山云く、「闍黎什麼に因つてか顛倒す。」僧云く、「什麼の處か是れ學人顛倒の處。」山云く、「若し顛倒せずんば、什麼と爲てか奴を認めて郎と作す。」僧云く、「如何なるか是れ本來の面目。」山云く、「鳥道を行かざれ」と。須らく是れ見て這般の田地に到つて、方に少分の相應有るべし。直下に打疊して、迹を削り聲を吞ましむるも、猶ほ是れ禪僧門下は、沙彌童行の見解なること在り。更に須らく首を塵勞に回して、大用を繁興して始めて得べし。雲寶の頰に云く、

●足下無私を一に無絲に作る。

【頌】一國の師も亦強ひて名づく。(何ぞ必らずしもせん、空花水月、風過ぎて樹頭揺く。) 南陽獨り許す嘉聲を振ふことを。(果然として要津を坐斷す。千箇萬箇の中、一箇半箇を得難し。) 大唐扶け得たり眞の天子。(可憐生、接得して何の用を作すにか堪へん。瞎僧を接得して、什麼の事をか濟さん。) 曾て毘盧頂上を踏んで行かしま。(一切の人、何ぞ恁麼に去らざる、直に得たり天上天下。上座作麼生か踏まん。) 鐵鎚擊碎す黄金の骨。(平生を暢快す、已に言前に在り。) 天地の間更に何物ぞ。(茫茫たる四海知音少なり。全身擔荷す、沙を撒し土を撒す。) 三千刹海夜沈々。(高く眼を着けよ、封疆を把定す。徧鬼窟裏に入り去らんことを待つや。) 知らず誰か蒼龍窟に入る。(三十棒一棒も也た少なきことを得し、拈了也、還つて會すや、咄。諸人の鼻孔雪竇に穿ち了らる、錯つて自己清淨法身と

認むること莫れ。

【評唱】「一國の師も亦強ひて名づく、南陽獨り許す嘉聲を振ふことを。」此の頌一に箇の眞贊に似て相似たり。道ふことを見すや、至人に名無しと。喚んで國師と作すも、亦是れ強ひて名を安じ了れり。國師の道、比倫す可らず、善能く恁麼に人を接す。獨り許す南陽是れ箇の作家なることを。大唐扶け得たり眞の天子、曾て毘盧頂上を踏んで行かしま。若し是れ具眼の禪僧の眼腦ならば、須らく是れ毘盧頂上に向つて行いて、方に此の十身調御を見るべし。佛之を調御と謂ふ、便ち是れ十號の一數なり。一身十身と化し、十身百身と化す。乃至千百億身も、大綱只だ是れ一身なり。這の一頌卻つて説き易し。後は他の自己清淨法身と認むること莫れと道ふことを頌す。頌し得て水灑げども著かず、直に是れ口を下して説くこと難し。「鐵鎚擊碎す黄金の骨。」此は自己清淨法身と認むること莫れと云ふを頌す。雪竇恁麼だ佗を讚歎して、黄金の骨一鎚に擊碎し了れり。天地の間更に何物ぞ、直に須らく淨裸裸亦灑灑とし、更に一物の得可き無き、乃ち是れ本地の風光なるべし。一に三千刹海夜、沉沉たるに似たり。三千大千世界、香水海の中に、無邊刹有り、一刹に一海有り、正當夜靜かに更深くする時、天地一時に澄澄地なり。且く道へ、是れ什麼ぞ、切に忌む目を閉ぢ眼を合する會を作すことを。若し恁麼に會せば、正に毒海に墮在せん。知らず誰か蒼龍の窟に入る。脚を展べ脚を縮む。且く道へ是れ誰ぞ、諸人の鼻孔一時に雪竇に穿卻し了らる。

●沈々、一に澄々に作る。

第一百則

垂示に云く、因を收め果を結び、始めを盡し終を盡す。對面私無し、元會て説かず。忽ち箇の出で來つて、一夏請益す。什麼としてか會つて説かずと道ふあらば、爾が悟り來らんを待つて、爾に向つて道はん。且く道へ、爲復是れ當面に諱卻するか、爲復別に長處有るか。試みに舉す看よ。

【本則】 舉す、僧、巴陵に問ふ、「如何なるか是れ吹毛の劍。」(斬嶮。陵云く、「珊瑚枝々月を榜著す。」(光萬象を吞む、四海九州。)

【評唱】 巴陵干戈を動せず、四海五湖多少の人、舌頭地に落つ。雲門人を接すること正に此の如し、他は是れ雲門の的子なり。亦各箇の作略を具す。是の故に道ふ、「我れは愛す韶陽新定の機、一生人の與に釘を抽き楔を抜くことを。」這箇の話、正に恁麼地なり。一句の中に於て、自然に三句を具す。函蓋乾坤の句、截斷衆流の句、隨波逐浪の句、答へ得て也た妨げず奇特なり。浮山の遠録公云く、「未透底の人は、句に參せんより意に參せんには如かず、透得底の人は、意に參せんより句に參せんには如かず」と。雲門下に三尊宿有り、吹毛の劍に答へて、俱に了と云ふ。唯だ是れ巴陵の

【本則】

東嶺禪師云く、第一百則、爾が智劍出で來りて無一物、明頭未だ顯れず暗頭明なるの大意を明す。先師曰く、「此の答話の如きは、巴陵に和して喪身失命し了れり。」又曰く、「巴陵の句に非ず、善月の句に非ず、靈雲の句に非ず、畢竟して如何、霜天月落ちて夜將に半ばならんとす、誰と共に澄潭影を照して寒き。」又曰く、「雲裏亦巴陵の毒酒に酔ふか。」

み答へ得て了の字に過ぎたり。此れ乃ち句を得たり。且く道へ、了の字と珊瑚枝々月を榜著すと、是れ同か是れ別か。前來道ふ、「三句辨す可し、一鐵空に遶る」と。這の話を會せんと要せば、須らく是れ情塵意想を絶して、淨盡き、方に他の珊瑚枝々月を榜著すと道ふことを見るべし。若し更に道理を作さば、轉た摸索不着なることを見ん。此の語は是れ禪月友人を懷ふ詩に曰く、「厚きことは、鐵圍山上の鐵に似たり、薄きことは、雙成仙體の、額に似たり。蜀機鳳雛動もすれば塵塵、珊瑚枝々月を榜著す。王凱が家中藏して掘り難く、顏回が飢漢天雪を愁ふ。古檜の筆直うして、雷にも折れず、雪衣の石女、蟠桃の缺。佩びて龍宮に入つて歩遅遅たり、繡簾銀篋何ぞ參差たる、即ち知らず。飄龍珠を失す知るや知らずや。」巴陵句中に於て、一句を取つて吹毛の劍に答ふ、則ち是れ快なり。劍刃上に毛を吹いて之を試むるに、其の毛自ら斷つ。乃ち利劍、之を吹毛と謂ふ。巴陵只だ他の問處に就いて、便ち這の僧の話に答ふ、頭落つるも也た知らず。頰に云く、

【頰】 不平を平げんことを要す。(細なること蚩蚩の如し、大丈夫の漢、須らく是れ恁麼なるべし。)大巧は拙の如し。(聲色を動さず身を藏し影を露す。)或は指或は掌。(看よ、果然として這箇不是。)天に倚つて雪を照す。

①鐵圍山は、法苑珠林、四州の部に詳なり。

②事文類聚集二十三に云く、漢武内傳に、西王母、侍女靈雙成に命じて、雲和の笙を吹かしむ。

③額は額會に、粉を繋ぎ染めて文を爲すしとあり、今のしぼり染めならん。ひも也。

④繡機は蜀江の錦機なり、鳳雛は錦の文なり、塵塵は本集に塵塵と作す、塵塵は、旋旋として行く貌。つまづき倒れんとする也、衣裳重く廣大なれば。

⑤王凱は晉の富人なり。事文類聚集十八に故事を出す。藏して掘り難しは、蓋し隱在、

斬、戲着すれば則ち晴す。大冶も磨礱し下さす、更に煅煉を用て什麼か作ん。干將能く來ること莫し。良工も拂拭して未だ歇まず。人能く行くこと莫し、直饒ひ干將出で來るとも倒退三千。別別。咄、什麼の別處か有らん。讚歎するに分有り。珊瑚枝、枝月を擲著す。三更月落ちて影寒潭を照す。且く道へ、什麼の處にか向つて去る、直に得たり天下太平なることを。醉後郎當として人を愁殺す。

【評唱】「不平を平げんことを要す、大巧は拙の若し。古、俠客有り、路に不平を見て、強の弱を凌ぐを以て、即ち劍を飛して強者の頭を取る。所以に宗師家眉に寶劍を藏し、袖に金鎗を掛けて、以て不平の事を斷す。大巧は拙の若し。巴陵の答處、不平の事を平げんと要す。他の語忒煞だ傷巧なるが爲に、返つて拙と成るに相似たり。何が故ぞ、佗當面に揮ひ來らずして、卻つて僻地裏に去つて、一截して暗に人の頭を取るに、而も人覺えざるが爲なり。或は指或は掌、天に倚つて雪を照す。會得せば則ち天に倚る長劍、凜凜たる神威の如し。古人道く、「心月孤圓にして、光萬象を吞む、光境を照すに非ず、境も亦存するに非ず、光境俱に亡す、復た是れ何物ぞ。此の寶劍、或は現じて指上に在り、忽ち掌

金を藏す故事を用ひしか、事文類聚續集二十五に出づ。
論、痛也篇に、子曰く、賢なるかな同や、一單の食一瓢の飲、陋巷に在り、人は其の憂に堪へず、同や其の樂を改めず、賢なるかな同や。」

① 福本に雷を響と作す。
② 蟠桃は即ち仙桃なり、鉄は古本に球に作る、説文に玉佩なり。響衣の石女は人品の潔白也。

③ 祖庭事苑第四に云く、宋玉が大言の賦に、方地を鑿と爲し、四天を蓋と爲す、弓を響いて扶桑を射る、長劍天外に倚る。

④ 以下、何物ぞに至る、盤山の語、前に見ゆ。

中に現す。昔日慶藏主、説いて這裏に到つて、手を豎てて云く、「還つて見る麼。」也た必らずしも手指の上在らず、雪竇路を借つて經過して、欄をして古人の意を見せしむ。且く道へ、一切處是れ吹毛の劍にあらずんばある可らず。所以に道ふ、「三級浪高うして魚龍と化す、癡人猶ほ辱む夜塘の水。」祖庭事苑に孝子傳を載せて云く、「楚王の夫人、嘗て夏涼に乗じて、鐵柱を抱いて感じて孕む、後一の鐵塊を産す。楚王干將をして鑄て劍を爲らしむ。三年にして乃ち雙劍を成す。一雌一雄、干將密かに雄を留めて、雌を以て楚王に進む。王匣中に秘す、常に悲鳴するを聞く。王、群臣に問ふ、臣曰く、「劍に雌雄有り、鳴く者は雄を懷ふのみ。」王大いに怒つて、即ち干將を收へて之を殺さんとす。干將其の應を知つて、乃ち劍を以て屋柱の中に藏す。因つて妻の莫耶に囑して曰く、「日北戸より出づ、南山其れ松あり、松石に生ず、劍其の中に在り」と。妻後に男を生む、眉間赤と名く。年十五、母に問うて曰く、「父何くにか在る。」母乃ち前事を述べ。久しく思惟して柱を剖いて劍を得たり。日夜父の爲に讎を報いんと欲す。楚王亦募つて其の人を覓めしむ。宣言すらく、「眉間赤を得る者有らば、厚く之を賞せん」と。眉間赤遂に逃る。俄かに客有り、曰く、「子は眉間赤に非ざることを得る邪。」曰く、「然り。」客曰く、「吾れは飯山の人なり、能く子が爲に父の讎を報せしめん。」赤曰く、「父昔辜無きに、枉げて茶毒せらる、君今惠念す、何の須むる所ぞ。」客

⑤ 或人曰く、圓悟、曉庵と時を同じうす、豈に祖庭事苑を引くべけんや、蓋し刊行の誤ならん、泥んや亦蜀本に此の條を載せざるをや。蜀本には、「祖庭事苑」より「俱に欄る」に至る、此れ無し。後人の附會ならんと。

曰く、「當に子の頭并に劍を得べし。」赤乃ち劍并に頭を與ふ、客之を得て楚王に進む。王大いに喜ぶ。客曰く、「願はくは油を煎じて之を烹ん。」王遂に鼎中に投ず。客、王を誂いて曰く、「其の首爛れず。」王臨み視るに方つて、客後に於て劍を以て王の頭に擬すれば、鼎中に墮つ。是に於て二首相嚙む。客、眉間赤が勝たざらんことを恐れて、乃ち自ら刎ねて以て之を助く。三頭相嚙む。尋で亦俱に爛る。(川本、此の楚王の一段無し。)雪竇道く、「此の劍能く天に倚つて雪を照す」と。尋常道ふ、「天に倚る長劍、光能く雪を照す」と。這の些子の用處、直に得たり大冶磨、磨し下さざることを。任ひ是れ良工も拂拭して未だ歇まず、良工は即ち干將是れなり、故事自ら顯はる。雪竇頌し了つて、末後に顯出して道ふ、「別別」と。也た妨げず奇特なり、別に好處有り、尋常の劍と同じからず。且く道へ、如何なるか是れ別處、「珊瑚枝枝月を撐著す。」謂つ可し光前絶後、獨り寰中に據つて、更に等匹無し、畢竟如何。諸人頭落ちぬ、老僧更に一小偈有り。

萬斛舟に盈ちて手に信せて撃く、卻つて一粒に因つて甕蛇を呑む、百轉の舊公案を拈提して、時の人の幾眼沙をか撒卻す。

國譯佛果園悟禪師碧巖錄卷第十終

後序

雲竇の頌古百則、叢林學道の詮要なり。其の間、譬を經論或は儒家文史に取つて、以て此の事を發明す。具眼の宗匠、時に後學の爲に、擊揚剖析するに非ずんば、則ち以て之を知ることを無けん。

園悟老師成都に在せし時、予諸人の與に、其の説を請益す。師後に夾山道林に住す、復た學徒の之を扣くが爲に、凡そ三たび宗綱を提ぐ。語は不同なりと雖も、其の旨は一なり。門人撥うて之を録すること既に二十年、師未だ嘗て過つて焉を問はざるに、四方に流傳して、或は踏駁を致す。諸方且く其の言に因つて、其の道を以て之を尋釋すること能はず。而るを妄りに改作すること有らば、則ち此の書遂に廢せん。學者幸に其の傳を誦かにせよ。

宣和乙巳春暮 上休

翠人 關友無黨記す

- ① 詮は「説文に具なり、具に事理を説くを謂ふ、」要は増韻に「樞要なり。」
- ② 踏は垂なり、駁は亂なり。
- ③ 宣和は宋の徽宗の年號、乙巳は其の第七年なり。
- ④ 上休は、上旬の休日なり、六典に云く、「内外の官吏、則ち暇寧の節有り、」註に「旬毎に一日なり。」
- ⑤ 卒の字二説あり、解の屬を會くとすもの、卒の誤りとなすもの、何れか是なるを知らず、皆類の名なり。
- ⑥ 關は姓なり、風俗通に「關の令喜が後なり。」

重ねて圓悟禪師の碧巖集を刊る疏

雪竇の頌古百則、圓悟重ねて注脚を下す、叢林に單示して、永く宗旨を垂るる。經なり。學人機鋒捷出、大慧密室に勘辨して、實語無きことを知つて、梓を毀つて傳へざるは、權なり。此の書は諸佛の正眼、列祖の大機、兩たび鉗鎚を経て、一も瑕類無し。茲に大慧の長書と駕を並べ、圓悟の必要と同じく兼ね行せんことを欲す。呆日を迷途に掲げ、南鍼を惠海に指す。快然として一觀せば、彼の群愚を開かん。相與に圓成せば、利益無きにあらず。幸甚。

右伏して以れば、十七歳にして便ち雲門睦州を

① 經は道の常なり。
 ② 權は道の變なり。
 ③ 圓悟叢集し、大慧焚毀するを謂ふ。
 ④ 大慧書は、慧然の錄する所なり。
 ⑤ 圓悟必要は、子文の編する所なり。
 ⑥ 會元十九に云く、「大慧十七にして蓬髮毘尼を具す、偶ま古雲門錄を閲して、悦ぶこと舊習の如し。年譜に、便ち雲門、睦州の說話を喜ぶの一節あり。」
 ⑦ 幻住曰く、圓悟、碧巖を述べ、普照序を作る、高宗建炎二年より、方回序を作る、成宗大德四年に至る、擡べて百七十

三年を得たり、今は其の大數を擧ぐるのみ。
 ⑧ 古本に一夾に作る從ふべし。
 ⑨ 書言故事第一に云く、「祖父の所業を承くるを、冥妻の業と謂ふ、記に「冥治の子は、必ず妻を爲ることを學ぶ。冥治の子は、必ず其を爲ることを學ぶ。」
 ⑩ 後庵經に云く、「若し後庵を解する者は、善法尙ほ捨つ、何ぞ況んや不善の法をや、若し川を濟らんと欲せば、先づ應に筏を取るべし、彼岸に至れば已に之を捨て去る。」
 ⑪ 莊子外物篇に云く、「筌は魚に在る所以ん、魚を得て筌を忘る、云云。」言は意に在る所以

悟る。道つ可し是れ口頭の三昧なりと。二百二年碧巖雪竇を見ず、忽ち渠が手下の。一幸に遭ふ。怎んか。弓冶裘を忘じ得ん。兒孫の種草を斷却すること莫れ、人に隨つて脚跟後に去つて轉せば、誰か龍を釣る釣を下し得ん。箇の眼目を具する底有つて來らんには、看て繁驢概と作さず。此の事當に。筏喻の如くなるべし。他時自ら會し。筌忘せば、家家の門戸長安に透る。し今は興す、惟むこと莫れ、山僧口多きことを。ぞ西來の意を知らん。重ねて一代の宗風を興す。十分の。消息有り。同文の印を持して、無盡燈を續がん。謹んで疏す。

今月 日疏

ん、意を得て言を忘る、吾れ安そ夫の忘言の人を得て、之と言はんかな、筌は魚を捕ふる器なり。
 ⑫ 章迨、杜子美に寄する詩に曰く、「相憶ふて南雁無し、何時か報書有らん。杜子美之に辭いて曰く、「南過の雁無しと雖も、北來の魚を看取せよ。」

⑬ 消息は音信なり。
 ⑭ 中庸に云く、「今天下車、軌を同じうし、書、文を同じうし、行、倫を同じうす。」
 ⑮ 維摩經に云く、無盡燈とは、譬へば、一燈の百千燈を燃すが如し、冥き者皆明にして、明終に盡さず。

前者呼び後者應ず、種種の因縁大數に歸す。昔は廢終に是れ老婆心切なり。東土の書を讀ますんば安ん南去の鴈無しと雖も、北來の魚を看取せよ。便ち

圓悟老祖夾山に居せし時、此の書を集成す。

天下後世、佛祖の玄奧有ることを知らしめんことを欲す、豈に小補ならんや。老妙喜深く學者の道に根かすして、知解に溺るゝことを患ふ。是に由つて之を毀る。其の父子の間、矛盾すと謂はば可ならんや。今罽中の張居士、重ねて爲に板行す、果して何の謂ぞや。覽ん者宜しく自ら擇ぶべし。大德壬寅中秋、天童に住する第七世法孫比丘、淨日拜手謹書す。

①老妙喜は、即ち大慧なり、南嶽下十五世圓悟勳の法嗣、會元十九、明高僧傳第五に傳あり。禪の宗果大慧と號す、妙喜庵に居するに因つて、又妙喜と號す。

が牙を以て、子が盾を陥らば如何、其の人應すること能はず。

②今の人言相副はざるを謂つて矛盾と曰ふ、楚人矛と盾とを鬪ぐ者有り、之を譽めて曰く、「吾が盾の堅きこと能く陥ること莫し、又其の矛を譽めて曰く、「吾が矛の利なること、物に於て陥れずと云ふこと無し」と、或る人曰く、「子

③大德は即ち大元成宗の年號、壬寅は其の第六年なり。

④圓悟第七世なり、圓悟、虎丘、應庵、密庵、破庵、無準、東岩。

⑤淨日は、南嶽下二十一世西岩慧の法嗣。増集續傳燈第五に、四明天童東岩淨日禪師とあり。山庵雜錄上の五十二（本書第一卷の山庵雜錄上の三十七頁）に東岩和尚の事あり。

圓悟禪師、雪竇和尚の頌古一百則を評唱す。玄微を剖決し、幽邃を扶剔して、列祖の機用を顯し、後學の心源を開く。況んや妙智虛凝にして、神機默運、品旭輝いて玄扃洞照し、圓蟾升つて幽室朗朗なり、豈に淺識にして能く極に致らんや。後、大慧禪師、學人の入室、下語頗る異なるに因つて之を疑ふ。纔かに勘して邪鋒自ら挫く。再鞠して、欺を納る。自ら降つて曰く、「我れ碧巖集の中より記し來る、實に悟有るに非ず」と。因つて其の後根本を明めず、専ら語言を尙んで以て、口捷を圖らんことを慮る。是に由つて之を火いて以て斯の弊を救ふ。然も此の書を成し、此の書を火く、其の用心は則ち一なり、豈に二有らんや。罽中の張明遠、偶寫本の後冊を獲、又雪堂の刊本及び蜀本を獲て、訛舛を校訂し、此の書を刊成して、萬古に流通す。上根大智の士をして、一覽して頓に本心を開き、直に無疑の地に造らしむ、豈に小補と云はんや。延祐丁希迎佛會の日、徑山住持比丘、希陵拜書して以て後序と爲す。

①鞠は罪人を窮理するなり。
②欺は白狀なり。
③史記に、豈に此の衛夫の譯譯として、利に捷給なるに孰はんや。
④延祐は大元仁宗の年號、丁巳は其の第四年なり。
⑤希陵は南嶽下二十一世仰山欽の法嗣、續燈錄第四に傳あり。又山庵雜錄（本書第一卷の山庵雜錄下六十二頁）に虛谷和尚の事あり、虛谷は字なり。

儒門の 子貢は極めて 東家の聖人に功有り。藉令ひ良馬の鞭影を見て
 奔るも、皆後の顔子に體若たるが如し。吾が 聖師何言の天に遊ぶこと久
 し、靈山會上、四衆海集す。世尊拈華の宗旨、諸人措くこと罔し。獨り迦
 葉尊者のみ、徹しく之が爲に破顔す。吾が教中、一唯の外、口耳俱に喪す
 ると同一にして、頓徹懸悟せり。當時會參、直下に 忠恕の秘鑰を剖擊せ
 すんば、豈に惟だ門人の 惑滋甚だしきのみならんや。千載の下、何を
 以てか一貫の迷雲を祛けんや。異時成都の佛果圖悟老禪、夾山の丈室を笏
 して、雪竇の頌古百則を拈提す。其の大弟子呆上座、學人言句に泥み、從上
 の諸祖に辜負せんことを懼れ、老和尚の舌頭を取つて、一截に併せて烈焰
 に付して、煙して之を拉撮堆に颯ぐ。自ら以るに 巨壑太虛、毫滴を投
 置し、 古德德山、油糍を賣弄する婆前に、此の疏鈔已に埃して冷かにして
 餘り無きが如し。 野火燒けども盡さず、春風吹いて又生す。花碧巖に落
 ちて陽波繡するが如し。過去劫を歴て、死灰復た然ゆ。知らず何許ぞ、許
 多の葛藤。一一罎中の張居士、手から栽うる無影樹子の上より、全體敗露
 す。直に得たり 般若無説、諸天花を雨ふらすことを。 百七八十年、納

① 子貢は孔子の高弟なり。
 ② 家語に、魯人孔子は聖人なることを知らず、乃ち曰く、彼の東家の丘は吾れ之を知れり。
 ③ 論語陽貨篇に、子曰く、予れ言ふこと無からんと欲す、子貢曰く、子若し言はずんば、則ち小子何をか述べん、子曰く、天何をか言ふや、四時行れ、百物成る、天何をか言ふや、聖師は海粟、孔子を指して謂ふ。
 ④ 論語里仁篇に、子曰く、參や、吾が道は一以て之を貫く、曾子曰く、唯、註に參は曾子の名、唯は應ずることの速かにして疑無きなり。
 ⑤ 子出づ、門人問うて曰く、何と謂ふことぞや、曾子曰く、「夫子の道は忠恕なるのみ」、註に、已を盡す之を忠と謂ひ、

僧菴地に横に鼻孔を穿たれて、從前會て嗅がざる底の寶熏、一旦水の如く湧
 き雲の如く蒸す。八萬四千の毛孔に於て、悉く普く悉く偏し。謂つ可し甚
 深希有、難値難遇の事なりと。已にして居士の二子心疾を得たり。或は謂
 ふ「勤竇の經、呆上座板を燬く、居士當に遺燼を拾ふべからず。而るに日月
 光景の故に、是の如きの報を受く」と。居士なる者其の説を疑ひ、以て子に
 質す。子謂へらく、圖悟の門人人人而も呆上座なりとも、碧巖は自ら碧な
 らん、何ぞ説有ることを得ん。呆上座 月を見て指を亡す、遂に乃ち古佛
 を追尤して、毒燎天に亘る。 刹竿を倒卻して、一綫を放さず、彼れ未だ
 嘗て月を識らざる者なり、誰か將に一指に乗じて之を示さん。或者又謂ふ、
 「呆上座此の書を火いて、之を社鬼に盟ふものは深重なり。居士の二子の患
 正に此に 坐す。子謂らく、呆上座灼然として、炬を乗る時に當つて、故紙
 を煉り得て通紅なり、何に縁つてか密室に風を通せん。 老勤巴命門舌根、
 別に自ら壞せざる處有らん。一星 迸り散す明月空山、張居士那裏よりか
 這の消息を得來る。天然一段西蜀の錦機を把つて、舊に依つて舊日の花樣
 を織り作す。意ふに主林神、陰に之が地を爲して、 訶護今に至るか、亦

已を推す之を恕と謂ふ。
 ⑥ 以下、餘り無きが如しに至る、第四則に見ゆ。
 ⑦ 傳燈錄山の章に云く、大中の初め武陵の大守薛廷望、再び德山の精舍を崇んで、古德禪院と號す、相國裴休額を顯す、見に存す。
 ⑧ 白樂天が詩に、「成陽原上の草、一歳一枯榮、野火燒けども盡さず、春風吹いて又生す」。
 ⑨ 以下、花を雨らすに至る、第六則に見えたり。
 ⑩ 大慧書を燬いてより、張氏重刊に距るまでを謂ふ。
 ⑪ 三教老人の序に記す。
 ⑫ 三教老人の序に記す。
 ⑬ 大學指南に云く、罪相連なる有り之を坐と謂ふ。
 ⑭ 老勤は圖悟を謂ふ。巴は蜀の郷談。
 ⑮ 退之が文に、鬼神守護して、不詳を呵禁す。

是れ此の書の世に出づべき因縁時節か。清涼池上に針芥相逢ふ。則ち書寫讀誦し、人の爲に演説するの功すら、應に殊勝の福德を獲べし。何ぞ況んや金石に刻鏤し展轉流布せんをや。居士二子の心疾の根本、本此に在らず、客作の漢、妄に情識を以て卜度す。居士其の目前計拔するに足らざるの禍福に縁つて、亦情識を以て之を卜度せば、是れ相隨つて火坑に赴くなり、豈に冤あらざらんや。冥驗記に、沛國の周氏、三子並に瘡す。一日客有り門に造つて曰く、「君内に宿愆を省す可し」と。忽ち猛憶するに、兒たりし時、燕窠の三子を見て、其の母の出づるを伺ひ、各一の疾瘡を以て之を吞ましむ。斯須にして共に斃る、母還つて悲鳴して去る、常に自ら悔責す。客曰く、「君既に悔責することを知らば、罪今免れん。」三子即ち皆能く言ふ。然らば則ち居士二子の風を病み心を喪す、亦悔恨す可きの事有ること無きことを得んや。般若を談する者、若し人の爲に輕賤せらるれば、是の人先世の罪業、應に惡道に墮すべきに、今世の人に輕賤せらるるを以ての故に、先世の罪業即ち爲に消滅す。居士能く此に於て省有らば縦ひ無始劫來所造の諸業も、當に時に應じて消滅すべし。即ち君が二子の

② 支義第二に、是の乘に乗じて、清涼池に入る。
③ 圓覺小鈔に云く、經に説く、佛、迦葉に問ふ、「兜率天より一芥子を輒し、圓浮提に於て一針鋒を墜て、芥子を以て針鋒に投ぜしむ、此の事難きや易きや、迦葉答へて言く、「甚だ難しと爲す、佛の言く、「正因正緣相值遇することを得ること、更に此れより難し。」
④ 此の緣第九十七則に見えたり。
⑤ 三祖信心銘に、一念萬年。
⑥ 傳燈第七、大梅常禪師の章に、大寂、師の住山するを聞いて、乃ち一僧をして到りて問はしめて云く、「和尚馬師に見えて、箇の什麼を得てか、恒ち此の山に住す、師云く、「馬師我に向つて道ふ、即ち心是佛と、我れ便ち這裏に向つて住す、

心疾、當に周氏が三子の、時に應じて能く言ふが如くなるべし、以て疑はざる可し。世尊住世、四十九年、六百函の文字、徧界を覆藏す。若し果上座の説に従はざ、萬年一念、更に踪跡を留めて作麼せん。向上の禪林、限り無き尊宿、兩句有り、最も端的なり、曰く、「任あれ即ち心即佛、我れは但だ非心非佛。」今よりして後、如來の正法輪を誘る者有らば、君但だ之に應へて曰へ、「任あれ汝果上座底是と説くことを、我れは只だ勤老師底是と説かん」と。若し是の如くならずんば、即ち恐らくは、面門を燎卻して、四百四病一時に發せん。將た居士の二子の心疾を如何見すや古人道く、「子を養ふて方に父母の恩を知る」と。居士佛を學び恩を知る、老に臨んで懺悔せば、他日作家の爐、丈六の金身を跳出せしめん。知らず還つて勤老師眞箇揚眉豎拂を見るや否や。若し還つて一句に薦得せば、向つて道はん、「佛祖誓有り、罪重科せず、殃他家の兒孫に及ぶこと莫くんば好し。」然も是の如くなりと雖も、且得沒交涉。是れ年延祐丁巳、中元の日、海粟老人馮子振題す。

僧云く、「馬師近日佛法別なり、師云く、「作麼生か別なる、僧云く、「近日又道ふ、非心非佛、師云く、「這の老漢人を惑亂す、未だ了日有らず、任あれ非心非佛、我れは只管即心即佛」と、其の體通つて馬祖に舉似す、祖云く、「大衆緣子熱せり。」
① 中元は七月十五日なり。
② 佛法金湯編十六に云く、子振は攸州の人、自ら海粟居士と號す、其の豪俊、陳剛中と略に同じ、剛中之を畏敬す、子振天下の書に於て記せずと云ふ所無し、其の文を爲るに當つて、酒醕に耳熱し、侍史二人に命じて、筆を潤して以て俛つ、子振疾書す、紙の多寡に隨つて頃刻に輒ち盡す。東坡が詩に頭を回して彭城を望めば、大海一粟を浮ぶ。海粟の號、蓋し此に本づく。

佛果園悟禪師碧巖集序

至聖命脈列祖大機換骨靈方願神妙術其惟
雪竇禪師具超宗越格正眼提撥正令不露風規秉烹佛煨祖鉗鎚頌出衲僧向上巴鼻銀山
鐵壁孰敢鑽研蚊咬鐵牛難爲下口不逢大匠焉悉玄微粵有佛果老人住碧巖日學者迷而
請益老人愍以垂慈剔抉淵源剖析底理當陽直指豈立見知百則公案從頭一串穿來一隊
老漢次第摠將按過須知趙壁本無瑕額相如覆誑秦王至道實乎無言宗師垂慈救弊儻如
是見方知徹底老婆其或泥句沈言未免滅佛種族普照幸親師席得聞未聞道友集成簡
編鄙拙敘其本末時建炎戊申暮春晦日參學嗣祖比丘普照謹序

自四十二章經入中國，始知有佛，自達磨至六祖傳衣，始有言句，曰本來無一物，爲南宗，曰時時勤拂拭，爲北宗，於是有禪宗，頌古行世，其徒有禪案法，呵佛罵祖，無所不爲，間有深得吾詩家活法者，然所謂第一義，焉用言句，雪竇圓悟，老婆心切，大慧已一炬丙之矣，嶠中張煒明遠，燃死灰復板行，亦所謂老婆心切者歟，大德四年庚子，四月初八日癸丑，紫陽山，方回萬里序。

碧巖集者，圓悟大師之所述也，其大弟子大慧禪師，乃焚棄其書，世間種種法皆忌執著，釋子所歸敬，莫如佛，猶有時而罵之，蓋有我而無彼，由我而不由彼也，舍己徇物，必至於失己，夫心與道一，道與萬物一，充滿太虛，何適而非道，第常人觀之，能見其所見，而不見其所不見，求之於人，而人語之，如東坡日喻之說，往復推測，愈遠愈失，自吾夫子體道，猶欲無言，而況佛氏爲出世間法，而可文字言語而求之哉，雖然，亦有不可廢者，智者少而愚者多，已學者少而未學者多，大藏經五千餘卷，盡爲未來世設，苟可以忘言，釋迦老子便當閉口，何至如是叨叨，天下之理固有不離尋常之中，而超出於尋常之表，雖若易知，而實未易知者，不求之於人，則終身不可得，古者名世之人，非千人之英，則萬人之傑也，太阿之劍，天下之利劍也，登山則戮虎豹，入水則刺蛟龍，人之知之，盡於是已，然古人有善用之者，乘城而戰，順風而揮之，三軍爲之大敗，流血赭乎千里，是豈可以一己之所能，而盡疑之哉，自吾聞有是書，求之甚至，嶠中張氏始更刻木，來謀於予，遂贊而成之，且爲題其首，大德九年歲乙巳，三月吉日，玉岑休居士，聊城周馳，書於錢唐觀橋寓舍。

或問：碧巖集之成毀孰是乎？曰：皆是也。鱗鱗來東，單傳心印，不立文字，固也。而血脈歸空，諸論果誰爲之哉？古謂不在文字，不離文字者，真知言已使人人於卷簾聞板，豎指觸脚之際，了卻大事。文字何有哉？拈花微笑以來，門竿倒卻之後，才涉言句，非文字無以傳，是又不可廢者也。嘗謂祖教之書，謂之公案者，倡於唐而盛於宋，其來尚矣。二字乃世間法中吏牘語，其用有三：面壁功成，行腳事了，定槃之星，難明野狐之趣，易墮具眼爲之勘辨，一呵一喝，要見實詣，如老吏據獄，讞罪底裏，悉見情狀，不遺一也。其次則嶺南初來西江，未吸亡羊之岐，易泣指海之針，必南悲心爲之接引，一棒一痕，要令證悟，如廷尉執法，平反出人於死二也。又其次則犯稼憂深，繫驢事重，學奕之志，須專染絲之色，易悲大善知識爲之付囑，俾之心死蒲團，一動一參，如官府頒示條令，令人讀律知法，惡念才生，旋即寢滅三也。具方冊作案底，陳機境爲格令，與世間所謂金科玉條，清明對越諸書，初何以異？祖師所以立爲公案，留示叢林者，意或取此，奈何末法以來，求妙心於瘡紙，付正法於口談，點畫鬼神，猶不離簿，傍人門戶，任喚作郎，劍去矣而舟猶剝，兔逸矣而株不移，滿肚葛藤，能問千轉，其於生死大事，初無干涉。鐘鳴漏盡，將焉用之？烏乎羚羊掛角，未可以形迹求，而善學下惠者，豈步亦步，趁亦趁哉？知此則二老之心，皆是矣。圓悟願子念孫之心，多故重拈雪竇頌，大慧救焚拯溺之心，多故立毀碧巖集，釋氏說一大藏經，末後乃謂不曾說一字，豈欺我哉？圓悟之心，釋氏說經之心也。大慧之心，釋氏諱說之心也。禹稷，顏子易地皆然，推之輓之，主於車行而已。爾來二百餘年，鷓中張明遠，復鑿梓以壽其傳，豈祖教回春乎？抑世故有數乎？然是書之行，所關甚重，若見水卽海，認指作月，不特大慧憂之。

而圓悟又將爲之去粘解縛矣。昔人寫照之詩曰：分明紙上張公子，盡力高聲喚不響。欲觀此書，先參此語。大德甲辰四月望三教老人書。

佛果園悟禪師碧巖錄卷第一

師住澧州夾山靈泉禪院評唱雪竇顯和尚頌古語要

第一則

垂示云、隔山見煙早知是火、隔牆見角便知是牛、舉一明三、目機銖兩、是衲僧家尋常茶飯、至於截斷衆流、東涌西沒、逆順縱橫、與奪自在、正當恁麼時、且道、是什麼人行履處、看取雪竇葛藤。

【本則】舉、梁武帝問達磨大師。說道不如何是聖諦第一義。是在靈

磨云、廓然無聖。將謂多少奇特、箭帝曰、對朕者誰。滿面慚惶、強惺惺、磨云、

不識。唯、再來不帝不契。可憐許、却達磨遂渡江至魏。道野狐精、不免一場懺

帝後舉問志公。贊兒思舊債、志公云、陛下還識此人否。和志公、趕出

帝云、不識。却是武帝承當志公云、此是觀音大士、傳佛心印。朝

帝悔、遂遣使去請。果然把不住、志公云、莫道陛下發使去

取。東家人死、西家人動、真闍國人去佗亦不回。志公也好與三十棒、不

【評唱】達磨遙觀此土有大乘根器遂泛海得而來單傳心印開示迷塗不立文字直指人心見性成佛若恁麼見得便有自由分不隨一切語言轉脫體現成便能於後頭與武帝對譚并二祖安心處自然見得無計較情塵一刀截斷洒洒落落何必更分是非辨得辨失雖然恁麼能有幾人武帝嘗披袈裟自講放光般若經感得天花亂墜地變黃金辨道奉佛誥詔天下起寺度僧依教修行人謂之佛心天子達磨初見武帝帝問朕起寺度僧有何功德磨云無功德早是惡水蔞頭澆若透得這箇無功德話許備親見達磨且道起寺度僧爲什麼都無功德此意在什麼處帝與婁約法師傳大士昭明太子持論真俗二諦據教中說真諦以明非有俗諦以明非無真俗不二即是聖諦第一義此是教家極妙窮玄處帝便拈此極則處問達磨如何是聖諦第一義磨云廓然無聖天下衲僧跳不出達磨與他一刀截斷如今人多少錯會卻去弄精魂瞪眼睛云廓然無聖且喜沒交涉五祖先師嘗說只這廓然無聖若人透得歸家穩坐一等是打葛藤不妨與他打破漆桶達磨就中奇特所以道參得一句透千句萬句一時透自然坐得斷把得定古人道粉骨碎身未足酬一句了然超百億達磨劈頭與他一拶多少漏逗了也帝不省卻以人我見故再問對朕者誰達磨慈悲煞又向道不識直得武帝眼目定動不知落處是何言說到這裏有事無事拈來即不堪端和尚有頌云一箭尋常落一鷗更加一箭已相饒直歸少室峰前坐梁主休言更去招復云誰欲招帝不契遂潛出國這老漢只得憐憫渡江至魏時魏孝明帝當位乃北人種族姓拓跋氏後來方名中國達磨至彼亦不出見直過少林面壁九年接得二祖彼方號爲壁觀婆羅門梁武帝後問志公公云陛下還識此

人否帝曰不識且道與達磨道底是同是別似則也似是則不是人多錯會道前來達磨是答他禪後來武帝是對他志公乃相識之識且得沒交涉當時志公恁麼問且道作麼生祇對何不一棒打殺免見揀糊武帝卻供他款道不識志公見機而作便云此是觀音大士傳佛心印帝悔遂遣使去取好不啻噲當時等他道此是觀音大士傳佛心印亦好攢他出國猶較些子人傳志公天監十三年化去達磨普通元年方來自隔七年何故卻道同時相見此必是謬傳據傳中所載如今不論這事只要知他大綱且道達磨是觀音志公是觀音阿那箇是端的底觀音既是觀音爲什麼卻有兩箇何止兩箇成羣作隊時後魏光統律師菩提流支三藏與師論議師斥相指心而偏局之量自不堪任競起害心數加毒藥至第六度化緣已畢傳法得人遂不復救端居而逝葬於熊耳山定林寺後魏宋雲奉使於葱嶺遇師手携隻履而往武帝追憶自撰碑文云嗟夫見之不見逢之不逢遇之不遇今之古之怨之恨之復讀云心有也曠劫而滯凡夫心無也刹那而登妙覺且道達磨即今在什麼處蹉過也不知

【頌】聖諦廓然前通新何當辨的通也對朕者誰再來不直半文還

云不識三四箇因茲暗渡江穿人鼻孔不得却被別人豈免生荆棘脚眼

闔國人追不再來兩重公案用追作麼在什麼處大丈夫志氣何在千古萬古空相憶換手

林相憶道什麼向鬼窟裏作活計清風匝地有何極果然大小師顧視左右云

這裏還有祖師麼。關待香款那。自云有。阿勞。喚來與老僧洗脚。更與三十

轉趕出也未爲分外。作這去就猶較些子。

【評唱】且據雪竇頌此公案，一似善舞太阿劍相似，向虛空中盤礴，自然不犯鋒鏖，若是無這般手段，纔拈著便見傷鋒犯手，若是具眼者，看他一拈一撥，一褒一貶，只用四句措定一則公案，大凡頌古只是繞路說禪，拈古大綱據款結案而已，雪竇與他一撥劈頭便道聖諦廓然，何當辨的雪竇於佗初句下著這一句不妨奇特，且道畢竟作麼生辨的，直饒鐵眼銅睛也摸索不著，到這裏以情識卜度得麼，所以雲門道如擊石火似閃電光，這箇些子不落心機意識情想，等備開口堪作什麼，計較生時，鶴子過新羅，雪竇道備天下衲僧，何當辨的，對朕者誰，著箇還云不識，此是雪竇忒煞老婆，重重爲人處，且道廓然與不識，是一般兩般，若是了底人分上，不言而喻，若是未了底人，決定打作兩橛，諸方尋常皆道，雪竇重拈一偏，殊不知四句頌盡公案了，後爲慈悲之故，頌出事跡，因茲暗渡江，豈免生荆棘，達磨本來茲土，與人解粘去縛，抽釘拔楔，剷除荆棘，因何卻道生荆棘，非止當時諸人，即今腳跟下已深數丈，闔國人追不再來，千古萬古空相憶，可煞不丈夫，且道達磨在什麼處，若見達磨便見雪竇，末後爲人處，雪竇恐怕人逐情見，所以撥轉關捩子，出自己見解云，休相憶，清風匝地有何極，既休相憶，備腳跟下事，又作麼生，雪竇道，即今箇裏，匝地清風，天上天下有何所極，雪竇拈千古萬古之事，拋向面前，非止雪竇當時有何極，備諸人分上，亦有何極，他又怕人執在這裏，再著方便，高聲云，這裏還

有祖師麼，自云有，雪竇到這裏不妨爲人赤心片片，又自云喚來與老僧洗脚，太煞滅人威光，當時也好與本分手脚，且道雪竇意在什麼處，到這裏喚作驢則是，喚作馬則是，喚作祖師則是，如何名遞往往喚作雪竇使祖師去也，且喜沒交涉，且道畢竟作麼生，只許老胡知，不許老胡會。

第二一則

垂示云，乾坤窄，日月星辰一時黑，直饒棒如雨點，喝似雷奔，也未當得向上宗乘中事，設使三世諸佛，只可自知，歷代祖師全提不起，一大藏教詮注不及，明眼衲僧自救不了，到這裏作麼生請益，道箇佛字，拖泥帶水道箇禪字，滿面慚惶，久參上士不待言之，後學初機直須究取。

【本則】舉趙州示衆云。道老漢作什麼。至道無難。非難。唯嫌揀擇。眼前是祖師。纔有語言，是揀擇是明白。兩頭三面，少賣弄，魚行水濁，鳥飛落毛。老僧不在明白裏。

賊身已露，道老漢向什麼處去。是汝還護惜也無。敗也，也有。時有僧問，既不在明白裏，

護惜箇什麼。也好與一撥。州云，我亦不知。倒退三千。僧云，和尚既不知，爲什麼卻道不在明白裏。

州云，問事即得，禮拜了退。頓有道一着，道老賊。

【評唱】趙州和尚尋常舉此話頭，只是唯嫌揀擇，此是三祖信心銘云：至道無難，唯嫌揀擇，但莫憎愛，洞然明白，纔有是非，是揀擇是明白，纔恁麼會，蹉過了也。較釘膠粘，堪作何用。州云：是揀擇是明白，如今參禪問道，不在揀擇中，便坐在明白裏，老僧不在明白裏，汝等還護惜也無。汝諸人既不在明白裏，且道：趙州在什麼處，為什麼卻教人護惜。五祖先師常說道：垂手來似過欄，欄作麼生會，且道：作麼生是垂手處。識取鈎頭意，莫認定盤星。這僧出來，也不妨奇特，捉趙州空處，便去拶他，既不在明白裏，護惜箇什麼。趙州更不行棒行喝，只道：我亦不知，若不是這老漢，被他拶著，往往忘前失後，賴是這老漢，有轉身自在處，所以如此答他。如今禪和子問著也道：我亦不知，不會，爭奈同途不同轍，這僧有奇特處，方始會問，和尚既不知，為什麼卻道不在明白裏，更好一拶，若是別人往往分疏不下，趙州是作家，只向他道：問事即得，禮拜了退，這僧依舊無奈，這老漢何只得飲氣吞聲。此是大手宗師，不與爾論玄論妙，論機論境，一向以本分事接人，所以道：相罵饒，爾接背，相睡饒，爾潑水，殊不知這老漢平生不以棒喝接人，只以平常言語，只是天下人不奈何，蓋為他平生無許多計較，所以橫拈倒用，逆行順行，得大自在。如今人不理會得，只管道：趙州不答話，不為人說，殊不知當面蹉過。

【頌】至道無難。三重公案，滿口言端語端。魚行水濁，七花一有多種。分開好，只
麼了一二無兩般。何堪四五六七天際日上月下。觀面相呈，頭上漫漫，下漫漫，切忌昂頭低頭檻前
山深水寒。一死更不再活，還欄體識盡喜何立。枯木裏，暗眼，枯木龍吟枯木龍吟

銷未乾。唯枯木，再生花，難難。邪法難扶，倒一說，這裏揀擇明白君自看。謂山，

【評唱】雪竇知佗落處，所以如此頌，至道無難，便隨後道：言端語端，舉一隅不以三隅反，雪竇道：一有多種，二無兩般，似三隅反，一偏且道，什麼處是言端語端處，為什麼一卻有多種，二卻無兩般，若不具眼，向什麼處摸索，若透得這兩句，所以古人道：打成一片，依舊見山是山水，是長短是短，天是天地，地有時喚天作地，有時喚地作天，有時喚山不是山，喚水不是水，畢竟怎生得平穩去，風來樹動，浪起船高，春生夏長，秋收冬藏，一種平懷，泯然自盡，則此四句頌頓絕了也。雪竇有餘才，所以分開結裏算來也，只是頭上安頭道，至道無難，言端語端，一有多種，二無兩般，雖無許多事，天際日上時月便下，檻前山深時水便寒，到這裏，言也端語也，端頭頭是道，物物全真，豈不是心境俱忘，打成一片處，雪竇頭上太孤峻，生末後也漏逗不少，若參得透，見得徹，自然如醍醐上味，相似若是情解未忘，便見七花八裂，決定不能會，如此說話，獨體識盡喜何立，枯木龍吟銷未乾，只這便是交加處，這僧恁麼問，趙州恁麼答，州云：至道無難，唯嫌揀擇，纔有語言，是揀擇是明白，老僧不在明白裏，是汝還護惜也無，時有僧便問：既不在明白裏，又護惜箇什麼。州云：我亦不知，僧云：和尚既不知，為什麼卻道不在明白裏。州云：問事即得，禮拜了退，此是古人問道底公案，雪竇拽來一串穿卻，用頌至道無難，唯嫌揀擇，如今人不會古人意，只管咬言嚼句，有甚了期，若是通方作者，始能辨得這般說話，不見僧問香

嚴如何是道嚴云枯木裏龍吟僧云如何是道中人嚴云獨體裏眼睛僧後問石霜如何是枯木裏龍吟霜云猶帶喜在如何是獨體裏眼睛霜云猶帶識在僧又問曹山如何是枯木裏龍吟山云血脈不斷如何是獨體裏眼睛山云乾不盡什麼人得聞山云盡大地未有一箇不聞僧云未審龍吟是何章句山云不知是何章句聞者皆喪復有頌云枯木龍吟真見道獨體無識眼初明喜識盡時消息盡當人那辨濁中清雪竇可謂大有手脚一時與爾交加頌出然雖如是都無兩般雪竇末後有為人處更道難難只這難難也須透過始得何故百丈道一切語言山河大地一一轉歸自己雪竇凡是一拈一撥到末後須歸自己且道什麼處是雪竇為人處揀擇明白君自看既是打葛藤頌了因何卻道君自看好彩教爾自看且道意落在什麼處莫道諸人理會不得設使山僧到這裏也只是理會不得

第三則

垂示云一機一境一言一句且圖有箇入處好肉上剜瘡成窠成窟大用現前不存軌則且圖知有向上事蓋天蓋地又摸索不着怎麼也得不怎麼也得太廉纖生怎麼也不得不怎麼也不得也太孤危生不涉二塗如何即是請試舉看

【本則】舉馬大師不安這漢漏逗不少帶累別人去也院主問和尚近日尊候如何

大師云日面佛月面佛可煞新鮮養子之樣

【評唱】馬大師不安院主問和尚近日尊候如何大師云日面佛月面佛祖師若不以本分事相見如何得此道光輝此箇公案若知落處便獨步丹霄若不知落處往往枯木巖前差路去在若是本分人到這裏須是有驅耕夫之牛奪飢人之食底手脚方見馬大師為人處如今多有人道馬大師接院主且喜沒交涉如今衆中多錯會瞻眼云在這裏左眼是日面右眼是月面有什麼交涉驢年未夢見在只管蹉過古人事只如馬大師如此道意在什麼處有底云點平胃散一盞來有什麼巴鼻到這裏作麼生得平穩去所以道向上一路千聖不傳學者勞形如猿捉影只這日面佛月面佛極是難見雪竇到此亦是難頌卻爲他見得透用盡平生工夫指注他諸人要見雪竇麼看取下文

【頌】日面佛月面佛開口見曉如兩面鏡相照於中無影像五帝三皇是何物太高生莫說他好可貴可賤

二十年來曾苦辛自是爾落草不千山僧事啞子喫苦瓜爲君幾下蒼龍窟何消恁麼莫謂用心好也莫道無奇

屈愁殺人愁人莫向愁人說堪述向何誰說說與愁人愁殺人明眼衲僧莫輕忽更須三子細

【評唱】神宗在位時自謂此頌諷國所以不肯入藏雪竇先拈云日面佛月面佛一拈了卻云五帝三皇是何物且道他意作麼生適來已說了也直下注佗所以道垂釣四海只釣得龍只此一句已了後面雪竇自頌他平生所以用心參尋二十年來曾苦辛爲君幾下蒼龍窟似箇什麼一似人入蒼龍窟裏取珠相似後來打破漆桶將謂多少奇特元來只消得箇五帝三皇是何物且道雪竇語落在什麼處須是自家退步看方始見得他落處豈不見與陽剖侍者答

遠錄公問。婆竭出海乾坤震。觀面相呈事若何。剖云。金翅鳥王當宇宙。箇中誰是出頭人。遠云。忽遇出頭又作麼生。剖云。似鶻捉鳩。君不信。獨體前驗始知真。遠云。恁麼則屈節當得退身三步。剖云。須彌座下烏龜子。莫待重遭點額回。所以三皇五帝亦是何物。人多不見雪竇意。只管道。國若恁麼會。只是情見。此乃禪月題公云。錦衣鮮華手擎鶴。閑行氣貌多輕忽。稼穡艱難總不知。五帝三皇是何物。雪竇道。屈堪述。明眼衲僧莫輕忽。多少人向蒼龍窟裏作活計。直饒是頂門具眼。肘後有符。明眼衲僧照破四天下。到這裏也莫輕忽。須是子細始得。

第四則

垂示云。青天白日。不可更指東割西。時節因緣。亦須應病與藥。且道。放行好把定好。試舉看。

【本則】舉。德山到。馮山。野狐精。挾。復子於法堂上。不妨令人疑。從東過

西。從西過東。可煞有禪。顧視云。無無便出。好與三十棒。可煞氣衝。雪竇着

語云。勘破了也。然點。德山至門首却云。也不得草草。放去收來。頭上。

便具威儀。再入相見。依前作道去就。已。馮山坐次。冷眼看道老漢。

德山提起坐具云。和尚。改頭換面。馮山擬取拂子。須是那漢始得。

德山便喝。拂袖而出。野狐精見解。這一喝也有權也有實。也有。雪竇

照也有用。一等是學。雲擾霧者就中奇特。

着語云。勘破了也。然點。德山背卻法堂。着草鞋便行。風光可愛。公案。

馮山至晚問首座。適來新到在什麼處。東邊落節。西邊。

首座云。當時背卻法堂。着草鞋出去也。這般漢。屬後合。喫多少。馮

山云。此子已後向孤峰頂上。盤結草庵。呵佛罵祖去在。賊過後張。

雪竇着語云。雪上加霜。然點。

【評唱】夾山下三箇點字。諸人還會麼。有時將一莖草作丈六金身用。有時將丈六金身作一莖草用。德山本是講僧。在西蜀講金剛經。因教中道。金剛喻定後得智中。千劫學佛威儀。萬劫學佛細行。然後成佛。他南方魔子。便說即心是佛。遂發憤。擔疏鈔行脚。直往南方。破這魔子輩。看他恁麼發憤。也是箇猛利底漢。初到澧州。路上見一婆子賣油糍。遂放下疏鈔。且買點心喫。婆云。所載者是什麼。德山云。金剛經疏鈔。婆云。我有一問。倘若答得。布施油糍作點心。若答不得。別處買去。德山云。但問婆云。金剛經云。過去心不可得。現在心不可得。未來心不可得。上座欲點那箇心。山無語。婆遂指令去參龍潭。纔跨門便問。久響龍潭。及乎到來。潭又不見。龍又不現。龍潭和尚於屏風後引身云。子親到龍潭。師乃設禮而退。至夜間入室。侍立更深。潭云。何不下去。山遂珍重。揭簾而出。見外面黑。卻回云。門外黑。潭遂點紙燭度與山。山方接潭。便吹滅。山豁然大悟。便禮拜。潭云。子見箇什麼。便禮拜。山云。某甲自今後。更不疑著天下老和尚舌頭。至。

來日潭上堂云。可中有箇漢。牙如劍樹口似血盆。一棒打不回頭。他時異日。向孤峰頂上。立吞道去。在山遂取疏鈔於法堂前。將火炬舉起云。窮諸玄辨。若一毫置於太虛。竭世樞機。似一滴投於巨壑。遂燒之。後聞瀉山盛化。直造瀉山。便作家相見。包亦不解。直上法堂。從東過西。從西過東。顧視云。無無便出。且道。意作麼生。莫是顛麼。人多錯會。用作建立。直是無交涉。看他恁麼。不妨奇特。所以道。出群須是英靈漢。敵勝還他獅子兒。選佛若無如是眼。假饒千載。又奚爲。到這裏。須是通方作者。方始見得。何故。佛法無許多事。那裏著得情見來。是他心機那裏有。如許多阿勞。所以玄沙道。直似秋潭月影。靜夜鐘聲。隨扣擊。以無虧。觸波瀾。而不散。猶是生死岸頭事。到這裏。亦無得失。是非。亦無奇特玄妙。既無奇特玄妙。作麼生會。他從東過西。從西過東。且道。意作麼生。瀉山老漢。也不管他。若不是瀉山。也被他折挫。一上。看他瀉山老作家相見。只管坐觀成敗。若不深辯來風。爭能如此。雪竇著語云。勘破了也。一似鐵檝相似。衆中謂之著語。雖然在兩邊。卻不住。在兩邊。作麼生會。他道。勘破了也。什麼處是勘破處。且道。勘破德山。勘破瀉山。德山遂出到門首。卻要拔本。自云。也不得草草。要與瀉山揪出五臟心。肝法戰一場。再具威儀。卻回相見。瀉山坐次。德山提起坐具云。和尚。瀉山擬取拂子。德山使喝。拂袖而出。可煞奇特。衆中多道。瀉山怕他。有甚交涉。瀉山亦不忙。所以道。智過於禽。獲得禽。智過於獸。獲得獸。智過於人。獲得人。參得這般禪。盡大地森羅萬象。天堂地獄。草芥人畜。一時作一喝來。他亦不管。掀倒禪床。喝散大衆。他亦不顧。如天之高。似地之厚。瀉山若無坐斷。天下人舌頭底。手腳時。驗他。也大難。若不是他。一千五百人善知識。到這裏。也分疎不下。瀉山是運籌帷幄。決勝千里。德山

背卻法堂。着草鞋。便出去。且道。他意作麼生。備道德山是勝。是負。瀉山恁麼。是勝。是負。雪竇著語云。勘破了也。是他下工夫。見透古人。誓訛極則處。方能恁麼。不妨奇特。訥堂云。雪竇著兩箇勘破。作三段判。方顯此公案。似傍人斷。二人相似。後來這老漢。緩緩地。至晚方問。首座。適來新到在什麼處。首座云。當時背卻法堂。着草鞋出去也。瀉山云。此子已後。向孤峯頂上。盤結草庵。呵佛罵祖去在。且道。他意旨如何。瀉山老漢。不是好心。德山後來。呵佛罵祖。打風打雨。依舊不出。他窠窟。被這老漢。見透平生。伎倆。到這裏。喚作瀉山。與他受記得麼。喚作澤廣藏山。理能伏豹得麼。若恁麼。且喜沒交涉。雪竇知此公案。落處。敢與他斷。更道。雪上加霜。又重拈起來。教人見。若見得去。許備與瀉山。德山。雪竇。同參。若也不見。切忌妄生情解。

【頌】一勘破。言猶在。一一勘破。兩重。雪上加霜。曾嶮墮。三段不同。飛騎

將軍入虜庭。驗敗軍之將無勇。再得完全。能幾箇。死中。急走過。人三十。咄。

不放過。理能伏豹。孤峰頂上。草裏坐。果然穿過鼻孔也未爲奇。咄。

【評唱】雪竇頌一百則公案。一則則焚香拈出。所以大行於世。他更會文章。透得公案。盤礴得熟。方可下筆。何故如此。龍蛇易辨。衲子難瞞。雪竇參透這公案。於節角誓訛處。著三句語。撮來頌出。雪上加霜。幾乎嶮墮。只如德山似什麼。一似李廣天性善射。天子封爲飛騎將軍。深入虜

庭被單于生獲，廣時傷病，置廣兩馬間，絡而盛臥，廣遂詐死，脫其傍，有一胡兒騎善馬，廣騰身上馬，推墮胡兒，奪其弓矢，鞭馬南馳，彎弓射退追騎，以故得脫。這漢有這般手段，死中得活，雪竇引在頰中，用比德山再入相見，依舊被他跳得出去，看他古人見到說到行到，用不到，不妨英靈有殺人不眨眼，底手脚方可立地成佛，有立地成佛底人，自然殺人不眨眼，方有自由自在，如今人有底問著，頭上一似，禿僧氣槩，輕輕搵著，便腰做段，股做截，七支八離，渾無些子相續處，所以古人道，相續也大難，看他德山、滂山如此，豈是滅滅掣掣底見解，再得完全，能幾箇急走過德山，喝便出去，一似李廣被捉後設計，一箭射殺一箇番將，得出虜庭，相似雪竇頰到此，大有工夫，德山背卻法堂，著草鞋出去，道得便宜，殊不知這老漢依舊不放他出頭在，雪竇道，不放過滂山，至晚間問首座，適來新到在什麼處，首座云，當時背卻法堂，著草鞋出去也，滂山云，此子他日向孤峰頂上盤結草庵，呵佛罵祖去在，幾會是放過來，不妨奇特，到這裏，雪竇爲什麼道，孤峰頂上草裏坐，又下一喝，且道，落在什麼處，更參三十年。

第五則

垂示云，大凡扶豎宗教，須是英靈底漢，有殺人不眨眼，底手脚，方可立地成佛，所以照用同時，卷舒齊唱，理事不二，權實並行，放過一著，建立第二義門，直下截斷葛藤，後學初機難爲湊泊，昨日恁麼，事不獲已，今日又恁麼，罪過彌天，若是明眼漢，一點謾他不得，其或未然，虎口裏橫身，不免喪身失命，試舉看。

【本則】舉雪峰示衆云。一言引衆首，不爲分外。盡大地撮來如粟米粒大。是什麼手段，山

僧從來不弄鬼眼睛。拋向面前。只恐拋不下。漆桶不會。倚勢欺人，自領出去，莫謾大眾好。打鼓普請看。爲三軍。

【評唱】長慶問雲門，雪峰與麼道，還有出頭不得處麼，門云，有慶云，作麼生，門云，不可總作野狐精見解，雪峰云，匹上不足，匹下有餘，我更與爾打葛藤，拈拄杖云，還見雪峰麼，咄，王令稍嚴，不許攙奪行市，大滂喆云，我更與爾諸人，土上加泥，拈拄杖云，看看雪峰向諸人面前放扇，咄，爲什麼屎臭也不知，雪峰示衆云，盡大地撮來，如粟米粒大，古人接物利生，有奇特處，只是不妨辛勤，三上投子，九到洞山，置漆桶木杓到處作飯頭，也只爲透脫此事，及至洞山作飯頭，一日洞山問雪峰，作什麼，峰云，淘米，山云，淘沙去米，淘米去沙，峰云，沙米一齊去，山云，大眾喫箇什麼，峰便覆盆，山云，子緣在德山，指令見之，纔到便問，從上宗乘中事，學人還有分也無，德山打一棒云，道什麼，因此有省，後在鰲山阻雪，謂巖頭云，我當時在德山棒下，如桶底脫相似，巖頭喝云，爾不見道，從門入者，不是家珍，須是自己智中流出，蓋天蓋地，方有少分相應，雪峰忽然大悟，禮拜云，師兄今日始是鰲山成道，如今人只管道，古人特地做作，教後人依規矩，若恁麼，正是謗他古人，謂之出佛身血，古人不似如今人苟且，豈以一言半句，以當平生，若扶豎宗教，續佛壽命，所以吐一言半句，自然坐斷天下人舌頭，無備著意，路作情解，涉道理處，看他此箇示衆，蓋爲他曾見作家來，所以有作家鉗鎚，凡出一言半句，不是心機意識，思量鬼窟裏作。

活計直是超群拔萃，坐斷古今，不容擬議。他家用處，盡是如此。一日示衆云：南山有一條鱉鼻蛇，汝等諸人切須好看取。時稜道者出衆云：恁麼則今日堂中，大有人喪身失命去在。又云：盡大地是沙門一隻眼。汝等諸人，向什麼處覓？又云：望州亭與汝相見了也。烏石嶺與汝相見了也。僧堂前與汝相見了也。時保福問：鵝湖僧堂前，且置。如何是望州亭？烏石嶺相見處，鵝湖驢步歸方丈。他常舉這般語示衆，只如道盡大地撮來，如粟米粒大。這箇時節，且道以情識卜度得麼？須是打破羅籠，得失是非，一時放下。洒洒落落，自然透得他圈。纔方見他用處。且道雪峰意在什麼處？人多作情解道：心是萬法之主，盡大地一時在我手裏。且喜沒交涉。到這裏，須是箇真實漢，聊聞舉著徹骨髓，見得透，且不落情思。思想若是箇本色行腳衲子，見他恁麼，已是郎當爲人了也。看他雪竇頌云：

【頌】牛頭沒。

閃電相似，

馬頭回。

如擊石火。

曹溪鏡裏絕塵埃。

打破鏡來，與爾相見，須是打破始得。

打鼓看來君不見。

刺破爾眼晴，莫輕易好。

百花春至爲誰開。

法不相離，一攝須藉萬緣。

出頭來。

【評唱】雪竇自然見他古人，只消去他命脈上一箇，與他頌出。牛頭沒，馬頭回，且道說箇什麼，見得透底。如早朝喫粥，齋時喫飯，相似只是尋常。雪竇慈悲，當頭一鏡擊碎，一句截斷，只是不妨孤峻。如擊石火，似閃電光，不露鋒銜，無爾湊泊處。且道向意根下，摸索得麼？此兩句，一時道盡了也。雪竇第三句，卻通一線道，略露些風規。早是落草，第四句，直下更是落草。若向言上生

言，句上生句，意上生意，作解作會，不唯帶累老僧，亦乃辜負雪竇。古人句雖如此，意不如此，終不作道理繫縛人。曹溪鏡裏絕塵埃，多少人道，靜心便是鏡，且喜沒交涉。只管作計較道理，有什麼了期。這箇是本分說話，山僧不敢不依本分。牛頭沒，馬頭回，雪竇分明說了也。自是人不見，所以雪竇如此。郎當頌道：打鼓看來君不見，癡人還見麼？更向爾道：百花春至爲誰開，可謂豁開戶牖，與爾一時八字打開了也。及乎春來，幽谷野澗，乃至無人處，百花競發，爾且道，更爲誰開。

第六則

【本則】舉雲門垂語云：十五日已前不問汝。

半河南，半河北，這

十五日

已後道將一句來。

不免從朝至暮，切忌道着。

自代云：日日是好日。

收，觀跳不出。

誰家無明月清風，還知麼？海神知，貴不知，價。

【評唱】雲門初參睦州，州旋機電轉，直是難湊泊。尋常接人，纔跨門，便搗住云：道道，擬議不來，便推出云：秦時轆轤鑽，雲門凡去見。至第三回，纔敲門，州云：誰門云：文偃，纔開門，便跳入州。拗住云：道道，門擬議，便被推出。門一足在門內，被州急合門，拶折雲門腳，門忍痛作聲，忽然大悟。後來語脈接人，一摸脫出睦州，後於陳操尚書宅，住三年。睦州指往雪峰處去，至彼出衆便問：如何是佛？峰云：莫寐語。雲門便禮拜，一住三年。雪峰一日問：子見處如何？門云：某甲見處，與

從上諸聖不移易一絲毫許靈樹三十年不請首座常云我首座生也又云我首座牧牛也復云我首座行腳也忽一日令撞鐘三門前接首座衆皆訝之雲門果至便請入首座寮解包靈樹人號曰知聖禪師過去未來事皆預知一日廣主劉王將與兵躬入院請師決臧否靈樹已先知怡然坐化廣主怒曰和尚何時得疾侍者對曰師不曾有疾適封一合子令俟王來呈之廣主開合得一帖子云人天眼目堂中首座廣主悟旨遂寢兵請雲門出世住靈樹後來方住雲門師開堂說法有鞠常侍致問靈樹果子熟也未門云什麼年中得信道生復引劉王昔爲賣香客等因緣劉王後謚靈樹爲知聖禪師靈樹生不失通雲門凡三生爲王所以失通一日劉王詔師入內過夏共數人尊宿皆受內人間訊說法唯師一人不言亦無人親近有一直殿使書一偈貼在碧玉殿上云大智修行始是禪禪門宜默不宜喧萬般巧說爭如實輸卻雲門總不言雲門尋常愛說三字禪顧察嘆又說一字禪僧問殺父母佛前懺悔殺佛殺祖向什麼處懺悔門云露又問如何是正法眼藏門云普直是不容擬議到平鋪處又卻罵人若下一句語如鐵碾子相似後出四哲乃洞山初智門寬德山密香林遠皆爲大宗師香林十八年爲侍者凡接他只叫遠侍者遠云喏門云是什麼如此十八年一日方悟門云我今後更不叫汝雲門尋常接人多用睦州手段只是難爲湊泊有抽釘拔楔底錯鈍雲寶道我愛韶陽新定機一生與人抽釘拔楔垂箇門頭示衆云十五日已前不問汝十五日已後道將一句來坐斷千差不通凡聖自代云日日是好日十五日已前這語已坐斷千差十五日已後這語也坐斷千差是他不道明日是十六後人只管隨語生解有什麼交涉他雲門立箇宗風須是有箇爲

人處垂語了卻自代云日日是好日此語通貫古今從前至後一時坐斷山僧如此說話也是隨語生解他殺不如自殺纔作道理墮坑落壑雲門一句中三句俱備蓋是他家宗旨如此垂一句語須要歸宗若不如只是杜撰此事無許多論說而未透者卻要如此若透得便見古人意旨看取雪竇打葛藤

【頌】去卻一。七穿八穴向什麼處去放過一著。拈得七。拈不出卻不放過。上下四維無等匹。何似生。

下是地東南西北與四維有什麼等匹爭奈拄杖在我手裏。徐行踏斷流水聲。莫問脚跟下離爲體究去了也。縱觀寫

出飛禽跡。吳興亦無此消息野狐精。草茸茸。消息在平實處。煙霧霧。未出這窠窟。

空生巖畔花狼藉。在什麼處不唧唧。彈指堪悲舜若多。四方八面盡法界。

道將一句來。莫動着。前言何在此動。動着三十棒。白頰打。

【評唱】雪竇頌古偏能如此當頭以金剛王寶劍揮一下了然後略露些風規雖然如此畢竟無有二解去卻一拈得七人多作算數會道去卻一是十五日已前事雪竇寫頭下兩句言語印破了卻露出教人見去卻一拈得七切忌向言句中作活計何故胡餅有什麼汁人多落在意識中須是向語句未生已前會取始得大用現前自然見得也所以釋迦老子成道後於摩竭提國三七日中思惟如是事諸法寂滅相不可以言宣我事不說法疾入於涅槃到這裏覺箇開口處不得以方便力故爲五比丘說已至三百六十會說一代時教只是方便所以脫珍

御服著弊垢衣，不得已而向第二義門中，淺近之處，誘引諸子，若教他向上全提，盡大地無一箇半箇，且道，作麼生是第一句，到這裏，雪竇露些意，教人見，偏但上不見，有諸佛，下不見，有衆生，外不見，有山河大地，內不見，有見聞覺知，如大死底人，卻活相似，長短好惡，打成一片，一一拈來，更無異見，然後應用不失其宜，方見他道去，卻一拈得七，上下四維無等匹，若於此句透得，直得上下四維無有等匹，森羅萬象，草芥人畜，著著全彰，自己家風，所以道，萬象之中，獨露身，惟人自肯，乃方親，昔年謬向途中覓，今日看來，火裏冰，天上天下，惟我獨尊，人多逐末，不求其本，先得本正，自然風行，草偃，水到渠成，徐行踏斷，流水聲，徐徐行動時，浩浩流水聲，也應踏斷，縱觀寫出飛禽跡，縱目一觀，直饒是飛禽跡，亦如寫出相似，到這裏，鑊湯爐炭，吹散滅劍樹，刀山，喝便摧不爲難事，雪竇到此，慈悲之故，恐人坐在無事界中，復道，草茸茸，煙霧霧，所以蓋覆卻，直得草茸茸，煙霧霧，且道，是什麼人境界，喚作日日是好日，得麼，且喜沒交涉，直得徐行踏斷，流水聲，也不是，縱觀寫出飛禽跡，也不是，草茸茸，也不是，煙霧霧，也不是，直饒總不恁麼，正是空生巖畔，花狼藉，也須是轉過那邊始得，豈不見，須菩提巖中，宴坐，諸天雨花讚嘆，尊者曰，空中雨花讚嘆，復是何人，天曰，我是天帝釋，尊者曰，汝何讚嘆，天曰，我重尊者善說般若，波羅蜜多，尊者曰，我於般若，未嘗說一字，汝云，何讚嘆，天曰，尊者無說我，乃無聞，無說無聞，是真般若，又復動地，雨花，雪竇亦曾有頌云，雨過雲凝曉，半開數峰如畫，碧崔嵬，空生不解巖中坐，惹得天花動地來，天帝既動地，雨花到這裏，更藏去那裏，雪竇又道，我恐逃之逃不得，大方之外，皆充塞，忙忙擾擾，知何窮，八面清風，惹衣裊，直得淨裸裸，赤洒洒，都無纖毫過患，也未爲極。

則且畢竟如何，即是看取下文，云，彈指堪悲，舜若多，梵語舜若多，此云，虛空神，以虛空爲體，無身覺觸，得佛光照，方現得身，倘若得似舜若多神時，雪竇正好彈指悲歎，又云，莫動著，動著時如何，白日青天，開眼瞌睡。

第七則

垂示云，聲前一句，千聖不傳，未曾親親，如隔大千，設使向聲前辨得，截斷天下人舌頭，亦未是性燥漢，所以道，天不能蓋，地不能載，虛空不能容，日月不能照，無佛處，獨稱尊，始較些子，其或未然，於一毫頭上，透得，放大光明，七縱八橫，於法自在，自由，信手拈來，無有不是，且道，得箇什麼，如此奇特，復云，大衆會麼，從前汗馬，無人識，只要重論蓋代功，即今事且致，雪竇公案，又作麼生，看取下文。

【本則】舉僧問法眼。道什麼，猶慧超咨和尚，如何是佛。道什麼，眼法眼云，汝是慧超。依模脫出，顯就身打劫。

【評唱】法眼禪師，有啐啄同時底機，具啐啄同時底用，方能如此答話，所謂超聲越色，得大自在，縱奪臨時，殺活在我，不妨奇特，然而此箇公案，諸方商量者多，作情解會者不少，不知古人凡垂示一言半句，如擊石火，似閃電光，直下撥開一條正路，後人只管去言句上，作解會道，慧超便是佛，所以法眼恁麼答，有者道，大似騎牛覓牛，有者道，問處便是，有什麼交涉，若恁麼會去，不惟辜負自己，亦乃深屈古人，若要見他全機，除非是一棒打不回頭底漢，牙如劍樹，口似

血盆向言外知歸方有少分相應若一一作情解盡大地是滅胡種族底漢只如超禪客於此悟去也是他尋常管帶參究所以一言之下如桶底脫相似只如則監院在法眼會中也不會參請入室一日法眼問云則監院何不來入室則云和尚豈不知某甲於青林處有箇入頭法眼云汝試爲我舉看則云某甲問如何是佛林云丙丁童子來求火法眼云好語恐爾錯會可更說看則云丙丁屬火以火求火如某甲是佛更去覓佛法眼云監院果然錯會了也則不憤便起單渡江去法眼云此人若回可救若不回救不得也則到中路自忖云他是五百人善知識豈可賺我耶遂回再參法眼云爾但問我我爲爾答則便問如何是佛法眼云丙丁童子來求火則於言下大悟如今有者只管瞪眼作解會所謂彼既無瘡勿傷之也這般公案久參者一舉便知落處法眼下謂之箭鋒相挂更不用五位君臣四料簡直論箭鋒相挂是他家風如此一句下便見當陽便透若向句下尋思卒摸索不著法眼出世有五百衆是時佛法大興時詔國師久依疎山自謂得旨乃集疎山平生文字頂相領衆行腳至法眼會下他亦不去入室只令參徒隨衆入室一日法眼陞座有僧問如何是曹源一滴水法眼云是曹源一滴水其僧惘然而退詔在衆聞之忽然大悟後出世承嗣法眼有頌呈云通玄峰頂不是人間心外無法滿目青山法眼印云只這一頌可繼吾宗子後有王侯敬重吾不如汝看他古人恁麼悟去是什麼道理不可只教山僧說須是自己二六時中打辨精神似恁麼與他承當他日向十字街頭垂手爲人也不爲難事所以僧問法眼如何是佛法眼云汝是慧超有甚相辜負處不見雲門道舉不顧即差互擬思量何劫悟雪竇後面頌得不妨顯赫試舉看

【頌】江國春風吹不起。

靈大地那裏得道

鷓鴣啼在深花裏。

鷓鴣何用又

【評唱】雪竇是作家於古人難咬難嚼難透難見節角詭訛處頌出教人見不妨奇特雪竇識得法眼關棧子又知慧超落處更恐後人向法眼言句下錯作解會所以頌出這僧如此問法眼如是答便是江國春風吹不起鷓鴣啼在深花裏此兩句只是一句且道雪竇意在什麼處江西江南多作兩般解會道江國春風吹不起用頌汝是慧超只這箇消息直饒江國春風也吹不起鷓鴣啼在深花裏用頌諸方商量這話浩浩地似鷓鴣啼在深花裏相似有什麼交涉殊不知雪竇這兩句只是一句要得無縫無罅明明向汝道言也端語也端蓋天蓋地他問如何是佛法眼云汝是慧超雪竇道江國春風吹不起鷓鴣啼在深花裏向這裏薦得去可以丹霄獨步爾若作情解三生六十劫雪竇第三第四句忒煞傷慈爲人一時說破超禪師當下大悟處如三級浪高魚化龍癡人猶辱夜塘水禹門三級浪孟津即是龍門禹帝擊爲三級今三月三桃花開時天地所感有魚透得龍門頭上生角昂鬚鬣尾擊雲而去跳不得者點額而回癡人向言下咬嚼似辱夜塘之水求魚相似殊不知魚已化爲龍也端師翁有頌云一文大光錢買得箇油糍喫向肚裏了當下不聞飢此頌極好只是太拙雪竇頌得極巧不傷鋒犯手舊時慶藏主愛問人如何是三級浪高魚化龍我也不必在我且問爾化作龍去即今在什麼處

中豈有慧超事

三級浪高魚化龍。

通這一處真大衆好踏著龍頭

癡人猶辱夜塘水。

扶藤摸壁喚門傍戶納僧

【評唱】雪竇是作家於古人難咬難嚼難透難見節角詭訛處頌出教人見不妨奇特雪竇識得法眼關棧子又知慧超落處更恐後人向法眼言句下錯作解會所以頌出這僧如此問法眼如是答便是江國春風吹不起鷓鴣啼在深花裏此兩句只是一句且道雪竇意在什麼處江西江南多作兩般解會道江國春風吹不起用頌汝是慧超只這箇消息直饒江國春風也吹不起鷓鴣啼在深花裏用頌諸方商量這話浩浩地似鷓鴣啼在深花裏相似有什麼交涉殊不知雪竇這兩句只是一句要得無縫無罅明明向汝道言也端語也端蓋天蓋地他問如何是佛法眼云汝是慧超雪竇道江國春風吹不起鷓鴣啼在深花裏向這裏薦得去可以丹霄獨步爾若作情解三生六十劫雪竇第三第四句忒煞傷慈爲人一時說破超禪師當下大悟處如三級浪高魚化龍癡人猶辱夜塘水禹門三級浪孟津即是龍門禹帝擊爲三級今三月三桃花開時天地所感有魚透得龍門頭上生角昂鬚鬣尾擊雲而去跳不得者點額而回癡人向言下咬嚼似辱夜塘之水求魚相似殊不知魚已化爲龍也端師翁有頌云一文大光錢買得箇油糍喫向肚裏了當下不聞飢此頌極好只是太拙雪竇頌得極巧不傷鋒犯手舊時慶藏主愛問人如何是三級浪高魚化龍我也不必在我且問爾化作龍去即今在什麼處

第八則

垂示云、會則途中受用、如龍得水、似虎靠山、不會則世諦流布、羝羊觸藩、守株待兔、有時一句、如踞地獅子、有時一句、如金剛王寶劍、有時一句、坐斷天下人舌頭、有時一句、隨波逐浪、若也途中受用、遇知音、別機宜、識休咎、相共證明、若也世諦流布、具一隻眼、可以坐斷十方、豈立千假、所以道、大用現前、不存軌則、有時將一莖草作丈六金身、有時將丈六金身作一莖草用、且道、憑箇什麼道理、還委悉麼、試舉看。

【本則】舉翠巖夏末示衆云、一夏以來、爲兄弟說話。開口看翠巖眉毛在麼。只贏得眼睛也落地、和鼻孔也失了、入地獄、如箭射。保福云、作賊人心虛。灼然、賊賊。長慶云、生也。舌頭落地、將錯就錯、果然。雲門云、關。走在什麼處去、天下納個跳不出、敗也。

【評唱】古人有晨參暮請、翠巖至夏末、卻恁麼示衆、然而不妨孤峻、不妨驚天動地、且道、一大藏教、五千四十八卷、不免說心說性、說頓說漸、還有這箇消息麼、一等是恁麼時節、翠巖就中奇特、看他恁麼道、且道、他意落在什麼處、古人垂一鈞、終不虛設、須是有箇道理爲人、人多錯會道、白日青天、說無向當話、無事生事、夏末先自說過、先自點檢、免得別人點檢、他且喜沒交涉、這般見解、謂之滅胡種族、歷代宗師出世、若不垂示於人、都無利益、箇什麼、到這裏見得透、方知古人有驅耕夫之牛、奪飢人之食、手段、如今人問著、便向言句下、咬嚼、眉毛上作活計、

看他屋裏人、自然知他行履處、千變萬化、節角聲訛、著著有出身之路、便能如此、與他酬唱、此語若無奇特、雲門保福、長慶三人、哂哂地、與他酬唱、作什麼、保福云、作賊人心虛、只因此語、惹得適來說許多情解、且道、保福意作麼生、切忌向句下覓他、古人、倘若生情起念、則換爾眼睛、殊不知保福下一轉語、截斷翠巖脚跟、長慶云、生也、人多道、長慶隨翠巖脚跟轉、所以道、生也、且得沒交涉、不知長慶自出他見解、道生也、各有出身處、我且問爾、是什麼處是生處、一似作家面前、金剛王寶劍、直下使用、若能打破常流見解、截斷得失是非、方見長慶與他酬唱處、雲門云、關、不妨奇特、只是難參、雲門大師、多以一字禪示人、雖一字中、須具三句、看他古人臨機酬唱、自然與今時人迥別、此乃下句底樣子、他雖如此道、意決不在那裏、既不在那裏、且道、在什麼處、也須子細自參始得、若是明眼人、有照天照地、照地底、手腳、直下八面玲瓏、雪竇爲他一箇關字、和他三箇穿作一串、頌出。

【頌】翠巖示徒。這老賊、教壞人家男女。千古無對。千箇萬箇、也有一箇半箇、分一節。關字相酬。不信道、不妨奇。特若是恁麼人。方解恁麼道。失錢遭罪。飲氣吞聲、雪裏打。潦倒保福。同行道伴、猶作這。抑揚難得。放行把住、誰是同生同死、莫誇他好、且喜沒交涉。嘮嘮翠巖。這野狐精、合取口好。分明是賊。這着也不妨、捉敗了也。白圭無玷。這辨得麼、天、下人不知、價。誰辨真假。多只是假、山僧從、來無眼、碧眼胡僧。長慶相諳。是精識、精、須是他始得、未得一牛、在。眉毛生也。在什麼處、從頂門上、至、腳跟下、一莖草也無。

【評唱】雪竇若不恁麼慈悲，頌出令人見，爭得名善知識。古人如此，一一皆是事不獲已，蓋為後學著他言句，轉生情解，所以不見古人意旨。如今忽有箇出來，掀倒禪床，喝散大眾，恁他不。得。雖然如此，也須實到這田地，始得。雪竇道：千古無對，他。只道：看翠巖眉毛在麼，有什麼奇特處。使乃千古無對，須知古人吐一言半句出來，不是造次，須是有定乾坤底眼，始得。雪竇著一言半句，如金剛王寶劍，如踞地獅子，如擊石火，似閃電光。若不是頂門具眼，爭能見他古人落處。這箇示衆，直得千古無對。過於德山棒臨濟喝，且道：雪竇爲人意在什麼處。備且作麼生會。他道：千古無對，關字相酬，失錢遭罪。這箇意如何。直饒是具透關底眼，到這裏也須子細始得。且道：是翠巖失錢遭罪，是雪竇失錢遭罪，是雲門失錢遭罪。備若透得，許備具眼，潦倒保福，抑揚難得，抑自己揚古人。且道：保福在什麼處，是抑什麼處，是揚。嘮翠巖，分明是賊。且道：他偷什麼來。雪竇卻道：是賊，切忌隨他語脈轉。却到這裏，須是自有操持。始得。白圭無玷，頌翠巖大似白圭相似，更無些瑕翳，誰辨真假。可謂罕有人辨得。雪竇有大才，所以從頭至尾，一串穿卻。末後卻方道：長慶相詰，眉毛生也。且道：生也在什麼處，急著眼看。

第九則

垂示云：明鏡當臺，妍醜自辨。鏡鐲在手，殺活臨時。漢去胡來，胡來漢去。死中得活，活中得死。且道：到這裏又作麼生。若無透關底眼，轉身處，到這裏灼然不奈何。且道：如何是透關底眼轉身處，試舉看。

【本則】舉僧問趙州：如何是趙州。河北河南，總說不着。關流嘉州云：東門西

門南門北門。開也，相罵，饒接，相唾，饒。有刺，不在河南，正在河北。

【評唱】大凡參禪問道，明究自己，切忌揀擇言句。何故。不見趙州舉道，至道無難，唯嫌揀擇。又不見雲門道，如今禪和子，三箇五箇聚頭，口喃喃地，便道：這箇是上才語句。那箇是就身處打。出語，不知古人方便門中，爲初機後學，未明心地，未見本性，不得已而立箇方便語句。如祖師西來，單傳心印，直指人心，見性成佛。那裏如此葛藤，須是斬斷語言，格外見諦，透脫得去。可謂如龍得水，似虎靠山。久參先德，有見而未透，透而未明，謂之請益。若是見得透請益，却要語句上。周旋無有疑滯，久參請益與賊過梯，其實此事不在言句上。所以雲門道：此事若在言句上，三乘十二分教，豈是無言句。何須達磨西來，汾陽十八問中，此問謂之驗主問，亦謂之探拔問。這僧致箇問頭，也不妨奇特。若不是趙州，也難祇對他。這僧問：如何是趙州。趙州是本分作家，便向道：東門西門南門北門。僧云：某甲不問這箇。趙州云：備問那箇。趙州後人喚作無事禪。賺人不少。何故。他問趙州，州答云：東門西門南門北門。所以只答他趙州。備若恁麼會，三家村裏漢，更是會佛法去。只這便是破滅佛法。如將魚目比況明珠，似則似是，則不是。山僧道：不在河南，正在河北。且道：是有事是無事，也須是子細始得。遠錄云：末後一句，始到牢關。指南之旨不在言詮。十日一風，五日一雨，安邦樂業，鼓腹謳歌。謂之太平時節，謂之無事。不是拍盲便道無事，須是透過關楸子，出得荆棘林，淨螺髻，赤灑灑，依前似平常人。由備有事也得，無事也。

得七縱八橫終不執無定有有般底人道本來無一星事但只遇茶喫茶遇飯喫飯此是大妄語謂之未得謂得未證謂證元來不曾參得透見人說心說性說玄說妙便道只是狂言本來無事可謂一盲引衆盲殊不知祖師未來時那裏喚天作地喚山作水來爲什麼祖師更西來諸方陸堂入室說箇什麼盡是情識計較若是情識計較情盡方見得透若見得透依舊天是天地是地山是山水是水古人道心是根法是塵兩種猶如鏡上痕到這箇田地自然淨裸裸赤灑灑若極則理論也未是安穩處在這裏人多錯會打在無事界裏佛也不禮香也不燒似則也似爭奈脫體不是纔問著却是極則相似纔拶著七花八裂坐在空腹高心處及到蒲月三十日換手搥背已是遲了也這僧恁麼問趙州恁麼答且道作麼生摸索恁麼也不得不恁麼也不得畢竟如何這些子是難處所以雪竇拈出來當面示人趙州一日坐次侍者報云大王來也趙州矍然云大王萬福侍者云未到和尚州云又道來也參到這裏見到這裏不妨奇特南禪師拈云侍者只知報客不知身在帝鄉趙州入草求人_{不覺渾身泥水}這些子實處諸人還知麼看取雪竇頌

〔頌〕句裏呈機劈面來。

莫行水調

爍迦羅眼絕纖埃。

撒沙撒土莫帶果

東西南北門相對。

開也那裏有許多門背

無限輪鎚擊不開。

自是開輪鎚不到開也

〔評唱〕趙州臨機一似金剛王寶劍擬議卽截卻爾頭往往更當面換卻爾眼睛這僧也敢捋虎鬚致箇問頭大似無事生事爭奈句中有機他既呈機來趙州也不辜負他問頭所以亦呈

機答不是他特地如此蓋爲透底人自然合轍一似安排來相似不見有一外道手握雀兒來問世尊云且道某甲手中雀兒是死耶是活耶世尊遂騎門闔云爾道我出耶入耶一本云世尊豎起拳頭云開也合也外道無語遂禮拜此話便似這公案古人自是血脈不斷所以道問在答處答在問處雪竇如此見得透便道句裏呈機劈面來句裏有機如帶兩意又似問人又似問境相似趙州不移易一絲毫便向他道東門西門南門北門爍迦羅眼絕纖埃此頌趙州人境俱奪向句裏呈機與他答此謂之有機有機纔轉便照破他心膽若不如如此難寒他問頭爍迦羅眼者是梵語此云堅固眼亦云金剛眼照見無碍不唯千里明察秋毫亦乃定邪決正辨得失別機宜識休咎雪竇云東西南北門相對無限輪鎚擊不開既是無限輪鎚何故擊不開自是雪竇見處如此爾諸人又作麼生得此門開去請參詳看

第十則

垂示云恁麼恁麼不恁麼不恁麼若論戰也箇箇立在轉處所以道若向上轉去直得釋迦彌勒文殊普賢千聖萬聖天下宗師普皆飲氣吞聲若向下轉去醯雞螻蟻蠢動含靈一一放大大光明一一壁立萬仞儼或不上不下又作麼生商量有條攀條無條攀例試舉看

〔本則〕舉睦州問僧近離甚處。

僧便喝。

州云三喝四喝後

僧又被汝一喝。

州云三喝四喝後

僧無語。

州便打云。

州云三喝四喝後

僧又被汝一喝。

州云三喝四喝後

僧無語。

州便打云。

州云三喝四喝後

僧又被汝一喝。

州云三喝四喝後

這掠虛頭漢

放過一著
落在第二

【評唱】大凡扶豎宗教，須是有本分宗師眼目，有本分宗師作用。睦州機鋒，如閃電相似，愛勸座主，尋常出一言半句，似箇荆棘叢相似，著腳手不得，他纔見僧來，便道：見成公案，放個三十棒。又見僧云：上座，僧回首，州云：擔板漢。又示衆云：未有箇入頭處，須得箇入頭處。既得箇入頭處，不得辜負老僧。睦州爲人多如此，這僧也善雕琢，爭奈龍頭蛇尾。當時若不是睦州，也被他惑亂一場。只如他問：近離什麼處？僧便喝。且道：他意作麼生？這老漢也不忙，緩緩地向他道：老僧被汝一喝，似領他話在一邊，又似驗他相似，斜身看他如何。這僧又喝，似則是則未是，被這老漢穿卻鼻孔來也。遂問云：三喝四喝後，作麼生？這僧果然無語。州便打云：這掠虛頭漢，人端的處，下口便知音，可惜許。這僧無語，惹得睦州道：掠虛頭漢。若是諸人被睦州道：三喝四喝後，作麼生？合作麼生？祇對免得他道：掠虛頭漢。這裏若是識存亡、別休咎、腳踏實地漢，誰管三喝四喝後，作麼生？只爲這僧無語，被這老漢便據款結案，聽取雪竇頌出。

【頌】兩喝與三喝

雷聲浩大雨點全無，自古至今學有人，怎麼會也，有人作這見解。

作者知機變

若不是作家，爭論得，只恐不怎麼。 若謂

騎虎頭

四、驀漢、虎頭如何騎，多少人

一一俱成瞎漢

親自出視口，何止兩箇，白領出去。

誰瞎漢

有未後句，泊

拈來天下與人看

音即不無，眼者即瞎，聞聲若著，眼看，則兩手拈空，怎麼舉且道是第幾機。

誰瞎漢

【評唱】雪竇不妨有爲人處，若不是作者，只是胡喝亂喝，所以古人道：有時一喝不作一喝用。

有時一喝卻作一喝用，有時一喝如踞地獅子，有時一喝如金剛王寶劍，與化道，我見個諸人，東廊下也喝，西廊下也喝，且莫胡喝亂喝，直饒喝得與化，上三十三天，卻撲下來，氣息一點也無，待我甦醒起來，向汝道：未在何故，與化未曾向紫羅帳裏撒真珠，與個諸人在，只管胡喝亂喝，作什麼。臨濟道：我聞汝等總學我喝，我且問個，東堂有僧出，西堂有僧出，兩箇齊下喝，那箇是賓，那箇是主，個若分賓主不得，已後不得學老僧，所以雪竇頌道：作者知機變，這僧雖被睦州收，他卻有識機變處。且道：什麼處？是這僧識機變處。鹿門智禪師點這僧云：識法者懼，昂頭道：若論戰也，箇箇立在轉處。黃龍心和尚道：窮則變，變則通，這箇些子，是祖師坐斷天下人舌頭處。個若識機變，舉著，便知落處。有般漢云：管他道：三喝四喝，作什麼？只管喝將去，說什麼。三十二十喝，喝到彌勒佛下生，謂之騎虎頭。若恁麼知見，不識睦州則故是，要見這僧太遠在，如人騎虎頭，須是手中有刀，兼有轉變，始得。雪竇道：若恁麼二俱成瞎漢，雪竇似倚天長劍，凜凜全威，若會得雪竇意，自然千處萬處一時會，便見他雪竇後面頌，只是下注腳，又道：誰瞎漢。且道：是賓家話，是主家話，莫是賓主一時瞎麼。拈來天下與人看，此是活處。雪竇一時頌了也，爲什麼。卻道：拈來天下與人看，且道：作麼生看，閉眼也著，合眼也著，還有人免得麼。

佛果園悟禪師碧巖錄卷第一終

夾山無礙禪師降魔表

慧芳附刊

臣聞三乘路廣法界無涯智海晏清十方安泰時有魔軍競起侵擾心田六賊既強心王驚動朝生百怪暮起千邪撼惑真如困勞法體苦提道路隔絕不通破壞涅槃傷殘三寶無為珠玉悉被偷將大藏法財皆遭劫奪塵勞驛日欲火亘天飄蕩法城焚燒聖境臣乃見如斯暴亂恐佛法以難存遂與六波羅蜜商量同為剪滅遣性空為密使聽探魔軍見今屯在五蘊山中有八萬四千餘衆既知體勢計在剎那遂點十八界雄兵並立體空為號人人有無礙之力箇箇懷勇健之能直心為見性之功一正去百邪之亂撥堅固甲執三昧鏘智箭禪弓光明慧劍向大乘門中訓練寂滅山內安營三明嶺上開旗八正路邊排布遣大覺性為捉生之將遊歷四方搜求妄想之踪抄截無明之蹟復使慈悲王破三毒之寨忍辱帥伐嗔怒之城精進軍除傲慢之妖喜捨士捉慳貪之賊逡巡而魔軍大起殺氣衝天臣乃部領摩訶一時齊入當爾之時眼不觀色耳不聽聲鼻不嗅香舌不了味身不受觸意不攀緣一志向前念念不退倏忽而魔軍大敗六賊全輸殺戮無邊掃除蕩盡生擒妄想活捉無明領向涅槃場中以慧劍斬為三段煩惱林當時摧折人我山化作微塵癡愛網遭智火焚燒邪見林被慧風吹竭因茲三明再朗四智重圓內外無瑕廓然清淨心王坐惟喜之殿真如登解脫之樓自性遊無碍之堂三身踞法空之座從茲法界寧靜永絕羶塵共渡生死之河齊到菩提之岸魔軍既退合具奏聞

佛果園悟禪師碧巖錄卷第二

第十一則

垂示云佛祖大機全歸掌握人天命脈悉受指呼等開一句一言驚群動衆一機一境打鎖敲枷接向上機提向上事且道什麼人會恁麼來還有知落處麼試舉看

【本則】舉黃檗云衆云打水得盆一口吞盡汝等諸人盡是噎酒糟漢

恁麼行腳道着踏踏草鞋何處有今日用今日作什麼還知大唐國裏無

禪師麼老僧不會一口吞盡時有僧出云只如諸方匡徒領衆又作麼

生也好與一撈檗云不道無禪只是無師直得分下

【評唱】黃檗身長七尺額有圓珠天性會禪師昔遊天台路逢一僧與之談笑如故相識熟視之目光射人頗有異相乃偕行屬溪水暴漲乃植杖捐笠而止其僧率師同渡師曰請渡彼即褰衣蹠波如履平地回顧云渡來渡來師咄云這自了漢吾早知捏怪當斫汝脛其僧歎曰真大乘法器言訖不見初到百丈丈問云巍巍堂堂從什麼處來檗云巍巍堂堂從嶺中來丈云來爲何事檗云不爲別事百丈深器之次日辭百丈丈云什麼處去檗云江西禮拜馬大師去丈云馬大師已遷化去也備道黃檗恁麼問是知來問是不知來問卻云某甲特地來禮拜福

緣淺薄不及一見未審平日有何言句願聞舉示丈遂舉再參馬祖因緣祖見我來便豎起拂子我問云卽此用離此用祖遂掛拂子於禪床角良久祖卻問我汝已後鼓兩片皮如何爲人我取拂子豎起祖云卽此用離此用我將拂子掛禪床角祖振威一喝我當時直得三日耳雙黃葉不覺悚然吐舌丈云子已後莫承嗣馬大師麼葉云不然今日因師舉得見馬大師大機大用若承嗣馬師他日已後喪我兒孫丈云如是如是見與師齊滅師半德智過於師方堪傳授子今見處宛有超師之作諸人且道黃葉恁麼問是知而故問耶是不知而問耶須是親見他家父子行履處始得黃葉一日又問百丈從上宗乘如何指示百丈良久葉云不可教後人斷絕去百丈云將謂汝是箇人遂乃起入方丈葉與裴相國爲方外友裴鎮宛陵請師至郡以所解一編示師師接置於座略不披閱良久乃云台麼裴云不會葉云若便恁麼會得猶較些子若也形於紙墨何處更有吾宗裴乃以頌贊云自從大士傳心印額有圓珠七尺身掛錫十年棲蜀水浮盃今日渡漳濱八千龍象隨高步萬里香花結勝因擬欲事師爲弟子不知將法付何人師亦無喜色云心如大海無邊際口吐紅蓮養病身自有一雙無事手不曾祇揖等閑人葉住後機鋒峭峻臨濟在會下睦州爲首座問云上座在此多時何不去問話濟云教某甲問什麼話卽得座云何不去問如何是佛法的大意濟便去問三度被打出濟辭座曰蒙首座令三番去問被打出恐因緣不在這裏暫且下山座云子若去須辭和尚去方可首座預去白葉云問話上座甚不可得和尚何不穿鑿教成一株樹去與後人爲陰涼葉云吾已知濟來辭葉云汝不得向別處去直向高安灘頭見大愚去濟到大愚遂舉前話不知某甲過在什麼

處愚云葉與麼老婆心切爲個微困更說什麼有過無過濟忽然大悟云黃葉佛法無多子大愚拗住云個適來又道有過而今卻道佛法無多子濟於大愚脇下墜三拳愚拓開云汝師黃葉非干我事一日葉示衆云牛頭融大師橫說豎說猶未知向上關楨子在是時石頭馬祖下禪和子浩浩地說禪說道他何故卻與麼道所以示衆云汝等諸人盡是噀酒糟漢恁麼行腳取笑於人但見八百一十人處便去不可只圖熱鬧也可中總似汝如此容易何處更有今日事也唐時愛罵人作噀酒糟漢人多喚作黃葉罵人具眼者自見佗落處大意垂一鈎釣人問衆中有一惜身命底禪和便解恁麼出衆問佗道只如諸方匡徒領衆又作麼生也好一撈這老漢果然分疎不下便卻漏逗云不道無禪只是無師且道意在什麼處佗從上宗旨有時擒有時縱有時殺有時活有時放有時收敢問諸人作麼生是禪中師山僧恁麼道已是和頭沒卻了也諸人鼻孔在什麼處良久云穿卻了也

【頌】凜凜孤風不自誇。

自不知有也

端居寰海定龍蛇。

也要別編裏也

大中天子曾輕觸。

說什麼大中天子在大也須

三度親遭弄爪牙。

死蝦蟆

什麼未爲奇特猶是小機巧若是大機大用現前盡十方世界乃至山河大地盡在黃葉處乞命

【評唱】雪竇此一頌一似黃葉真贊相似人卻不得作真贊會他底句下便有出身處分明道凜凜孤風不自誇黃葉恁麼示衆且不是爭人負我自逞自誇若會這箇消息一任七縱八橫有時孤峯頂獨立有時鬧市裏橫身豈可辭守一隅愈捨愈不歇愈尋愈不見愈擔荷愈沒溺

古人道無翼飛天下有名傳世間盡情捨卻佛法道理玄妙奇特一時放下卻較些子自然觸處現成雪竇道端居寰海定龍蛇是龍是蛇入門來便驗取謂之定龍蛇眼擒虎兇機雪竇又道定龍蛇兮眼何正擒虎兇兮機不全又道大中天子曾輕觸三度親遭弄爪牙黃檗豈是如今惡腳手從來如此大中天子者續咸通傳中載唐憲宗有二子一曰穆宗一曰宣宗宣宗乃大中也年十三少而敏黠常愛跏趺坐穆宗在位時因早朝罷大中乃戲登龍床作揖群臣勢大臣見而謂之心風乃奏穆宗穆宗見而撫歎曰我弟乃吾宗英胄也穆宗於長慶四年晏駕有三子曰敬宗文宗武宗敬宗繼父位二年內臣謀易之文宗繼位一十四年武宗即位常喚大中作癡奴一日武宗恨大中昔日戲登父位遂打殺致後苑中以不潔灌而復甦遂潛遁在香嚴閣和尚會下後剃度為沙彌未受具戒後與志閑遊方到廬山因志閑題瀑布詩云穿雲透石不辭勞地遠方知出處高閑吟此兩句佇思久之欲釣他語脈看如何大中續云溪澗豈能留得住終歸大海作波濤閑方知不是尋常人乃默而識之後到鹽官會中請大中作書記黃檗在彼作首座檗一日禮佛次大中見而問曰不著佛求不著法求不著衆求禮拜當何所求檗云不著佛求不著法求不著衆求常禮如是大中云用禮何為檗便掌大中云大龜生檗云這裏什麼所在說處說細檗又掌大中後繼國位賜黃檗為龜行沙門裴相國在朝後奏賜斷際禪師雪竇知他血脈出處使用得巧如今還有弄爪牙底麼便打

第十一則

垂示云殺人刀活人劍乃上古之風規亦今時之樞若要論殺也不傷一毫若論活也喪身失命所以道向上一路千聖不傳學者勞形如猿捉影且道既是不傳為什麼卻有許多葛藤公案具眼者試說看

【本則】舉僧問洞山如何是佛。謂衆聖天下稱頌不出。山云麻三斤。灼然破草鞋指風樹罵柳樹為秤錘。

【評唱】這箇公案多少人錯會直是難咬嚼無個下口處何故淡而無味古人有多少答佛話或云殿裏底或云三十二相或云杖林山下竹筋鞭及至洞山卻道麻三斤不妨截斷古人舌頭人多作話會道洞山是時在庫下秤麻有僧問所以如此答有底道洞山問東答西有底道爾是佛更去問佛所以洞山遠路答之死漢更有一般道只這麻三斤便是佛且得沒交涉爾若恁麼去洞山句下尋討參到彌勒佛下生也未夢見在何故言語只是載道之器殊不知古人意只管去句中求有什麼巴鼻不見古人道道本無言因言顯道見道即忘言若到這裏還我第一機來始得只這麻三斤一似長安大路一條相似舉足下足無有不是這箇話與雲門糊餅話是一般不妨難會五祖先師頌云賤賣擔板漢貼秤麻三斤千百年滯貨無處著渾身爾但打疊得情塵意想計較得失是非一時淨盡自然會去

【頌】金烏急。左眼半斤快鷄翅不及火焗真機身。玉兔速。右眼八兩短翅宮裏作窠窩。善應何曾有輕觸。

展事投機見洞山。謂定盤星自是閑雲怎麼見。跛鰲盲龜入空谷。自領出去同坑無異。

花簇簇錦簇簇。兩重公案一狀。南地竹兮北地木。三重也有四重。

因思長慶陸大夫。嗚兒奉伴山僧也。怎麼雪寶也怎麼。解道合笑不合哭。呵呵。若天夜。半更添寒苦。咳。

地是什。麼便打。

【評唱】雪寶見得透，所以劈頭便道。金烏急玉兔，速與洞山答麻三斤，更無兩般。日出月沒，日如是人多情解，只管道金烏是左眼，玉兔是右眼，纔問著，便瞪眼云：在這裏，有什麼交涉？若恁麼會，遠磨一宗掃地而盡，所以道：垂鈎四海，只釣神龍。格外玄機，爲尋知己。雪寶是出陰界底人，豈作這般見解？雪寶輕輕去敲關擊節處，略露些子，教備見，便下箇注腳道：善應何曾有輕觸？洞山不輕酬這僧，如鐘在扣，如谷受響，大小隨應，不敢輕觸。雪寶一時突出心肝，五臟呈似備諸人了也。雪寶有靜而善應，頌云：觀面相呈，不在多端。龍蛇易辨，衲子難瞞。金鎚影動，寶劍光寒。直下來也，急著眼看。洞山初參雲門，門問：近離甚處？山云：渣渡。門云：夏在甚麼處？山云：湖南報慈門云：幾時離彼中？山云：八月二十五。門云：放個三頓棒，參堂去。師晚間入室，親近問云：某甲過在什麼處？門云：飯袋子。江西湖南，便恁麼去。洞山於言下，豁然大悟。遂云：某甲他日向無人煙處，草箇庵子，不蓄一粒米，不種一莖菜，常接待往來十方大善知識，盡與伊抽卻釘，拔卻楔，拈卻膩脂帽子，脫卻鴉臭布衫，各令灑灑落落，落地作箇無事人。去。門云：身如椰子大，開得許大口。洞山便辭去。他當時悟處，直下穎脫，豈同小見。後來出世應機，麻三斤語，諸方只作答佛話會，如何是佛？杖林山下竹筋鞭，丙丁童子來求火。只管於佛上作道理。雪寶云：若恁麼作展事與投機會，正似披籠盲龜入空谷，何年日月尋得出路去。花簇簇錦簇簇，此是僧問智

門和尚。洞山道：麻三斤意旨如何？智門云：花簇簇錦簇簇，會麼？僧云：不會。智門云：南地竹兮北地木，僧回舉似洞山。山云：我不爲汝說，我爲大衆說。遂上堂云：言無展事，語不投機。承言者喪，滯句者迷。雪寶破人情見，故意引作一串頌出。後人卻轉生情見，道：麻是孝服，竹是孝杖，所以道：南地竹兮北地木，花簇簇錦簇簇，是棺材頭邊畫底花草，還識羞麼？殊不知：南地竹兮北地木，與麻三斤，只是阿爺與阿爹相似。古人答一轉語，決是意不恁麼。正似雪寶道：金烏急玉兔，速自是一般寬曠，只是金鎗難辨，魚魯參差。雪寶老婆心切，要破備疑情，更引箇死漢。因思長慶陸大夫，解道合笑不合哭。若論他頌，只頭上三句，一時頌了。我且問爾：都盧只是箇麻三斤，雪寶卻有許多葛藤，只是慈悲忒煞。所以如此。陸亘大夫，作宣州觀察使，參南泉，泉遷化，亘聞喪入寺下祭，卻呵呵大笑。院主云：先師與大夫，有師資之義，何不哭？大夫云：道得即哭。院主無語，亘大哭云：蒼天蒼天，先師去世遠矣。後來長慶問云：大夫合笑不合哭？雪寶借此意大綱道：備若作這般情解，正好笑莫哭，是即是。末後有一箇字，不妨警訛。更道：咳。雪寶還洗得脫麼。

第十三則

垂示云：雲凝大野，徧界不藏。雪覆蘆花，難分朕迹。冷處冷如冰雪，細處細如米末。深深處佛眼難窺，密密處魔外莫測。舉一明三，卽且止。坐斷天下人舌頭，作麼生道。且道：是什麼人分上事，試舉看。

【本則】舉僧問巴陵，如何是提婆宗。白馬入蘆花。道什麼話。巴陵云：銀碗裏盛

雪。寒新爾。七花八裂。

【評唱】這箇公案，人多錯會道，此是外道宗，有什麼交涉，第十五祖提婆尊者，亦是外道中一數，因見第十四祖龍樹尊者，以針投鉢，龍樹深器之，傳佛心宗，繼為第十五祖，楞伽經云，佛語心為宗，無門為法門，馬祖云，凡有言句，是提婆宗，只以此箇為主，諸人盡是禿僧，門下客，還曾體究得，提婆宗麼，若體究得，西天九十六種外道，被汝一時降伏，若體究不得，未免著返披袈裟去在，且道是作麼生，若道言句是，也沒交涉，若道言句不是，也沒交涉，且道馬大師意在什麼處，後來雲門道，馬大師好言語，只是無人問，有僧便問，如何是提婆宗，門云，九十六種，汝是最下一種，昔有僧辭大隋，隋云，什麼處去，僧云，禮拜普賢去，大隋堅起拂子云，文殊普賢盡在這裏，僧畫一圓相，以手托呈師，又拋向背後，隋云，侍者將一貼茶來，與這僧去，雲門別云，西天斬頭截臂，這裏自領出去，又云，赤旛在我手裏，西天論議勝者，手執赤旛，負墮者，返披袈裟，從偏門出入，西天欲論議，須得奉王勅，於大寺中，聲鐘擊鼓，然後論議，於是外道於僧寺中，封禁鐘鼓，為之沙汰，時迦那提婆尊者，知佛法有難，遂運神通，登樓撞鐘，欲擯外道，外道遂問樓上聲鐘者，誰，提婆云，天，外道云，天是誰，婆云，我，外道云，我是誰，婆云，我是爾，外道云，爾是誰，婆云，爾是狗，外道云，狗是誰，婆云，狗是爾，如是七返，外道自知負墮，伏義，遂自開門，提婆於是從樓上持赤旛下來，外道云，汝何不後，婆云，汝何不前，外道云，汝是賤人，婆云，汝是良人，如是展轉酬問，提婆折以無礙之辯，由是歸伏，時提婆尊者，手持赤旛，義墮者，旛下立，外道皆斬首謝過，時提婆止之，但化令削髮入道，於是提婆宗大興，雪竇後用此事，而頌之，巴陵衆中謂之鑿多。

口常縫坐具行腳，深得他雲門脚跟下大事，所以奇特，後出世法嗣雲門，先住岳州巴陵，更不作法嗣書，只將三轉語上雲門，如何是道，明眼人落井，如何是吹毛劍，珊瑚枝枝撐著月，如何是提婆宗，銀碗裏盛雪，雲門云，他日老僧忌辰，只舉此三轉語，報恩足矣，自後果不作忌辰齋，依雲門之囑，只舉此三轉語，然諸方答此話多，就事上答，唯有巴陵恁麼道，極是孤峻，不妨難會，亦不露些子鋒鏑，八面受敵，著著有出身之路，有陷虎之機，脫人情見，若論一色邊事，到這裏須是自家透脫了，卻須是遇人始得，所以道，道吾舞笏同人會，石鞮彎弓作者語，此理若無師印授，擬將何法語玄談，雪竇隨後拈提為人，所以頌出。

【頌】老新開。千兵易得一將。端的別。是什麼端的。頂門。解道銀碗裏盛雪。

九十六箇應自知。兼身在內。開眼還。不知卻問天邊月。

提婆宗提婆宗。道什麼山僧在。赤旛之下起清風。百雜碎。打

也。爾且去斬頭哉。臂來與爾道二句。

【評唱】老新開，新開乃院名也，端的別，雪竇讚歎有分，且道，什麼處是別處，一切語言皆是佛法，山僧如此說話，成什麼道理去，雪竇微露些子意道，只是端的別，後面打開云，解道銀碗裏盛雪，更與爾下箇注腳，九十六箇應自知，負墮始得，爾若不知，問取天邊月，古人曾答此話云，問取天邊月，雪竇頌了，末後須有活路，有獅子返擲之句，更提起與爾道，提婆宗提婆宗，赤旛

之下起清風，巴陵道，銀梳裏盛雪，爲什麼雪寶卻道，赤旛之下起清風，還知雪寶殺人不用刀麼。

第十四則

【本則】舉僧問雲門，如何是一代時教。直至如今不了座雲門云，對一

說。無孔鐵鎚，七花八裂，老鼠咬生薑。

【評唱】禪家流，欲知佛性義，當觀時節因緣，謂之教外別傳，單傳心印，直指人心，見性成佛，釋迦老子，四十九年住世，三百六十會，開談頓漸權實，謂之一代時教，這僧拈來問云，如何是一代時教，雲門何不與他紛紛解說，卻向他道，箇對一說，雲門尋常一句中，須具三句，謂之函蓋乾坤，句隨波逐浪，句截斷衆流，句放去收來，自然奇特，如斬釘截鐵，教人義解，卜度他底，不得一大藏教，只消三箇字，四方八面，無備穿鑿處，人多錯會，卻道對一時機宜之事故說，又道，森羅及萬象，皆是一法之所印，謂之對一說，更有道，只是說那箇一法，有什麼交涉，非唯不會，更入地獄，如箭，殊不知，古人意不如此，所以道，粉骨碎身未足酬，一句了然超百億，不妨奇特，如何是一代時教，只消道，箇對一說，若當頭薦得，便可歸家穩坐，若薦不得，且伏聽處分。

【頌】對一說。活潑潑，言猶在耳，不妨孤峻。太孤絕。傍觀有分，何止壁立千仞，豈有怎麼事。無孔鐵鎚重下楔。

昨夜驢。四州八縣，不曾見箇漢，同道者方知，能有幾人知。

龍拗角折。非止龍拗折，有誰見來，還有證明麼。別別。讚歎有分，須是雪寶始得，有什麼別處。韶陽老人得一概。

在什麼處，更有一概，分付阿誰，德山臨濟也須退倒三千，那一概又作麼生，便打。

【評唱】對一說，太孤絕，雪寶讚之不及，此語獨脫孤危，光前絕後，如萬丈懸崖，相似，亦如百萬軍陣，無備入處，只是忒煞孤危，古人道，欲得親切，莫將問來問，問在答處，答在問端，直是孤峻，且道，什麼處是孤峻處，天下人奈何不得，這僧也是箇作家，所以如此問，雲門又恁麼答，大似無孔鐵鎚，重下楔，相似，雪寶使文言用得甚巧，箇浮樹下笑呵呵，起世經中說，須彌南畔吠琉璃樹，映閻浮洲，中皆青色，此洲乃大樹爲名，名箇浮提，其樹縱廣七千由旬，下有箇浮壇，金聚高二十由旬，以金從樹下出生，故號箇浮樹，所以雪寶自說，他在箇浮樹下笑呵呵，且道，他笑箇什麼，笑昨夜驢，龍拗角折，只得瞻之仰之，讚嘆雲門有分，雲門道，對一說，似箇什麼，如拗折驢龍一角相似，到這裏，若無恁麼事，焉能恁麼說話，雪寶一時頌了，末後却道，別別，韶陽老人得一概，何不道全得，如何只得一概，且道，那一概，在什麼處，直得穿過第二人。

第十五則

垂示云，殺人刀，活人劍，乃上古之風規，是今時之樞要，且道，如今那箇是殺人刀，活人劍，試舉看。

【本則】舉僧問雲門，不是目前機，亦非目前事，時如何。薛跳作什麼，箇退三千里。

門云倒一說

平田款出人口也不得放過荒草裏橫身。

【評唱】這僧不妨是箇作家，解恁麼問頭邊，謂之請益，此是呈解問，亦謂之藏鋒問，若不是雲門，也不奈他。何雲門有這般手脚，他既將問來，不得已而應之，何故？作家宗師，如明鏡臨臺，胡來胡現，漢來漢現。古人道：欲得親切，莫將問來問，何故？問在答處，答在問處。從上諸聖，何曾有一法與人，那裏有禪道與爾來。爾若不造地獄業，自然不招地獄果。爾若不造天堂因，自然不受天堂果。一切業緣，皆是自作自受。古人分明向爾道：若論此事，不在言句上。若在言句上，三乘十二分教，豈是無言句？更何用祖師西來前頭道對一說？這裏却道倒一說，只爭一字，爲什麼？卻有千差萬別，且道：警訛在什麼處？所以道：法隨法行，法幢隨處建立，不是目前機，亦非目前事。時如何？只消當頭一點。若是具眼漢，一點也謬，他不得問處，既警訛，答處須得恁麼。其實雲門騎賊馬趕賊，有者錯會道，本是主家話，卻是賓家道，所以雲門云：倒一說，有什麼死急？這僧問得好，不是目前機，亦非目前事。時如何？雲門何不答他別語言，卻只向他道：倒一說，雲門一時打破他底，到這裏道：倒一說，也是好肉上剜瘡，何故？言迹之興，白雲萬里，異途之所由生也。設使一時無言無句，露柱燈籠，何曾有言句？還會麼？若不會到這裏，也須是轉動始知落處。

【頌】倒一說。放不下，七花八裂，須彌。分一節。在關邊，在我邊，半河。同死同生爲君訣。泥裏洗，土塊，着甚。八萬四千非鳳毛。羽毛相似，太熱，滅人。三十三人入虎穴。唯我能知，一將離。別別。有什麼別處，少。擾擾忽忽水裏月。青天白日，迷頭眼。

【評唱】雪竇亦不妨作家，於一句下，便道分一節，分明放過一著，與他把手共行，他從來有放行手段，敢與爾入泥入水，同死同生，所以雪竇恁麼頌，其實無他，只要與爾解粘去縛，抽釘拔楔。如今卻因言句，轉生情解，只如巖頭道：雪峰雖與我同條生，不與我同條死。若非全機透脫，得大自在底人，焉能與爾同死同生？何故？爲他無許多得失是非，滲漏處，故洞山云：若要辨認向上之人，真偽者，有三種滲漏。情滲漏，見滲漏，語滲漏。見滲漏，機不離位，墮在毒海，情滲漏，智常向背，見處偏枯，語滲漏，體妙失宗，機昧終始。此三滲漏，宜已知之。又有三玄，體中玄，句中玄，玄中玄。古人到這境界，全機大用，遇生與爾同生，遇死與爾同死，向虎口裏橫身，放得手腳千里萬里，隨爾銜去，何故？還他得這一著子，始得。八萬四千非鳳毛者，靈山八萬四千聖衆，非鳳毛也。南史云：宋時謝超宗，陳郡陽夏人，謝鳳之子，博學文才，傑俊，朝中無比。當世爲之獨步，善爲文，爲王府常侍，王母殷淑儀薨，超宗作誄奏之，武帝見其文，大加嘆賞，曰：超宗殊有鳳毛。古詩云：朝罷香煙滿袖，詩成珠玉在揮毫。欲知世掌絲綸美，池上如今有鳳毛。昔日靈山會上，四衆雲集，世尊拈花，唯迦葉獨破顏微笑，餘者不知是何宗旨。雪竇所以道：八萬四千非鳳毛，三十三人入虎穴。阿難問迦葉云：世尊傳金襴袈裟外，別傳何法？迦葉召阿難，阿難應諾，迦葉云：倒卻門前刹竿著。阿難遂悟，已後祖祖相傳，西天此土，三十三人，有入虎穴底手脚，古人道：不入虎穴，爭得虎子。雲門是這般人，善能同死同生，宗師爲人，須至如此。據曲木牀上坐，捨得教爾打破，容爾捋虎鬚，也須是到這般田地，始得。具七事隨身，可以同生同死，高者抑之，下者舉之，不足者與之，在孤峰者，教令入荒草，落荒草者，教令處孤峰。爾若入鑊湯爐炭，我也入

饒湯爐炭，其實無他，只要與懶解粘去縛，抽釘拔楔，脫卻籠頭，卸卻角馱，平田和尚，有一頓最好，靈光不昧，萬古微猷，入此門來，莫存知解，別別擾擾，忽忽水裏月，不妨有出身之路，亦有活人之機，雪竇拈了教人，自去明悟生機，莫隨他語句，懶若隨他，正是擾擾忽忽水裏月，如今作麼生得平穩去，放過一著。

第十六則

垂示云：道無橫徑，立者孤危，法非見聞，言思迥絕。若能透過荆棘林，解開佛祖縛，得箇穩密田地，諸天捧花無路，外道潛窺無門，終日行而未嘗行，終日說而未嘗說，便可以自由自在，展啐啄之機，用殺活之劍，直饒恁麼更須知，有建化門中，一手擡一手搦，猶較些子，若是本分事上，且得沒交涉，作麼生是本分事，試舉看。

【本則】舉僧問鏡清學人啐，請師啄。無風起浪，作什麼，用許多見解作什麼。清云：還得活也無。就錯不可，總恁麼。僧云：若不活，遭人怪笑。相帶果，揀天，拄地，擔板。清云：也是

草裏漢。果然，自領出去，放過即不可。

【評唱】鏡清承嗣雪峰，與本仁、玄沙、疎山、太原、孚巖同時，初見雪峰，得旨後，常以啐啄之機開示後學，善能應機說法，示衆云：大凡行腳人，須具啐啄同時眼，有啐啄同時用，方稱衲僧，如母欲啄，而子不得不啐，子欲啐，而母不得不啄，有僧便出問，母啄子啐，於和尚分上，成得箇什麼

邊事，清云：好箇消息，僧云：子啐母啄，於學人分上，成得箇什麼邊事，清云：露箇面目，所以鏡清門下，有啐啄之機，這僧亦是他門下客，會他家裏事，所以如此問，學人啐請師啄，此問洞下謂之借事明機，那裏如此，子啐而母啄，自然恰好同時，鏡清也好，可謂拳踢相應，心眼相照，便答道：還得活也無，其僧也好，亦知機變，一句下有賓有主，有照有用，有殺有活，僧云：若不活，遭人怪笑，清云：也是草裏漢，一等是入泥入水，鏡清不妨惡腳手，這僧既會恁麼問，爲什麼卻道，也是草裏漢，所以作家眼目，須是恁麼，如擊石火，閃電光，構得構不得，未免喪身失命，若恁麼便見鏡清道草裏漢，所以南院示衆云：諸方只具啐啄同時眼，不具啐啄同時用，有僧出問，如何是啐啄同時用，南院云：作家不啐啄，啐啄同時失，僧云：猶是學人疑慮，南院云：作麼生是懶疑慮，僧云：失，南院便打，其僧不肯，院便趕出，僧後到雲門會裏舉前話，有一僧云：南院棒折那，其僧豁然有省，且道：意在什麼處，其僧卻回見南院，院適已遷化，卻見風穴，纔禮拜，穴云：莫是當時問先師啐啄同時底僧麼，僧云：是，穴云：懶當時作麼生會，僧云：某甲當初時，如燈影裏行，相似，穴云：懶會也，且道：是箇什麼道理，這僧都來，只道某甲當初時，如燈影裏行，相似，因甚麼，風穴便向他道：懶會也，後來翠巖拈云：南院雖然運籌帷幄，爭奈土曠人稀，知音者少，風穴拈云：南院當時待他開口，劈脊便打，看他作麼生，若見此公案，便見這僧與鏡清相見處，諸人作麼生，免得他道草裏漢，所以雪竇愛他道草裏漢，便頌出。

【頌】古佛有家風。

言猶在耳，千古榜樣，莫訪禪老，子好。

對揚遭貶剝。

鼻孔爲什麼，卻在山僧手裏，一八棒對十三個，作麼生，放過。

一、打、子母不相知。既不相知爲什麼是誰同啐啄。百轉碎、老婆心、啄、覺、麼、道、什麼、且、莫、錯、認、

二、猶在殼。何不出重遭撲。錯、便打、兩重公案、三重四重了也天下衲僧徒名邈。放過了、也、不須、

舉起、還有名、邈得底、麼、若名邈得也是草、蓋漢、千古萬古黑漫漫、填溝塞壑、無人會。

【評唱】古佛有家風，雪竇一句頌了也。凡是出頭來，直是近傍不得。若近傍著，則萬里崖州，纔出頭來，便是落草。直饒七縱八橫，不消一捏，雪竇道：古佛有家風，不是如今恁麼也。釋迦老子初生下來，一手指天，一手指地，目顧四方云：天上天下唯我獨尊。雲門道：我當時若見一棒打殺，與狗子喫卻，貴要天下太平。如此方酬得恰好，所以啐啄之機，皆是古佛家風。若達此道者，便可一拳拳倒黃鶴樓，一踢踢翻鸚鵡洲。如大火聚，近之則燎，卻面門如太阿劍，擬之則喪身失命。此箇唯是透脫得大解脫者，方能如此。苟或迷源滯句，決定構這般說話，不得對揚。遭貶剝，則是一賓一主，一問一答。於問答處，便有貶剝，謂之對揚。遭貶剝，雪竇深知此事，所以只向兩句下頌了。末後只是落草，爲備注破。子母不相知，是誰同啐啄，母雖啄，不能致子之啐。子雖啐，不能致母之啄。各不相知，當啐啄之時，是誰同啐啄。若恁麼會，也出雪竇末後句，不得在。何故不見香嚴道：子啐母啄，子覺無殼。子母俱忘，應緣不錯。同道唱和，妙玄獨腳。雪竇不妨落草，打葛藤道：啄，此一字，頌鏡清答道：還得活也。無覺頌這僧道：若不活，遣人怪笑。爲什麼雪竇卻便道：猶在殼。雪竇向石火光中，別緇素，閃電機裏，辨端倪。鏡清道：也是草裏漢。雪竇道：重遭撲者，難處些子。是鏡清道：也是草裏漢。喚作鏡清，換人眼睛，得麼。這句莫是猶在殼麼。且得沒交。

涉那裏如此。若會得，繞天下行腳報恩有分。山僧恁麼說話，也是草裏漢。天下衲僧徒名邈，誰不是名邈者。到這裏，雪竇自名邈不出，卻更累他。天下衲僧，且道：鏡清作麼生。是爲這僧處，天下衲僧跳不出。

第十七則

聖示云：斬釘截鐵，始可爲本分宗師。避箭隈，刀焉能爲通方作者。針筍不入處，則且置。白浪滔天時如何。試舉看。

【本則】舉僧問香林：如何是祖師西來意。大有、人、疑、着、編、有、道、箇、消息、在、林云：坐久

成勞。魚行水濁、鳥飛落毛、合、取、狗、口、好、作家、眼、目、解、稱、錢、

【評唱】香林道：坐久成勞，還會麼。若會得，百草頭上罷卻干戈。若也不會，伏聽處分。古人行腳，結交擇友，爲同行道伴。撥草瞻風，是時雲門旺化，廣南香林得得出蜀。與鵝湖鏡清同時，先參湖南報慈。後方至雲門會下，作侍者十八年。在雲門處，親得親聞。他悟時雖晚，不妨是大根器。居雲門左右十八年，雲門常只喚遠侍者。纔應喏門云：是什麼。香林當時也下語，呈見解。弄精魂，終不相契。一日忽云：我會也。門云：何不向上道將來。又住三年，雲門室中垂大機，辯多半。爲他遠侍者，隨處入作雲門。凡有一言一句，都收在遠侍者處。香林後歸蜀，初住導江水品宮。後住青城香林，智門祚和尚本浙人，盛聞香林道化，特來入蜀參禮。祚乃雪竇師也。雲門雖接人。

無數當代道行者，只香林一派最盛。歸川住院四十年，八十歲方遷化。嘗云：我四十年，方打成一片。凡示衆云：大凡行腳參尋，知識要帶眼行，須分縞素。看淺深始得，先須立志，而釋迎老子。在因地時，發一言一念，皆是立志。後來僧問：如何是室內一盞燈？林云：三人證龜成蛇，又問：如何是衲衣下事？林云：臘月火燒山，古來答祖師意甚多。唯香林此一則，坐斷天下人舌頭。無備計較，作道理處，僧問：如何是祖師西來意？林云：坐久成勞，可謂言無味，句無味，無味之談，塞斷人口。無備出氣處，要見便見，若不見，切忌作解會。香林曾遇作家來，所以有雲門手段，有三句體調，人多錯會道。祖師西來，九年面壁，豈不是坐久成勞，有什麼巴鼻，不見他古人得大自在處，他是腳踏實地，無許多佛法知見道理。臨時應用，所謂法隨法行，法隨隨處建立，雪竇因風吹火，傍指出一箇半箇。

【頌】一箇兩箇千萬箇。何不依而行之，如麻似粟，成作什麼。脫卻籠頭卸角馱。從今日去，應須

不在此令，脫過後，張弓，便打，喻。左轉右轉隨後來。猶自放不下，影響響響，便打。紫胡要打劉鐵磨。山僧拗折

【評唱】雪竇直下如擊石火，閃電光，拶出放教備見，聊開舉著，便會始得，也不妨是他屋裏兒孫，方能恁麼道。若能直下便恁麼會去，不妨奇特。一箇兩箇千萬箇，脫卻籠頭卸角馱，灑灑落落，不被生死所染，不被聖凡情解所縛，上無攀仰下絕已躬，一如他香林雪竇相似，何止只是千萬箇，直得盡大地人，悉皆如此，前佛後佛，也悉皆如此，苟或於言句中作解會，便似紫胡

要打劉鐵磨相似，其實纔舉和聲，便打紫胡參南泉，與趙州岑大蟲同參，時劉鐵磨在瀉山下卓庵，諸方皆不奈何他。一日紫胡得去訪云：莫便是劉鐵磨否？磨云：不敢，胡云：左轉右轉磨云：和尚莫顛倒，胡和聲便打，香林答這僧問：如何是祖師西來意？卻云：坐久成勞，若恁麼會得，左轉右轉隨後來也。且道：雪竇如此頌出，意作麼生無事好，試請舉看。

第十八則

【本則】舉肅宗皇帝。本此代宗，此誤。問忠國師：百年後所須何物。預備得拜，果然

大大作道去就，不可指東作西。國師云：與老僧作箇無縫塔。把不帝曰：請師塔樣。好與

國師良久云：會麼。停因長智，直得指東劃西。帝云：不會。報值不會，當時更與一

國師云：吾有付法弟子耽源，卻請此事，請詔問之。報值不，款，倒本

分草料，莫，捺，胡人好，放，過一著。國師遷化後。認情，果，然，錯帝詔耽源問此意如何。子承父

落在第三頭。源云：湘之南潭之北。也是把不住，兩兩三雪竇着語云：獨掌

不浪鳴。一盲引衆盲，果然隨語。中有黃金充一國。上是天，下是地，無道雪竇

着語云：山形拄杖子。拗折了也，也無影樹下合同船。祖師喪了也，雪竇

着語云：海晏河清。洪波浩渺，白浪滔天，騎鞍些子。琉璃殿上無知識。唱。雪竇着語

云，拈了也。

賊過後張弓，言猶在耳。

【評唱】肅宗伐宗，皆玄宗之子孫，爲太子時，常愛參禪，爲國有巨盜，玄宗遂幸蜀，唐本都長安，爲安祿山借據，後都洛陽，肅宗攝政，是時忠國師在鄧州白崖山住庵，今香嚴道場是也，四十餘年不下山，道行聞于帝里，上元二年勅中使詔入內，待以師禮，甚敬重之，嘗與帝演無上道，師退朝，帝自攀車而送之，朝臣皆有愠色，欲奏其不便，國師具他心通，而先見聖奏曰：我在天帝釋前見粟散天子，如閃電光相似，帝愈加敬重，及代宗臨御，復延止光宅寺，十有六載，隨機說法，至大曆十年遷化，山南府青銓山和尚，昔與國師同行，國師嘗奏帝令詔他，三詔不起，常罵國師，恥名愛利，戀著人間，國師於他父子三朝中爲國師，他家父子一時參禪，據傳燈錄所考，此乃是代宗設問，若是問國師如何是十身調御，此卻是肅宗問也，國師緣終將入涅槃，乃辭代宗，代宗問曰：國師百年後所須何物，也只是平常一箇問端，這老漢無風起浪，卻道與老僧造箇無縫塔，且道：白日青天，如此作什麼，做箇塔便了，爲什麼卻道做箇無縫塔，代宗也不妨作家，與爾一撈道，請師塔樣，國師良久云：會麼，奇恠這些子，最是難參，大小大國師，被佗一撈，直得口似匾擔，然雖如此，若不是這老漢，幾乎弄倒了，多少人道：國師不言處，便是塔樣，若恁麼會，達磨一宗掃地而盡，若謂良久便是，啞子也合會禪，豈不見外道問佛，不問有言不問，無言世尊良久，外道禮拜贊嘆曰：世尊大慈大悲，開我迷雲，令我得入，及外道去後，阿難問佛：外道有何所證而言得入，世尊云：如世良馬見鞭影而行，人多向良久處會，有什麼巴鼻，五祖

先師拈云：前面是珍珠瑪瑙，後面是瑪瑙珍珠，東邊是觀音勢至，西邊是文殊普賢，中間有箇磨子，被風吹著，道胡盧胡盧，國師云：會麼，帝曰：不會，卻較些子，且道：這箇不會，與武帝不識，是同是別，雖然似則似，是則未是，國師云：吾有付法弟子耽源，卻諳此事，請詔問之，雪竇拈云：獨掌不浪鳴，代宗不會，則且置，耽源還會麼，只消道箇請師塔樣，盡大地人不奈何，五祖先師拈云：爾是一國之師，爲箇什麼，不道，卻推與弟子，國師遷化後，帝詔耽源問：此意如何，源便來爲國師，胡言漢語說道理，自然會他，國師說話，只消一頌（祖庭事苑出齋時）：湘之南潭之北，中有黃金充一國，無影樹下合同船，瑠璃殿上無知識，耽源名應真，在國師處作侍者，後住吉州耽源寺，時仰山來參耽源，源言：重性惡不可犯，住不得，仰山先去參性空禪師，有僧問性空：如何是祖師西來意，空云：如人在千尺井中，不假寸繩，出得此人，卽答汝西來意，僧云：近日湖南暢和尚，亦爲人東語西話，空乃喚沙彌，拽出這死屍著，沙彌仰山，山後舉問耽源：如何出得井中人，耽源曰：咄，癡漢，誰在井中，仰山不契，後問澗山，山乃呼慧寂，山應諾，澗云：出了也，仰山因此大悟云：我在耽源處得體，澗山處得用，也只是這一箇頌子，引人邪解不少，人多錯會道，相是相見，諱是諱論，中間有箇無縫塔，所以道：中有黃金充一國，帝與國師對答，便是無影樹下合同船，帝不會，遂道：瑠璃殿上無知識，又有底道，相是相州之南，潭是潭州之北，中有黃金充一國，須官家，眨眼顧視云：這箇是無縫塔，若恁麼會，不出情見，只如雪竇下四轉語，又作麼生會，今人殊不知古人意，且道：湘之南潭之北，爾作麼生會，中有黃金充一國，爾作麼生會，無影樹下合同船，爾作麼生會，瑠璃殿上無知識，爾作麼生會，若恁麼見得，不妨慶快平生，湘之南潭

之北雪竇道，獨掌不浪鳴，不得已與備說，中有黃金充一國，雪竇道山形拄杖子，古人道識得拄杖子，一生參學事畢，無影樹下合同船，雪竇道海晏河清，一時豁開戶牖，八面玲瓏，瑠瑠殿上無知識，雪竇道拈了也，一時與備說了也，不妨難見，見得也好，只是有些子錯認處，隨語生解，至末後道拈了也，卻較些子，雪竇分明一時下語了，後面單頌箇無縫塔子。

【頌】無縫塔。這一縫大小見還難。非眼可見澄潭不許蒼龍蟠。見慶洪波清池，蒼龍向什

處，這裏直得摸來不着。

層落落。花作什麼影團團。通身是眼，落七落八，兩兩三三，舊路行，左轉右轉，隨後來。千古萬古

與人看。見慶，暗漢作慶生，看，聞，聚，觀，得，見，慶。

【評唱】雪竇當頭道，無縫塔見還難，雖然獨露無私，則是要見時還難，雪竇忒煞慈悲，更向備道，澄潭不許蒼龍蟠，五祖先師道，雪竇頌古一冊，我只愛他澄潭不許蒼龍蟠一句，猶較些子，多少人去他國師良久處作活計，若恁麼會，一時錯了也，不見道，臥龍不鑿止水，無處有月波，澄有處無風浪起，又道，臥龍長怖碧潭清，若是這箇漢，直饒洪波浩渺，白浪滔天，亦不在裏許，蟠雪竇到此頌了，後頭著些子眼目，琢出一箇無縫塔，隨後說道，層落落影團團，千古萬古與人看，備作慶生看，即今在什麼處，直饒備見得分明，也莫錯認定盤星。

第十九則

垂示云，一塵舉大地收，一花開世界起，只如塵未舉，花未開時，如何著眼，所以道，如斬一級絲，

一斬一切斬，如染一級絲，一染一切染，只如今便將葛藤截斷，運出自己家珍，高低普應，前後無差，各各現成，備或未然，看取下文。

【本則】舉，俱胝和尚，凡有所問，有什麼消息，只豎一指。只豎一指。這老漢也要，坐斷天

普地熱，寒則普天普地，寒，換卻天下人舌頭。

【評唱】若向指頭上會，則辜負俱胝，若不向指頭上會，則生鐵鑄就相似，會也恁麼去，不會也恁麼去，高也恁麼去，低也恁麼去，是也恁麼去，非也恁麼去，所以道，一塵纔起，大地全收，一花欲開，世界便起，一毛頭獅子，百億毛頭現，圓明道，寒則普天普地寒，熱則普天普地熱，山河大地，下徹黃泉，萬象森羅，上通霄漢，且道是什麼物，得恁麼奇怪，若也識得，不消一捏，若識不得，礙塞殺人，俱胝和尚，乃婺州金華人，初住庵時，有一尼名實際，到庵直入，更不下笠，持錫遶禪牀，三匝云，道得即下笠，如是三問，俱胝無對，尼便去，俱胝曰，天勢稍晚，且留一宿，尼曰，道得即宿，胝又無對，尼便行，胝嘆曰，我雖處丈夫之形，而無丈夫之氣，遂發憤要明此事，擬棄庵往諸方參請，打疊行腳，其夜山神告曰，不須離此，來日有肉身菩薩來，為和尚說法，不須去，果是次日，天龍和尚到庵，胝乃迎禮，具陳前事，天龍只豎一指而示之，俱胝忽然大悟，是他當時鄭重專注，所以桶底易脫，後來凡有所問，只豎一指，長慶道，美食不中飽人喫，玄沙道，我當時若見，拗折指頭，玄覺云，玄沙恁麼道，意作麼生，雲居錫云，只如玄沙恁麼道，是肯伊，是不肯伊，若肯伊，何言拗折指頭，若不肯伊，俱胝過在什麼處，先曹山云，俱胝承當處，莽鹵，只認得一機一境，

一等是拍手撫掌，見他西園奇怪，玄覺又云：且道俱胝還悟也未？爲什麼承當處莽鹵？若是不悟，又道平生只用一指頭禪，不盡且道。曹山意在什麼處？當時俱胝實然不會，及乎到他悟後，凡有所問，只豎一指，因什麼？千人萬人羅籠不住，撲他不破，倘若用作指頭會，決定不見古人意。這般禪易參，只是難會。如今人纔問著，也豎指豎拳，只是弄精魂，也須是徹骨徹髓，見透始得。俱胝庵中有一童子，於外被人詰曰：和尚尋常以何法示人？童子豎起指頭，歸而舉似師，俱胝以刀斷其指，童子叫喚走出，俱胝召一聲，童子回首，俱胝卻豎起指頭，童子豁然領解。且道見箇什麼道理？及至遷化，謂衆曰：吾得天龍一指頭禪，平生用不盡，要會麼？豎起指頭，便脫去。後來明招獨眼龍問國泰深師叔云：古人道俱胝只念三行咒，便得名超一切人，作麼生與他拈卻三行咒，深亦豎起一指頭，招云：不因今日爭識得這瓜州客，且道意作麼生？秘魔平生只用一杖打地和尙，凡有所問，只打地一下，後被人藏卻佗棒，卻問如何是佛？他只張口，亦是一生用不盡。無業云：祖師觀此土有大乘根器，唯單傳心印，指示迷塗，得之者不揀愚之與智，凡之與聖，且多虛不如少實。大丈夫漢，卽今直下休歇去，頓息萬緣，去超生死流，迥出常格，縱有眷屬莊嚴，不求自得，無業一生凡有所問，只道：莫妄想，所以道：一處透，千處萬處一時透。一機明千機，萬機一時明。如今人總不恁麼，只管恣意情解，不會他古人省要處，他豈不是無機關轉換處？爲什麼只用一指頭，須知俱胝到這裏，有深密爲人處，要會得省力麼？還他圓明道，寒則普天普地寒，熱則普天普地熱，山河大地，通上孤危，萬象森羅，徹下峻峻，什麼處得一指頭禪來。

【頌】對揚深愛老俱胝。不礙兒奉伴，詞道方知。宇宙空來更有誰。兩箇三箇，更有一箇。
 曾向滄溟下浮木。也是這箇，是則是太孤峻。夜濤相共接盲龜。擲天擲地，有什麼打設。

【評唱】雪竇會四六文章，七通八達，凡是誦說奇特公案，偏愛去頌對揚深愛老俱胝，宇宙空來更有誰，今時學者，抑揚古人，或資或主，一問一答，當面提持，有如此爲人處，所以道對揚深愛老俱胝，且道雪竇愛他作什麼，自天地開闢以來，更有誰人，只是俱胝老一箇，若是別人須參難，唯是俱胝老，只用一指頭直至老死，時人多邪解道：山河大地也空，人也空，法也空，直饒宇宙一時空來，只是俱胝老一箇，且得沒交涉，曾向滄溟下浮木，如今謂之生死海中，用一指頭接人，似下浮海之中，頭出頭沒，不明自己，無有出期，俱胝老垂慈接物，於生死海中，用一指頭接人，似下浮木，接盲龜相似，令諸衆生得到彼岸，夜濤相共接盲龜，法華經云：如一眼之龜，值浮木孔，無沒溺之患，大善知識，接得一箇如龍似虎底漢，教他向有佛世界，互爲賓主，無佛世界，坐斷要津，接得箇盲龜，堪作何用。

第二十則

雲示云：堆山積嶽，撞牆磕壁，佇思停機，一場苦屈，或有箇漢出來，掀翻大海，踢倒須彌，喝散白雲，打破虛空，直下向一機一境，坐斷天下人舌頭，無個近傍處，且道從上來，是什麼人會恁麼。

試舉看。

【本則】舉龍牙問翠微，如何是祖師西來意。諸方書語，也要動過。微云，與我

過禪板來。用禪板作什麼，泊合放過檢。牙過禪板與翠微。也是把不住，駕與背龍不微接

得便打。着打，得箇死漢濟事，也落在第二頭了也。牙云，打卽任打，要且無祖師西來意。漢

我過蒲團來。曹溪波派如相似，無限平人，被陸沉一狀領過一坑埋卻。牙取蒲團過與臨濟。依前把不住，

牙又問臨濟，如何是祖師西來意。諸方書公案，再問將來，不直半文錢。濟云，與

我過蒲團來。依前揚州，死漢一槓脫出。牙云，打卽任打，要且無祖師西

來意。約然，在鬼窟裏作活計，將一謂得便宜，賊過後張弓。

【評唱】翠巖芝和尚云，當時如是，今時衲子，皮下還有血脈，馮山語云，翠微臨濟，可謂本分宗

師，龍牙一等是撥草瞻風，不妨與後人作龜鑑，住院後有僧問和尚當時還肯二尊宿麼，牙云，

肯卽肯，只是無祖師西來意，龍牙瞻前顧後，應病與藥，大瀉則不然，待伊問和尚當時還肯二

尊宿麼，明不明劈脊便打，非惟扶豎翠微臨濟，亦不辜負來問，石門聰云，龍牙無人拶著猶可，

被箇衲子挨著，失卻一隻眼，雪竇云，臨濟翠微，只解把住不解放開，我當時如作龍牙，待伊索

蒲團禪板，拈起劈面便擲，五祖戒云，和尚得恁麼面長，或云，祖師土宿臨頭，黃龍新云，龍牙驅

耕夫之牛，奪飢人之食，既明則明矣，因什麼卻無祖師西來意，會麼，棒頭有眼明如日，要識真

金火裏看，大凡激揚要妙，提唱宗乘，向第一機下明得，可以坐斷天下人舌頭，儼或躊躇，落在

第二，這二老漢，雖然打風打雨，驚天動地，要且不曾打著箇明眼漢，古人參禪多少辛苦，立大

丈夫志氣，經歷山川，參見尊宿，龍牙先參翠微臨濟，後參德山，遂問學人仗錢劍，擬取師頭

時如何，德山引頸云，因牙云，師頭落也，山微笑便休去，次到洞山，洞山問，近離甚處，牙云，德山

來，洞山云，德山有何言句，牙遂舉前話，洞山云，他道什麼，牙云，他無語，洞山云，莫道無語，且試

將德山落底頭，呈似老僧看，牙於此有省，遂焚香遙望德山禮拜懺悔，德山聞云，洞山老漢不

識好惡，這漢死來多少時，救得有什麼用處，從他擔老僧頭，遠天下走，龍牙根性聰敏，擔一肚

皮禪行腳，直向長安翠微，便問，如何是祖師西來意，微云，與我過禪板來，牙取禪板與微，微接

得便打，牙云，打卽任打，要且無祖師西來意，又問臨濟，如何是祖師西來意，濟云，與我過蒲團

來，牙取蒲團與臨濟，濟接得便打，牙云，打卽任打，要且無祖師西來意，他致箇問端，不妨要見

他曲柔木床上老漢，亦要明自己一段大事，可謂言不虛設，機不亂發，出在做工夫處，不見五

洩參石頭，先自約曰，若一言相契卽住，不然卽去，石頭據座，洩拂袖而出，石頭知是法器，卽垂

開示，洩不領其旨，告辭而出，至門，石頭呼之云，閣黎，洩回顧，石頭云，從生至死，只是這箇回頭

轉腦，更莫別求，洩於言下大悟，又麻谷持錫到章敬，透禪床三匝，振錫一下，卓然而立，敬云，是

是，又到南泉，依前遶床，振錫而立，南泉云，不是，不是，此是風力所轉，終成敗壞，谷云，章敬道，是

和尚爲什麼道，不是，南泉云，章敬卽是，是汝不是，古人也不妨要提持透脫，此一件事，如今人

纔問著，全無些子用工夫處，今日也只是恁麼，明日也只是恁麼，倘若只恁麼，盡未來際，也未

有了日，須是抖擻精神，始得有少分相應。爾看龍牙發一問道：如何是祖師西來意？翠微云：與我過禪板來。牙過與微，微接得便打。牙當時取禪板時，豈不知翠微要打他，也不得便道：他不會。爲什麼卻過禪板與他？且道：當機承當得時，合作麼生？他不向活水處用，自去死水裏作活計。一向作主宰，便道：打即任打，要且無祖師西來意。又走去河北參臨濟，依前恁麼問。濟云：與我過蒲團來。牙過與濟，濟接得便打。牙云：打即任打，要且無祖師西來意。且道：二尊宿，又不同法嗣，爲什麼答處相似，用處一般？須知古人一言一句，不亂施爲。他後來住院，有僧問云：和尚當時見二尊宿，是肯他，不肯他？牙云：肯則肯，要且無祖師西來意。爛泥裏有刺，放過與人，已落第二。這老漢把得定，只做得洞下尊宿。若是德山臨濟門下，須知別有生涯。若是山僧則不然，只向他道：肯即未肯，要且無祖師西來意。不見僧問大梅：如何是祖師西來意？梅云：西來無意。鹽官問云：一箇棺材，兩箇死漢，玄沙問云：鹽官是作家，雪竇道：三箇也有，只如這僧問祖師西來意，卻向他道：西來無意。爾若恁麼會，墮在無事界裏。所以道：須參活句，莫參死句。活句下薦得，永劫不忘；死句下薦得，自救不了。龍牙恁麼道：不妨盡善。古人道：相續也大難。他古人一言一句，不亂施爲。前後相照，有權有實，有照有用。寶主歷然，互換縱橫。若要辨其親切，龍牙雖不昧宗乘，爭奈落在第二頭。當時二尊宿索禪板蒲團，牙不可不知他意，是他要用他胸襟裏事。雖然如是，不妨用得太峻。龍牙恁麼問，二老恁麼答，爲什麼卻無祖師西來意？到這裏須知別有箇奇特處。雪竇拈出令人看。

【頌】龍牙山裏龍無眼。曉說別人即得泥裏洗上塊天下人總知。死水何曾振古風。忽然活時無奈何果

及天下人禪板蒲團不能用。教何誰說，爾要禪板蒲團，出頭不得。只應分付與盧公。作什麼，莫是分付關梨麼。

也則分付不着，漆桶莫作這般見解。

【評唱】雪竇據款結案，他雖恁麼頌，且道意在什麼處？甚處是無眼？甚處是死水裏？到這裏須是有變通始得。所以道：澄潭不許蒼龍蟠，死水何曾有孽龍。不見道：死水不藏龍，若是活底龍，須向洪波浩渺，白浪滔天處去。此言龍牙走入死水，中去被人打，他卻道：打即任打，要且無祖師西來意。招得雪竇道：死水何曾振古風。雖然如此，且道：雪竇是扶持伊，是滅他威光？人多錯會道：爲什麼只應分付與盧公？殊不知，卻是龍牙分付與人。大凡參請，須是向機上辨別。方見他古人相見處。禪板蒲團不能用，翠微云：與我過禪板來。牙過與他，豈不是死水裏作活計？分明是駕與青龍，只是他不能解騎，是不能用也。只應分付與盧公，往往喚作六祖非也。不曾分付與人，若道分付與人，要用打人，卻成箇什麼去？昔雪竇自呼爲盧公，他題晦迹自貽云：圖畫當年愛洞庭，波心七十二峯青。而今高臥思前事，添得盧公倚石屏。雪竇要去龍牙頭上行，又恐人錯會，所以別頌要，翦人疑解。雪竇復拈云：

【頌】這老漢也未得勦絕，復成一頌。灼然能有幾人知，自知較一半，賴有末後句。盧公付了亦何憑。盡大地計恁麼人，也難得教誰領話。坐倚休將繼祖燈。草裏漢，打入黑山下，坐在鬼窟裏去也。堪對暮雲歸未合。一箇半箇，舉着即錯，果然出不着。遠山無限碧層層。寒卻爾眼，寒卻爾耳，沒滿深坑，更參三十年。

【評唱】盧公付了亦何憑，有何憑據，直須向這裏怎麼會去，更莫守株待兔，獨體前一時打破，無一點事在胸中，放教灑灑落落，地又何必要憑，或坐或倚，不消作佛法道理，所以道坐倚休，將繼祖燈，雪竇一時拈了也，他有箇轉身處，末後自露箇消息，有些子好處，道堪對暮雲歸未合，且道雪竇意在什麼處，暮雲歸欲合未合之時，備道作麼生，遠山無限碧層層，依舊打入鬼窟裏去，到這裏得失是非，一時坐斷灑灑落落，始較些子，遠山無限碧層層，且道是文殊境界耶，是普賢境界耶，是觀音境界耶，到此且道是什麼人分上事。

佛果園悟禪師碧巖錄卷第二終

佛果園悟禪師碧巖錄卷第二

第二十一則

垂示云：建法幢，立宗旨，錦上鋪花，脫籠頭卸角獸，太平時節，或者辨得格外句，舉一明三，共或未，然依舊伏聽處分。

【本則】舉僧問智門：蓮花未出水時如何。詢在不疑之地，泥裏洗。智門

云：蓮花。一二三四五六七，疑殺天下人。僧云：出水後如何。其向鬼窟裏作活計，又怎麼去也。門云：荷葉。州

自可，最苦是江南，兩頭三面，笑殺天下人。

【評唱】智門若是應機接物，猶較些子，若是截斷衆流，千里萬里，且道這蓮花，出水與未出水，是一是二，若怎麼見得，許備有箇入處，雖然如是，若道是一，顛頂佛性，備侗真如，若道是二，心鏡未忘，落在解路上走，有什麼歇期，且道古人意作麼生，其實無許多事，所以投子道，備但莫著名言數句，若了諸事，自然不著，即無許多位次不同，備攝一切法，一切法攝備不得，本無得失，夢幻如許多名目，不可強與佗安立名字，誑說備諸人得麼，備諸人問故，所以有言，備若不問，教我向備道什麼，即得一切事，皆是備將得來，都不干我事，古人道，欲識佛性義，當觀時節，因緣不見雲門舉，僧問靈雲云：佛未出世時如何，雲豎起拂子，僧云：出世後如何，雲亦豎起拂

子雲門云前頭打著後頭打不著又云不說出與不出何處有伊問時節也古人一問一答應時應節無許多事備若尋言逐句了無交涉備若能言中透得意中透得意機中透得機放令閑閑地方見智門答話處問佛未出世時如何牛頭未見四祖時如何斑石內混沌未分時如何父母未生時如何雲門道從古至今只是一段事無是非無得無失無生與未生古人到這裏放一綫道有出有入若是未了底人扶牆摸壁依草附木或致他放下又打入莽莽蕩蕩荒然處去若是得底人二六時中不依倚一物雖不依倚一物若露一機一境作麼生摸索他這僧問道蓮花未出水時如何智門云蓮花便只攔問一答不妨奇特諸方皆謂之顛倒語那裏如此不見嵩頭道常貴未開口已前猶較些子古人露機處已是漏逗了也如今學者不省古人意只管去理論出水與未出水有什麼交涉不見僧問智門如何是般若體門云蚌含明月僧云如何是般若用門云兔子懷胎看他如此對答天下人討他語脈不得或有人問夾山道蓮花未出水時如何只對他道露柱燈籠且道與蓮花是同是別出水後如何對他道杖頭挑日月腳下太泥深備且道是不是且莫錯認定盤星雪竇忒煞慈悲打破人情解所以頌出。

【頌】蓮花荷葉報君知。

老婆心切見成

出水何如未出時。

泥裏洗土塊分

江北江南問王老。

主人公在什麼處問王老

一狐疑了一狐疑。

一坑

自是圓疑不免疑情未息打云會麼

【評唱】智門本是浙人得得入川參香林既徹卻回住隋州智門雪竇是他的子見得好窮玄極妙直道蓮花荷葉報君知出水何如未出時這裏要人直下便會山僧道未出水時如何露柱燈籠出水後如何杖頭挑日月腳下太泥深備且莫錯認定盤星如今人咬人言句者有甚麼限備且道出水時是什麼時節未出水時是什麼時節若向這裏見得許備親見智門雪竇道備若不見江北江南問王老雪竇意道備只管去江北江南問尊宿出水與未出水江南添得兩句江北添得兩句一重添一重展轉生疑且道何時得不疑去如野狐多疑冰凌上行以聽水聲若不鳴方可過河參學人若一狐疑了一狐疑幾時得平穩去。

第二十二則

垂示云大方無外細若隣虛擒縱非他卷舒在我必欲解粘去縛直須削迹吞聲人人坐斷要津箇箇壁立千仞且道是什麼人境界試舉看。

【本則】舉雪峯示衆云南山有一條鼈鼻蛇。

見怪不怪其怪自壞大小

等諸人切須好看。

一場

長慶云今日堂中大人喪身失命。

僧舉似支沙。

同坑無異土奴見

支沙云須是稜兄始得雖然

如此我即不恁麼。

不免作野狐精見解是

僧云和尚作麼生。

沙云用南山作什麼。

釣魚船上謝三郎只道野狐精

雲門以拄杖擡向雪

峰面前作怕勢

怕他作什麼一子親得一等是弄精魂諸人試辨看。

【評唱】備若平展一任平展，備若打破一任打破。雪峯與巖頭欽山同行，凡三到投子。九上洞山，後參德山，方打破漆桶。一日率巖頭訪欽山，至鰲山店上，阻雪巖頭。每日只是打睡，雪峯一向坐禪。巖頭喝云：「睡眠去，每日床上，恰似七村裏土地相似。」佗時後日，魔魅人家男女去在峰，自點智云：「某甲這裏未穩在，不敢自瞞。」頭云：「我將謂備已後向孤峯頂上盤結草庵，播揚大教，猶作這箇語話。」峯云：「某甲實未穩在。」頭云：「備若實如此，據備見處，一一通來，是處我與備證明，不是處與備刻卻。」峯遂舉見鹽官上堂舉色空義，得箇入處。頭云：「此去三十年，切忌舉著。」峯又舉見洞山過水頌，得箇入處。頭云：「若與麼自救不了，後到德山問，從上宗乘中事，學人還有分也無？」山打一棒，道：「什麼？」我當時如桶底脫相似。頭遂喝云：「備不聞道，從門入者，不是家珍。」峯云：「他後如何？」即是頭云：「他日若欲播揚大教，一一從自己智襟流出，將來與我蓋天蓋地去。」峯於言下大悟，便禮拜，起來連聲叫云：「今日始是鰲山成道，今日始是鰲山成道。」後回闔中住象骨山，自貽作頌云：「人生倏忽暫須臾，浮世那能得久居。出嶺纔登三十二，入關早是四旬餘。他非不用頻頻舉，已過應須旋旋除。奉報滿朝朱紫貴，閻王不怕佩金魚。凡上堂示衆云：「一一蓋天蓋地，更不說玄說妙，亦不說心說性，突然獨露，如大火聚，近之則燎，卻面門似太阿劍，擬之則喪身失命。若也佇思停機，則沒干涉。只如百丈問黃檗，甚處去來？」檗云：「大雄山下採菌去來。」火云：「這見大蟲麼？」檗便作虎聲，丈便拈斧作斫勢，檗遂打百丈一擗，丈吟吟而笑，便歸陸座。謂衆云：「大雄山有一大蟲，汝等諸人，切須好看。老僧今日親遭一口，趙州凡見僧便問，曾到此間麼？」

云：曾到，或云：不會到。州總云：喫茶去。院主云：和尚尋常問僧，曾到與不曾到，總道喫茶去，意旨如何。州云：院主，主應諾州云：喫茶去。紫胡門下立一牌，牌上書云：紫胡有一狗，上取人頭，中取人腰，下取人腳。擬議則喪身失命，或新到纔相看師，便喝云：看狗。僧纔回首，師便歸方丈。正如雪峯道：南山有一條鼈鼻蛇，汝等諸人，切須好看。正當恁麼時，備作麼生祇對，不躡前蹤。試請道看，到這裏也，須是會格外句始得。一切公案語言，舉得將來，便知落處。看他恁麼示衆，且不自立規矩，言須有格外句，須要透關。若是語不離窠窟，墮在毒海中也。雪峯恁麼示衆，可謂無味之談。塞斷人口。長慶玄沙，皆是他家屋裏人，方會他恁麼說話。只如雪峯道：南山有一條鼈鼻蛇，諸人還知落處麼？到這裏須是具通方眼始得，不見真淨有頌云：「打鼓弄琵琶，相逢兩會家。雲門能唱和，長慶解隨邪。古曲無音韻，南山鼈鼻蛇。何人知此意，端的是玄沙。」只如長慶恁麼祇對，且道：意作麼生？到這裏如擊石火，似閃電光，方可構得。若有纖毫去不盡，便構他底不得。可惜許，人多向長慶言下，生情解道。堂中纔有開處，便是喪身失命。有者道：元無一星事，平白地上說這般話。疑人，人問他道：南山有一條鼈鼻蛇，備便疑著。若恁麼會，且得沒交涉。只去他言語上作活計，既不恁麼會，又作麼生會。後來有僧舉似玄沙，玄沙云：「須是稜兄始得。」雖然如是，我即不恁麼。僧云：「和尚又作麼生？」沙云：「用南山作什麼？」但看玄沙語中，便有出身處。便云：「用南山作什麼？」若不是玄沙，也大難酬對。只如他恁麼道：南山有一條鼈鼻蛇，且道：在什麼處？到這裏須是向上人方會。恁麼說話，古人道：釣魚船上謝三郎，不愛南山鼈鼻蛇，卻到雲門，以

拄杖擡向雪峯面前作怕勢。雲門有弄蛇手腳，不犯鋒鏑，明頭也打著，暗頭也打著，他尋常爲人，如舞大阿劍相似，有時飛向人眉毛眼睫上，有時飛向三千里外，取人頭，雲門擡拄杖作怕勢，且不是弄精魂，他莫也是喪身失命麼？作家宗師終不去一言一句上作活計，雪竇只爲愛雲門契證得雪峯意，所以頌出。

【頌】象骨巖高人不到，千箇萬箇摸索，不着，非公境界。到者須是弄蛇手。是精識，精是賊，賊成，群作隊。

稜師備師不奈何，一作：放過一着。喪身失命有多少。謂不重科，詔

陽知，猶較些子，這老漢只具一重撥草。南北東西無處討。果然在什麼處便打。

忽然突出拄杖頭，看高着。拋對雪峯大張口。自作自受，吞卻千

大張口兮同閃電，兩重公案，果然。別起眉毛還不見。湖四海，覓

如今藏在乳峯前，向什麼處去也，大小雪竇也作。來者一一看

師高聲喝云，看腳下。賊過後張弓，第二頭。

【評唱】象骨巖高人不到，到者須是弄蛇手。雪峯山下有象骨巖，雪峯機鋒高峻，罕有人到。他處雪竇是他屋裏人，毛羽相似，同聲相應，同氣相求，也須是通方作者，共相證明，只這龜鼻蛇，也不妨難弄，須是解弄始得。若不解弄，反被蛇傷。五祖先師道，此龜鼻蛇，須是有不傷犯手腳，底機於他七寸上，一捏捏住，便與老僧把手共行。長慶玄沙有這般手腳，雪竇道：稜師備師不

奈何，人多道：長慶玄沙不奈何，所以雪竇獨美雲門，且得沒交涉，殊不知三人中，機無得失，只是有親疎，且問諸人：什麼處是稜師備師不奈何處？喪身失命有多少？此頌長慶道：今日堂中，大有人喪身失命，到這裏，須是有弄蛇手，子細始得。雪竇出他雲門，所以一時撥卻，獨存雲門一箇道。韶陽知重撥草，蓋爲雲門知他雪峯道南山有一條龜鼻蛇，落處，所以重撥草。雪竇頌到這裏，更有妙處。云：南北東西無處討，爾道：在什麼處？忽然突出拄杖頭，元來只在這裏。爾不可便向拄杖頭上作活計去也。雲門以拄杖擡向雪峯面前作怕勢，雲門便以拄杖作龜鼻蛇用。有時卻云：拄杖子化爲龍，吞卻乾坤了也。山河大地甚處得來，只是一條拄杖子，有時作龍，有時作蛇，爲什麼如此？到這裏方知古人道：心隨萬境轉，轉處實能幽。頌道：拋對雪峯大張口，大張口兮同閃電。雪竇有餘才，拈出雲門毒蛇云：只這大張口兮同閃電，相似，爾若擬議，則喪身失命，別起眉毛，還不見，向什麼處去也。雪竇頌了，須去活處爲人，將雪峯蛇自拈自弄，不妨殺活臨時，要見麼？云：如今藏在乳峯前，乳峰乃雪竇山名也。雪竇有頌云：石髓四顧滄溟窄，寥寥不許白雲白。長慶玄沙：雲門雖弄得了不見，卻云：如今藏在乳峰前，來者一一看方便。雪竇猶涉廉纖在，不言使用，卻高聲喝云：看腳下，從上來有多少人拈弄，且道：還曾傷着人，不曾傷着人，師便打。

第二十三則

垂示云：玉將火試，金將石試，劍將毛試，水將杖試。至於衲僧門下，一言一句，一機一境，一出

入一拔一按，要見深淺，要見向背，且道將什麼試，請舉看。

【本則】舉保福長慶遊山次。道兩箇福以手指云，只這裏便是妙

峰頂。平地上起骨堆切慶云，是則是，可惜許。若不是眼兩箇，一坑埋卻。雪竇

着語云，今日共這漢遊山，圖箇什麼。不妨減人斤兩，一較些子，傍人按劍。復云，百千年

後不道無，只是少。少實弄，也是後舉似鏡清。有好清云，若不是孫公，

便見觸體遍野。同道者方知，大地茫茫，殺人，奴見禪

【評唱】保福長慶鏡清，總承嗣雪峰，他三人同得同證，同見同聞，同拈同用，一出一入，遞相按按，蓋為他是同條生底人，舉着便知落處，在雪峯會裏，居常問答，只是他三人，古人行住坐臥，以此道為念，所以舉着便知落處，一日遊山次，保福以手指云，只這裏便是妙峰頂，如今禪和子，恁麼問着，便只口似匾擔，賴值問着長慶，備道，保福恁麼道，圖箇什麼，古人如此，要驗，他肉眼無眼，是他家裏人，自然知他落處，便對他道，是即是，可惜許，且道，長慶恁麼道，意旨如何，不可一向恁麼去也，似則似罕，有等閑無一星事，賴是長慶識破他，雪竇着語云，今日共這漢遊山，圖箇什麼，且道，落在什麼處，復云，百千年後不道無，只是少，雪竇解點，正似黃檗道不道無禪，只是無師，雪竇恁麼道，也不妨險峻，若不是同聲相應，爭得如此孤危奇怪，此謂之著語，落在兩邊，雖落在兩邊，卻不住兩邊，後舉似鏡清，清云，若不是孫公，便見觸體遍野，孫公乃長

慶俗姓也，不見僧問趙州，如何是妙峰孤頂，州云，老僧不答，備這話，僧云，為什麼不答，這話，州云，我若答備，恐落在平地上，教中說，妙峰孤頂，德雲比丘，從來不下山，善財去參，七日不逢，一日卻在別峯相見，及乎見了，卻與他說，一念三世，一切諸佛，智慧光明，普見法門，德雲既不下山，因什麼，卻在別峯相見，若道他下山，教中道，德雲比丘，從來不曾下山，常在妙峯孤頂，到這裏，德雲與善財的，在那裏，自後李長者，打葛藤，打得好道，妙峯孤頂，是一味平等法門，一一皆真，一一皆全，向無得無失，無是非處，獨露，所以善財不見，到稱性處，如眼不自見，耳不自聞，指不自觸，如刀不自割，火不自燒，水不自洗，到這裏，教中大有老婆相為處，所以放一線道，於第二義門，立賓立主，立機境，立問答，所以道，諸佛不出世，亦無有涅槃，方便度衆生，故現如斯事，且道，畢竟作麼生，免得鏡清雪竇恁麼道去，當時不能拍拍相應，所以盡大地人，觸體遍野，鏡清恁麼證將來，那兩個恁麼用將來，雪竇後面頌出，更顯煥，頌云，

【頌】妙峯孤頂草離離。和身沒卻，下拈得分明付與誰。用作什麼，大地

堪作何用，拈得不是孫公辨端的。錯，看前，着觸體着地幾人知。更不，再下，

鼻孔失卻口

【評唱】妙峯孤頂草離離，草裏棍有什麼了期，拈得分明付與誰，什麼處是分明處，頌保福道，只這裏便是妙峰頂，不是孫公辨端的，孫公見什麼道理，便云，是則是，可惜許，只如觸體著地，幾人知，汝等諸人還知麼，瞎。

第二十四則

垂示云：高高峰頂立，魔外莫能知。深深海底行，佛眼覷不見。直饒眼似流星機，如掣電，未免靈龜曳尾。到這裏合作麼生，試舉看。

【本則】舉劉鐵磨到瀉山。不妨難，後泊道。老婆不守本分。山云：老牯牛，汝來也。點探竿影。

磨云：來日臺山大會齋，和尚還去麼。箭不虛發，大唐打鼓新羅。瀉山

放身臥。中也，爾向什麼處見瀉山，磨便出去。機而作。

【唱評】劉鐵磨（尼也），如擊石火，似閃電光，擬議則喪身失命，禪道若到緊要處，那裏有許多事。他作家相見，如隔牆見角，便知是牛，隔山見煙，便知是火。拶着便動，捺着便轉。瀉山道：老僧百年後，向山下檀越家，作一頭水牯牛，左脇下書五字云：瀉山僧某甲。且正當恁麼時，喚作瀉山僧，即是喚作水牯牛，即是如今人間着管取分疎不下。劉鐵磨久參機鋒峭峻，人號為劉鐵磨。去瀉山十里卓庵，一日去訪瀉山，山見來便云：老牯牛，汝來也。磨云：來日臺山大會齋，和尚還去麼。瀉山放身便臥，磨便出去，爾看他一如說話相似，且不是禪，又不是道，喚作無事會得麼。瀉山去臺山自隔數千里，劉鐵磨因什麼，卻令瀉山去齋，且道：意旨如何。這老婆會他瀉山說話，絲來線去，一放一收，互相酬唱，如兩鏡相照，無影像，可觀。機機相副，句句相投，如今人三搭不迴頭，這老婆一點也瞞他不得。這箇卻不是世諦情見，如明鏡當臺，明珠在掌，胡來胡現，漢

來漢現，是他知有向上事，所以如此。如今只管做無事會，五祖演和尚道：莫將有事為無事，往往事從無事生。倘若參得透去，見他恁麼，如尋常人說話一般，多被言語隔礙，所以不會。唯是知音方會他底，只如乾峯示衆云：舉一不得，舉二放過，一着落在第二。雲門出衆云：昨日有一僧從天台來，卻往南岳去。乾峯云：典座今日不得普請，看他兩人放則雙放，收則雙收。瀉山謂之境致，風塵草動，悉究端倪，亦謂之隔身句。意通而語隔，到這裏須是左撥右轉，方是作家。

【頌】曾騎鐵馬入重城。將軍作家，塞外。勅下傳聞六國清。狗銜放書，寶中。

猶握金鞭問歸客。是什麼消息，一條拄杖，兩。夜深誰共御街行。君向瀟湘，我

道，行作什麼。

【評唱】雪竇頌諸方以為極則，一百頌中這一頌最具理路，就中極妙，貼體分明。頌出曾騎鐵馬入重城，頌劉鐵磨恁麼來，勅下傳聞六國清。頌瀉山恁麼問，猶握金鞭問歸客。頌磨云：來日臺山大會齋，和尚還去麼。夜深誰共御街行。頌瀉山放身便臥，磨便出去。雪竇有這般才調，急切處向急切處頌，緩緩處向緩緩處頌。風穴亦曾拈，同雪竇意。此頌諸方皆美之，高高峰頂立，魔外莫能知。深深海底行，佛眼覷不見。看他一箇放身臥，一箇便出去。若更周遮，一時求路不見。雪竇頌意最好，是曾騎鐵馬入重城。若不是同得同證，焉能恁麼。且道：得箇什麼意。不見僧問風穴：瀉山道：老牯牛，汝來也。意旨如何。穴云：白雲深處金龍躍。僧云：只如劉鐵磨道：來日臺山大會齋，和尚還去麼。意旨如何。穴云：碧波心裏玉兔驚。僧云：瀉山便作臥勢。意旨如何。穴云：

老倒踈慵無事日，閑眠高臥對青山。此意亦與雪竇同也。

第二十五則

垂示云：機不離位，墮在毒海，語不驚群，陷於流俗。忽若擊石火裏，別縑素閃電光中，辨殺活，可
以坐斷十方，豈立千仞，還知有恁麼時節麼？試舉看。

【本則】舉蓮花峰庵主拈拄杖示衆云。看，頂門上具一隻眼，也是時人窺竄。古人到這裏，
爲什麼不肯住。不可向虛空裏釘樞，權立化城。衆無語。千箇萬箇如席似葉，卻較些子，可惜許，一棚俊鶻。自代云：爲
他途路不得力。若向途中辨箇爭半月程，設使得力，堆作什麼，豈可全無一箇。復云：畢竟如何。千人萬人只向箇裏會，十人十人只向箇裏會。又自代云：柳標橫擔不顧人，直入千峰萬峰去。也好與三

【評唱】諸人還裁辨得蓮花峯庵主麼？腳跟也未點地，在國初時在天台蓮花峯卓庵，古人既
得道之後，茅茨石室中，折腳錫兒內，煮野菜根喫過日，且不求名利，放曠隨緣，垂一轉語，且要
報佛祖恩，傳佛心印，纔見僧來，便拈拄杖云：古人到這裏，爲什麼不肯住？前後二十餘年，終無
一人答得，只這一問，也有權有實，有照有用，若也知他因緣，不消一捏，備且道：因什麼二十年
如此問？既是宗師所爲，何故只守一槩？若向箇裏見得，自然不向情塵上走。凡二十年中，有多

少人與他平展，下語呈見解，做盡伎倆，設有箇道得，也不到他極則處。況此事雖不在言句中，
非言句即不能辨，不見道道本無言，因言顯道，所以驗人端的處。下口便知音，古人垂一言半
句亦無他，只要見備知有不知有，他見人不會，所以自代云：爲他途路不得力，看他道得自然
契理契機，幾曾失卻宗旨。古人云：承言須會宗，勿自立規矩。如今人只管撞將去，便了得，則得
爭奈顛頂儻侗，若到作家面前，將三要語印空印泥印水，驗他便見，方木逗圓孔，無下落處，到
這裏討一箇同得同證，臨時向什麼處求？若是知有底人，開懷通箇消息，有何不可？若不遇人，
且卷而懷之，且問備諸人，拄杖子是滂僧尋常用底，因什麼卻道途路不得力？古人到此不肯
住，其實金屑雖貴，落眼成翳，石室善道和尚當時遭沙汰，常以拄杖示衆云：過去諸佛也恁麼，
未來諸佛也恁麼，現前諸佛也恁麼，雪峯一日僧堂前拈拄杖示衆云：這箇只爲中下根人，時
有僧出問云：忽遇上上人來時如何？峯拈拄杖便去，雲門云：我即不似雪峯打破狼藉，僧問：未
審和尚如何？雲門便打，大凡參問也無許多事，爲備外見有山河大地，內見有見聞覺知，上見
有諸佛可求，下見有衆生可度，直須一時吐卻，然後十二時中行住坐臥，打成一片，雖在一毛
頭上，寬若大千沙界，雖居鑊湯爐炭中，如在安樂國土，雖居七珍八寶中，如在茅茨蓬蒿下，這
般事若是通方作者，到古人實處，自然不費力，他見無人，構得他底，復自微云：畢竟如何？又奈
何不得，自云：柳標橫擔不顧人，直入千峰萬峰去。這箇意又作麼生？且道：指什麼處爲地頭？不
妨句中有眼，言外有意，自起自倒，自放自收，豈不見嚴陽尊者路逢一僧，拈起拄杖云：是什麼？
僧云：不識。嚴云：一條拄杖也不識。嚴復以拄杖地上筍一下云：還識麼？僧云：不識。嚴云：土窟子

也不識嚴復以拄杖擔云會麼僧云不會嚴云柳標橫擔不顧人直入千峯萬峯去古人到這裏爲什麼不肯住雪竇有頌云誰當機舉不賺亦還希摧殘峭峻銷鑠玄微重關曾巨關作者未同歸玉兔乍圓乍缺金烏似飛不飛盧老不知何處去白雲流水共依依因什麼山僧道腦後見腮莫與往來纔作計較便是黑山鬼窟裏作活計若見得徹信得及千人萬人自然羅籠不住奈何不得動着拶着自然有殺有活雪竇會他意道直入千峯萬峯去方始成頌要知落處看取雪竇頌云

【頌】眼裏塵沙耳裏土。有什塵限更有恁麼千峰萬峰不肯住。爾向什處消息

落花流水太茫茫。好箇消息閃電之機徒勞別起眉毛何處去。眼

且道是什下更贈一對眼元來只在這裏還載得庵主脚跟麼雖然如是也須是到這田地始得打云爲什麼只在這裏

【評唱】雪竇頌得甚好有轉身處不守一隅便道眼裏塵沙耳裏土此一句頌蓮花峰庵主禪僧家到這裏上無攀仰下絕已躬於一切時中如癡似兀不見南泉道學道之人如癡鈍者也難得禪月詩云常憶南泉好言語如斯癡鈍者還希法燈云誰人知此意令我憶南泉南泉又道七百高僧盡是會佛法底人唯有盧行者不會佛法只會道所以得他衣鉢且道佛法與道相去多少雪竇拈云眼裏着沙不得耳裏着水不得或有箇漢信得及把得住不受人瞞祖佛言教是什麼熱碗鳴聲便請高掛鉢囊拗拄杖管取一員無事道人又云眼裏着得須彌山耳裏着得大海水有一般漢受人商量祖佛言教如龍得水似虎靠山卻須挑起鉢囊橫擔

拄杖亦是一員無事道人復云恁麼也不得不恁麼也不得然後沒交涉三員無事道人中要選一人爲師正是這般生鐵鑄就底漢何故或遇惡境界或遇奇特境界到他面前悉皆如夢相似不知有六根亦不知有且暮直饒到這般田地切忌守寒灰死火打入黑漫漫處去也須是有轉身一路始得不見古人道莫守寒巖異草青坐卻白雲宗不妙所以蓮花峰庵主道爲他途路不得力直須是千峯萬峯去始得且道喚什麼作千峯萬峯雪竇只愛他道柳標橫擔不顧人直入千峯萬峯去所以頌出且道向什麼處去還有知得去處者麼落花流水太茫茫落花紛紛流水茫茫閃電之機眼前是什麼別起眉毛何處去雪竇爲什麼也不知他去處只如山僧道適來舉拂子且道即今在什麼處備諸人若見得與蓮花峯庵主同參其或未然三條椽下七尺單前試去參詳看

第二十六則

【本則】舉僧問百丈如何是奇特事。言中有響句裏呈機丈云獨坐大

雄峯。源遠威風四百州坐者立者二俱敗缺僧禮拜。俗例稱僧也有恁麼人、要見恁麼事丈便打。作家宗師何故來言不覺令不盡行

【評唱】臨機具眼不顧危亡所以道不入虎穴爭得虎子百丈尋常如虎插翅相似這僧也不避死生敢捋虎鬚便問如何是奇特事這僧也具眼百丈便與他擔荷云獨坐大雄峰其僧便禮拜禪僧家須是別未問已前意始得這僧禮拜與尋常不同也須是具眼始得莫教平生心

臉向人傾相識還如不相識只這僧問如何是奇特事百丈云獨坐大雄峰僧禮拜丈便打看他放去則一時俱是收來則掃蹤滅跡且道他便禮拜意旨如何若道是好因甚百丈便打他作什麼若道是不好他禮拜有什麼不得處到這裏須是識休咎別縹素立向千峰頂上始得這僧便禮拜似捋虎鬚相似只爭轉身處賴值百丈頂門有眼肘後有符照破四天下深辨來風所以便打若是別人無奈他何這僧以機投機以意遣意他所以禮拜如南泉云文殊普賢昨夜三更起佛見法見各與二十棒貶向二鐵圍山去也時趙州出衆云和尚棒教誰喫泉云王老師有什麼過州禮拜宗師家等閑不見他受用處纔到當機拈弄處自然活潑潑地五祖先師常說如馬前相撲相似備但常教見聞聲色一時坐斷把得定作得主始見他百丈且道放過時作麼生看取雪竇頌出云

【頌】祖域交馳天馬駒。五百年一箇生千人萬人化門舒卷不同途。已在

梁得自由道電光石火存機變。勢面來也左轉右轉還堪笑人來捋虎鬚。言前

【評唱】雪竇見得透方乃頌出天馬駒日行千里橫行豎走奔驟如飛方名天馬駒雪竇頌百丈於祖域之中東走向西西走向東一來一往七縱八橫殊無少礙如天馬駒相似善能交馳方見自由處這箇自是得他馬祖大機大用不見僧問馬祖如何是佛法大意祖便打云我若不打爾天下人笑我去在又問如何是祖師西來意祖云近前來向爾道僧近前祖劈耳便掌

云六耳不同謀看他恁麼得大自在於建化門中或卷或舒有時舒不在卷處有時卷不在舒處有時卷舒俱不在所以道同塗不同轍此頌百丈有這般手脚雪竇道電光石火存機變頌這僧如擊石火似閃電光只在些子機變處巖頭道卻物爲上逐物爲下若論戰也箇箇立在轉處雪竇道機輪曾未轉轉必兩頭走若轉不得有什麼用處大丈夫漢也須是識些子機變始得如今人只管供他欺被他穿卻鼻孔有什麼了期這僧於電光石火中能存機變便禮拜雪竇道堪笑人來捋虎鬚百丈似一箇大蟲相似堪笑這僧去捋虎鬚

第二十七則

垂示云問一答十舉一明三見兔放鷹因風吹火不惜眉毛則且置只如入虎穴時如何試舉看

【本則】舉僧問雲門樹凋葉落時如何。是什麼時節家破雲門云體露

金風。擗天挂地新釘鐵線淨

【評唱】若向箇裏薦得始見雲門爲人處其或未然依舊只是指鹿爲馬眼睛耳聾誰人到這境界且道雲門爲復是答他話爲復是與他酬唱若道答他話錯認定盤星若道與他唱和且得沒交涉既不恁麼畢竟作麼生爾若見得透消僧鼻孔不消一捏其或未然依舊打入鬼窟裏去大凡扶墜宗乘也須是全身擔荷不惜眉毛向虎口橫身任他橫拖倒拽若不如此爭能

爲得人這僧致箇問端，也不妨峻峻若以尋常事看他，只似箇管閑事底僧，若據禪僧門下去，命脈裏觀時，不妨有妙處，且道：樹凋葉落是什麼人境界，十八問中，此謂之辨主問，亦謂之借事問，雲門不移易一絲毫，只向他道：體露金風，答得甚妙，亦不敢辜負他問頭，蓋爲他問處有眼，答處亦端的，古人道：欲得親切，莫將問來問，若是知音底，舉着便知落處，倘若向雲門語脈裏討便錯了也，只是雲門句中多愛惹人情解，若作情解會，未免喪我兒孫，雲門愛恁麼騎賊馬趁賊，不見僧問，如何是非思量處，門云：識情難測，這僧問樹凋葉落時如何，門云：體露金風，句中不妨把斷要津，不通凡聖，須會他舉一明三，舉三明一，倘若去他三句中求，則腦後拔箭，他一句中須具三句，函蓋乾坤句，隨波逐浪句，截斷衆流句，自然恰好，雲門三句中，且道用那句，接人，試辨看，頌曰：

【頌】問既有宗，深辨來風，箭不虛發。答亦攸全，豈有兩般，如鐘待扣，功不浪施。三句可辨，是上中下，如今是向三句外，

一鏃遶空，中過也，聖著鏃，箭過新羅。大野兮涼颼颼，昔天匝地，還覺骨毛卓擊，應放行去也。

長天兮踈雨濛濛，風浩浩，水漫漫，頭上濛濛，人黃河頭上，濛濛過來。君不見，帶累殺人，黃河頭上，濛濛過來。少林久坐未歸客，更有不啾啾漢。

一叢叢，開眼也，若合眼也，若鬼窟裏作活計，眼頭上，濛濛過來。靜依熊耳，瞎耳雙，誰到這境界，不免打折鐵版。

【評唱】古人道：承言須會宗，勿自立規矩，古人言：不虛設，所以道：大凡問箇事，也須識些子好惡，若不識尊卑去就，不識淨觸，信口亂道，有什麼利濟，凡出言吐氣，須是如錯如缺，有鈎有鏤。

須是相續不斷始得，這僧問處有宗旨，雲門答處亦然，雲門尋常以三句接人，此是極則也，雪竇頌這公案，與頌大龍公案相類，三句可辨，一句中具三句，若辨得則透出三句外，一鏃遶空，鏃乃箭鏃也，射得太遠，須是急着眼看始得，若也見得分明，可以一句之下，開展大千沙界，到此頌了，雪竇有餘才，所以展開頌出道：大野兮涼颼颼，長天兮踈雨濛濛，且道：是心是境，是玄是妙，古人道：法法不隱藏，古今常顯露，他問：樹凋葉落時如何，雲門道：體露金風，雪竇意只作一境，如今眼前，風拂拂地，不是東南風，便是西北風，直須便恁麼會始得，倘若更作禪道會，便沒交涉，君不見，少林久坐未歸客，達磨未歸西天時，九年面壁，靜悄悄地，且道：是樹凋葉落，且道：是體露金風，若向這裏，盡古今凡聖，乾坤大地，打成一片，方見雲門雪竇的，爲人處，靜依熊耳一叢叢，熊耳即西京嵩山少林也，前山也，千叢萬叢，後山也，千叢萬叢，諸人向什麼處見，還見雪竇爲人處麼，也是靈龜曳尾。

第二十八則

【本則】舉南泉參百丈涅槃和尚，丈問：從上諸聖還有不爲人說底法麼，和尙合知，豎立萬仞，還覺箇落麼。泉云：有，落草了也，孟八郎作。丈云：作麼生是不爲人說底法，看他作麼生，看他手忙，亂將錯就，錯但試問看。泉云：不是心，不是佛，不是物，果然，納放。丈云：說了也，莫與他說破，從他錯一，平庄不合，與他恁麼道。泉云：某甲只恁麼，和尚作

麼生。頗有轉身處，與長即長。丈云：我又不是大善知識，爭知有說不說。

看他手忙脚亂，說身露影，去死。泉云：某甲不會。作可憐，顛倒不會，會即打。丈云：我

太煞爲備說了也。蛇尾作什麼。

【評唱】到這裏也不消即心不即心，不消非心不非心，直下從頂至足眉毛一莖也無，猶較些子，即心非心，壽禪師謂之表詮遮詮，此是涅槃和尚法正禪師也。昔時在百丈作西堂，開田說大義者，是時南泉已見馬祖了，只是往諸方決擇，百丈致此一問，也大難酬。云：從上諸聖還有不爲人說底法麼？若是山僧掩耳，而看出這老漢一場懺懺，若是作家，見他怎麼問，便識破得他。南泉只據他所見，便道有，也是孟八郎百丈便將錯就錯，隨後道：作麼生是不爲人說底法？泉云：不是心不是佛不是物，這漢貪觀天上月，失卻掌中珠。丈云：說了也可惜許，與他注破，當時但劈脊便棒，教他知痛痒，雖然如是，備且道：什麼處是說處？據南泉見處，不是心不是佛不是物，不曾說著，且問備諸人：因什麼卻道說了也？他語下又無蹤迹，若道他不說，百丈爲什麼卻恁麼道？南泉是變通底人，便隨後一撈云：某甲只恁麼，和尚又作麼生？若是別人，未免分疎不下，爭奈百丈是作家，答處不妨奇特，便道：我又不是大善知識，爭知有說不說？南泉便道：箇不會，是渠果會來道不會，莫是真箇不會。百丈云：我太煞爲備說了也，且道：什麼處是說處？若是弄泥團漢時，兩箇漏漚漚，若是二俱作家時，如明鏡當臺，其實前頭二俱作家，後頭二俱放過，若是具眼漢，分明驗取，且道：作麼生驗他？看雪竇頌出云：

【頌】祖佛從來不爲人。各自守，在界，有條，如記得。衲僧今古競頭走。

草鞋，狗，折柱。明鏡當臺列像殊。隨也，破也，打。一一面南看北斗。還見，老

杖，高掛鉢盂。斗柄垂。在什麼處，不知。無處討。地，樣，子，成，七，八，片。拈得鼻

孔失卻口。那裏得這消息來，

【評唱】釋迦老子出世，四十九年，未曾說一字，始從光耀土，終至跋提河，於是二中間，未曾說一字，恁麼道，且道，是說是不說，如今滿龍宮，盈海藏，且作麼生是不說，豈不見修山主道，諸佛不出世，四十九年說，達磨不西來，少林有妙訣，又道：諸佛不會出世，亦無一法與人，但能觀衆生心，隨機應病，與藥施方，遂有三乘十二分教，其實祖佛自古至今，不曾爲人說，只這不爲人，正好參詳，山僧常說，若是添一句，甜蜜地，好好觀來，正是毒藥，若是劈脊便棒，藉口便擱，推將出去，方始親切爲人，衲僧今古競頭走，到處是也問，不是也問，問佛問祖，問向上問向下，雖然如此，若未到這田地，也少不得，如明鏡當臺列像殊，只消一句，可辨明白，古人道：萬象及森羅，一法之所印，又道：森羅又萬象，總在箇中圓，神秀大師云：身是菩提樹，心如明鏡臺，時時勤拂拭，勿使惹塵埃，大滿云：他只在門外，雪竇恁麼道，且道：在門內，在門外，備等諸人，各有一面古鏡，森羅萬象，長短方圓，一一於中顯現，備若去長短處，會卒摸索不着，所以雪竇道：明鏡當臺列像殊，卻須是一一，面南看北斗，既是面南，爲什麼卻看北斗？若恁麼會得，方見百丈南泉相見處，此兩句頌，百丈挨拶處，丈云：我又不是大善知識，爭知有說不說，雪竇到此，頌得落在

死水裏恐人錯會，卻自提起云：「即目前斗柄垂，偏更去什麼處討，偏纔拈得鼻孔，失卻口，拈得口，失卻鼻孔了也。」

第二十九則

垂示云：魚行水濁，鳥飛毛落，明辨主賓，洞分緇素，直似當臺明鏡，掌內明珠，漢現胡來，聲彰色顯，且道爲什麼如此試舉看。

【本則】舉僧問大隋劫火洞然大千俱壞，未審這箇壞不壞。是這箇壞不壞，這一句天下兩僧摸未不着，預攝待弄。隋云：壞。孔未開口已前，動破了也。僧云：恁麼則隨他去也。沒量大人語，殊裏轉卻，果然錯認。

【評唱】大隋法真和尚承嗣大安禪師，乃東川鹽亭縣人，參見六十餘員善知識，昔時在瀉山會裏作火頭，一日瀉山問云：「子在此數年，亦不解致箇問來，看如何？」隋云：「令某甲問箇什麼？」即得瀉山云：「子便不會問，如何是佛？」隋以手掩瀉山口，山云：「汝已後覓箇掃地人也無？」後歸川先於棚口山路次煎茶接待往來，凡三年後方出世開山住大隋，有僧問劫火洞然大千俱壞，未審這箇壞不壞，這僧只據教意來問，教中云：「成住壞空，三災劫起壞至三禪天。」這僧元來不知話頭落處，且道這箇是什麼，人多作情解道：「這箇是衆生本性。」隋云：「壞僧云：恁麼則隨他去也。」隋云：「隨他去，只這箇多少人情解摸索不着，若道隨他去在什麼處，若道不隨他去，又作麼生？」

不見道，欲得親切，莫將問來問，後有僧問修山主：「劫火洞然大千俱壞，未審這箇壞不壞？」山主云：「不壞。」僧云：「爲什麼不壞？」主云：「爲同於大千壞也。」碍塞殺人，不壞也碍塞殺人，其僧既不會大隋說話，是他也不妨，以此事爲念，卻持此問直往舒州投子，投子問：「近離甚處？」僧云：「西蜀大隋。」投子云：「大隋有何言句？」僧遂舉前話，投子焚香禮拜云：「西蜀有古佛出世，汝且速回，其僧復回至大隋，隋已遷化，這僧一場懷懼，後有唐僧景道題大隋云：「了然無別法，誰道印南能。」一句隨他語，千山走禱僧，蛋塞鳴砌葉，鬼夜禮龕燈，吟罷孤窓外，徘徊恨不勝，所以雪竇後面引此兩句頌出，如今也不得作壞會，也不得作不壞會，畢竟作麼生會，急着眼看。

【頌】劫火光中立問端。道什麼已。衲僧猶滯兩重關。坐斷此人，如何放得，百匝千重，也有頭底。可憐一句隨他語。天下稱僧作這般計較，千句萬句也。萬里區區獨往還。萬里區區，是箇什麼，是箇什麼，是箇什麼，是箇什麼。

【評唱】雪竇當機頌出，句裏有出身處，劫火光中立問端，衲僧猶滯兩重關，這僧問處，先懷壞與不壞，是兩重關，若是得底人，道壞也有出身處，道不壞也有出身處，可憐一句隨他語，萬里區區獨往還，這僧持此問投子，又復回大隋，可謂萬里區區也。

第三十則

【本則】舉僧問趙州承聞和尚親見南泉，是否。千問不如一見。州云：

五禪師碧巖錄卷第四

入野狐窟裏透得徹信得及無絲毫障礙如
古人公案未免周遮且道評論什麼邊

振錫一下卓然而立

竇着語云錯放過則不可猶較一

卓然而立依前泥裏洗塊再運前來

語云錯放過不可麻谷當時

泉云章敬在什麼處這漢元舌頭漏運了也

風力所轉終成敗壞果他

龍翠手金
自己何

【評唱】古人行腳徧歷叢林直以此事為念要辨他曲柔木床上老和尚具眼不具眼古人一

言相契即住一言不契即去看他麻谷到章敬透禪床三匝振錫一下卓然而立章敬云是是
殺人刀活人劍須是本分作家雪竇云錯落在兩邊倘若去兩邊會不見雪竇意佗卓然而立
且道佗為什麼事雪竇為什麼事卻道錯什麼處是他錯處章敬道是什麼處是是處雪竇如坐
讀判語麻谷擔箇是字便去見南泉依前透禪床三匝振錫一下卓然而立泉云不是不是殺
人刀活人劍須是本分宗師雪竇云錯章敬道是是南泉云不是不是為復是是是別前頭道
是為什麼也錯後頭道不是為什麼也錯若向章敬句下薦得自救也不了若向南泉句下薦
得可與祖佛為師雖然恁麼衲僧家須是自肯始得莫一向取人口辯他問既一般為什麼一
箇道是一箇道不是若是通方作者得大解脫底人必須別有生涯若是機境不忘底決定滯
在這兩頭若要明辨古今坐斷天下人舌頭須是明取這兩錯始得及至後頭雪竇頌也只頌
這兩錯雪竇要提活潑處所以如此若是皮下有血底漢自然不向言句中作解會不向繫
驢橛上作道理有者道雪竇代麻谷下這兩錯有什麼交涉殊不知古人着語鎖斷要關這邊
也是那邊也是畢竟不在這兩頭慶藏主道持錫透禪床是與不是俱錯其實亦不在此倘不
見永嘉到曹溪見六祖透禪床三匝振錫一下卓然而立祖云夫沙門者具三千威儀八萬細
行大德從何方而來生大我慢為什麼六祖卻道他生大我慢此箇也不說是也不說不是是
與不是都是繫驢橛唯有雪竇下兩錯猶較些子麻谷云章敬道是和尙為什麼道不是這老
漢不惜眉毛漏逗不少南泉道章敬則是是汝不是南泉可謂見兔放鷹慶藏主云南泉忒煞
郎當不是便休更與佗出過道此是風力所轉終成敗壞圓覺經云我今此身四大和合所謂

髮毛爪齒、皮肉筋骨髓腦垢色，皆歸於地；唾涕膿血，皆歸於水；暖氣歸火，動轉歸風，四大各離。今者妄身，當在何處？佗麻谷持錫，遶禪床，既是風力所轉，終成敗壞。且道：畢竟發明心宗底事，在什麼處？到這裏，也須是生鐵鑄就底箇漢，始得。豈不見張拙秀才，參西堂藏禪師，問云：山河大地，是有是無？三世諸佛，是有是無？藏云：有。張拙秀才云：錯。藏云：先輩曾參見什麼人來？拙云：參見徑山和尚來。某甲凡有所問話，徑山皆言無。藏云：先輩有什麼眷屬？拙云：有一山妻兩箇癡頑。又卻問：徑山有甚眷屬？拙云：徑山古佛，和尚莫誇渠好。藏云：待先輩得似徑山時，一切言無。張拙俯首而已。大凡作家宗師，要與人解粘去縛，抽釘拔楔，不可只守一邊。左撥右轉，右撥左轉，但看仰山到中邑處，謝戒邑見來，於禪床上拍手云：和尚，仰山即東邊立，又西邊立，又於中心立，然後謝戒了，卻退後立。邑云：什麼處得此三昧來？仰山云：於曹溪印子上，脫將來。邑云：汝道曹溪用此三昧，接什麼人？仰云：接一宿覺。仰山又復問中邑云：和尚，什麼處得此三昧來？邑云：我於馬祖處得此三昧來，似怎麼說話，豈不是舉一明三，見本逐末底漢？龍牙示衆道：夫參學人，須透過祖佛，始得。新豐和尚道：見祖佛言教，如生冤家，始有參學分。若透不得，即被祖佛瞞去。時有僧問：祖佛還有瞞人之心也無？牙云：汝道江湖還有碍人之心也無？又云：江湖雖無碍人之心，自是時人透不得。祖佛卻成瞞人去，也不得道。江湖不碍人，祖佛雖無瞞人之心，自是時人透不得。祖佛意，方與向上古人同。如未透得，儘學佛學祖，則萬劫無有得期。又問：如何得不被祖佛瞞去？牙云：直須自悟去。到這裏，須是如此始得。何故？為人須為徹，殺人須見血。南

泉雪實是這般人，方敢拈弄頌云。

【頌】此錯彼錯。

情取眉毛，據令而行，天上天下唯我獨尊。

切忌拈卻。

兩箇無孔鐵鎚，直鎚千手大佛也。提不起，或若拈去，闍黎喫三十棒。

四海浪平。

天下人不敢動着，東西南北一等家風，近日多雨水。

百川潮落。

淨練練赤洒洒，且得自家安穩，直得海晏河清。

古策風

高十二門。

何似這箇杖頭無眼，切忌向拄杖頭上作活計。

門門有路空蕭索。

一物也無，一物也無，平生觀着即瞎。

索。

果然，頓有轉身處，已瞎了也，便打。

作者好求無病藥。

一死更不再活，十二時中爲什麼，睡地作什麼。

【評唱】這一箇頌，似德山見瀉山公案相似。先將公案着兩轉語，穿作一串，然後頌出此錯彼錯。切忌拈卻，雪竇意云：此處一錯，彼處一錯，切忌拈卻。拈卻即乖，須是如此。着這兩錯，直得四海浪平，百川潮落，可煞清風明月。倘若向這兩錯下會得，更沒一星事。山是山，水是水，長者自長，短者自短。五日一風，十日一雨，所以道：四海浪平，百川潮落。後面頌麻谷持錫云：古策風高十二門。古人以鞭爲策，禪僧家以拄杖爲策。祖庭事苑中古策舉錫杖經：西王母瑤池上有十二朱門。古策即是拄杖，頭上清風，高於十二朱門。天子及帝釋所居之處，亦各有十二朱門。若是會得這兩錯，拄杖頭上生光，古策也用不着。古人道：識得拄杖子，一生參學事畢。又道：不是標形虛事，如來寶杖親蹤跡。此之類也。到這裏，七顛八倒，於一切時中得大自在。門門有路，空蕭索，雖有路，只是空蕭索。雪竇到此，自覺漏逗，更與懶打破。雖然，如是，也有非蕭索處。任是作者無病時，也須是先討些藥喫始得。

第三十二則

垂示云十方坐斷千眼頓開一句截流萬機寢削還有同死同生底麼見成公案打疊不下古人葛藤試請舉看

【本則】舉定上座問臨濟如何是佛法大意。多少人到此茫然病有濟

下禪床擒住與一掌便托開。今日捉敗老婆心切定佇立。已落鬼窟裏

傍僧云定上座何不禮拜。冷地裏有人顯破全得他定方禮拜。將勁忽

然大悟。如暗得燈如實得寶將錯就錯

【評唱】看他恁麼直出直入直往直來乃是臨濟正宗有恁麼作用若透得去便可翻天作地

自得受用定上座是這般漢被臨濟一掌禮拜起來便知落處他是向北人最朴直既得之後

更不出世後來全用臨濟機也不妨顯脫一日路逢巖頭雪峯欽山三人巖頭乃問甚處來定

云臨濟頭云和尚萬福定云已順世了也頭云某等三人特去禮拜福緣淺薄又值歸寂未審

和尚在日有何言句請上座舉一兩則看定遂舉臨濟一日示衆云赤肉團上有一無位真人

常從汝諸人面門出入未證據者看看時有僧出問如何是無位真人濟便擒住云道道僧擬

議濟便托開云無位真人是什麼乾屎橛便歸方丈巖頭不覺吐舌欽山云何不道非無位真

人被定擒住云無位真人與非無位真人相去多少速道速道山無語直得面黃面青巖頭雪

峰近前禮拜云這新戒不識好惡觸忤上座望慈悲且放過定云若不是這兩箇老漢豈殺這

屎床鬼子又在鎮州齋回到橋上歇逢三人座主一人問如何是禪河深處須窮底定擒住擬

拋向橋下時二座主連忙救云休休是伊觸忤上座且望慈悲定云若不是二座主從他窮到

底去看他恁麼手段全是臨濟作用更看雪竇頌出云

【頌】斷際全機繼後蹤。黃河從源頭濁持來何必在從容。在什麼處爭奈

手人還得巨靈擡手無多子。一擡殺人少實弄打分破華山千萬重。乾坤大地一

他也無【評唱】雪竇頌斷際全機繼後蹤持來何必在從容黃檗大機大用唯臨濟獨繼其蹤拈得將

來不容擬議或若躊躇便落陰界楞嚴經云如我按指海印發光汝暫舉心塵勞先起巨靈擡

手無多子分破華山千萬重巨靈神有大神力以手擘開太華放水流入黃河定上座疑情如

山堆岳積被臨濟一掌直得瓦解冰消

第三十三則

垂示云東西不辨南北不分從朝至暮從暮至朝還道伊睡麼有時眼似流星還道伊惺惺
麼有時呼南作北且道是有心是無心是道人是常人若向箇裏透得始知落處方知古人恁
麼不恁麼且道是什麼時節試舉看

【本則】舉陳操尚書看資福福見來便畫一圓相。是轉識精是識識誠若

金剛。操云：弟子恁麼來，早是不着便，何況更畫一圓相。今日撞着老
圓，便掩卻方丈門。一入它園，了也。雪竇云：陳操只具一隻眼。頂門

具眼，且道他意在什麼處，也好與一圓相，約然龍頭蛇尾，當時好與一抄，教伊道亦無門，退亦無路，且道更與他什麼一抄。

【評唱】陳操尚書與裴休李翱同時，凡見一僧來，先請齋，視錢三百，須是勘辨，一日雲門到相，看便問：儒書中即不問，三乘十二分教，自有座主，作麼生是禪家行腳事？雲門云：尚書曾問幾人來？操云：即今問上座。門云：即今且置，作麼生是教意？操云：黃卷赤軸。門云：這箇是文字語言，作麼生是教意？操云：口欲談而辭爽，心欲緣而慮亡。門云：口欲談而辭爽，為對有言，心欲緣而慮亡，為對妄想，作麼生是教意？操無語。門云：見說尚書看法華經，是否？操云：是。門云：經中道一切治生產業，皆與實相不相違背，且道非非想天，即今有幾人退位？操又無語。門云：尚書且莫草草，師僧家拋卻三經五論，來入叢林，十年二十年，尚自不奈何，尚書又爭得會？操禮拜云：某甲罪過，又一日與衆官登樓次，望見數僧來，一官人云：來者總是禪僧。操云：不是。官云：焉知不是？操云：待近來，與爾勘過。僧至樓前，操募召云：上座，僧舉頭，書謂衆官云：不信道，唯有雲門一人，他勘不得，他參見睦州來，一日去參資福，福見來，便畫一圓相，資福乃瀉山，仰山下尊宿，尋常愛以境致接人，見陳操尚書，便畫一圓相，爭奈操卻是作家，不受人瞞，解自點檢云：弟子恁麼來，早是不著便，那堪更畫一圓相，福掩却門，這般公案，謂之有中辨的句裏藏機，雪竇道：陳操只具一隻眼，雪竇可謂頂門具眼，且道意在什麼處，也好與一圓相，若總恁麼地，禪僧家

如何爲人，我且問爾，當時若是諸人作陳操時，堪下得箇什麼語，免得雪竇道他只具一隻眼，所以雪竇踏翻頌云：

【頌】團團珠遠玉珊瑚。三尺杖子攪黃河，須是馬載驢馳上鐵船。用許

什麼，有什麼限，且與團團看。分付海山無事客。有人不要，若是無事客也。釣鼈時下一圈

擊。什麼來，怎麼去，一時出不得，若是蝦蟇，堪作雪竇復云：天下衲僧跳不出。兼

在內，一坑埋卻，團團跳得出麼。

【評唱】團團珠遠玉珊瑚，馬載驢馳上鐵船，雪竇當頭頌出，只頌箇圓相，若會得去，如虎戴角，相似，這箇些子，須是桶底脫，機關盡得失，是非一時放卻，更不要作道理會，也不得作玄妙會，畢竟作麼生會，這箇須是馬載驢馳上鐵船，這裏看始得，別處則不可分付，須是將去分付海山無事底客，爾若肚裏有些子事，即承當不得，這裏須是有事無事，達情順境，若佛若祖，奈何他不得底人，方可承當，若有禪可參，有凡聖情量，決定承當他底不得，承當得了，作麼生會，他道釣鼈時下一圈，擊釣鼈須是圈擊始得，所以風穴云：慣釣鯨鯢澄巨浸，卻嗟蛙步碾泥沙，又云：巨鼈莫戴三山去，吾欲蓬萊頂上行，雪竇復云：天下衲僧跳不出，若是巨鼈，終不作衲僧見解，若是衲僧，終不作巨鼈見解。

第三十四則

【本則】舉仰山問僧，近離甚處。天下人一般，也要問過，因風吹火，不可不作常程。僧云：廬山。實頭人山云：曾遊五老峰麼？因行不妨掉臂，何曾遊過。僧云：不曾到。移一步，面赤不如語，直也，似忘前失後。山云：閣黎不曾遊山。太多事生，惜取眉毛，好道老漢，著甚死急。雲門云：此語皆為慈悲之故，有落草之談。殺人刀，活人劍，兩個三箇，要知山上路，須是去來人。

【評唱】驗人端的處，下口便知音。古人道：沒量大人，向語脈裏轉，卻若是頂門具眼，舉著便知。落處看他一問一答，歷歷分明，雲門為什麼卻道：此語皆為慈悲之故？有落草之談，古人到這裏，如明鏡當臺，明珠在掌，胡來胡現，漢來漢現，一箇蠅子也過他，鑑不得，且道：作麼生是慈悲之故？有落草之談，也不妨險峻，到這田地，也須是箇漢始可提掇。雲門拈云：這僧親從廬山來，因什麼卻道：閣黎不曾遊山？馮山一日問仰山云：諸方若有僧來，汝將什麼驗他？仰山云：某甲有驗處。馮山云：子試舉看。仰云：某甲尋常見僧來，只舉拂子向伊道：諸方還有這箇麼？待伊有語，只向伊道：這箇即且置，那箇如何？馮山云：此是向上人牙爪，豈不見馬祖問百丈，什麼處來？丈云：山下來。祖云：路上還逢著一人麼？丈云：不曾。祖云：為什麼不曾逢著？丈云：若逢著，即舉似和尚。祖云：那裏得這消息來？丈云：某甲罪過。祖云：卻是老僧罪過。仰山問僧：正相類此，當時待他道：曾到五老峰麼？這僧若是箇漢，但云：禍事，卻道：不曾到。這僧既不作家，仰山何不據令而行，免見後面許多葛藤？卻云：閣黎不曾遊山，所以雲門道：此語皆為慈悲之故。有落草之談，若果是出草之談，則不恁麼。

【頌】出草入草。頭上漫漫，脚下漫漫，開半開。誰解尋討。頂門具一隻眼，不開眼，不尋討。白雲重

重。千重百匝，頭上安頭。紅日杲杲。破也，瞎也。左顧無瑕。許多伎倆，作什麼。右盼已老。

君不見寒山子。一念佛，過。行太早。早也。十年歸不得。即今在什處，灼然。忘卻

來時道。打莫，做道忘前失後，好。

【評唱】出草入草，誰解尋討。雪竇卻知他落處，到這裏，一手搥一手搥，白雲重重，紅日杲杲，大似草茸茸，煙霧裏，到這裏，無一絲毫屬凡，無一絲毫屬聖，徧界不曾藏，一一蓋覆不得，所謂無心境界，寒不開，熱不開，熱都盧是箇大解脫門。左顧無瑕，右盼已老，懶瓚和尚，隱居衡山石室中，唐德宗聞其名，遣使召之，使者至其室，宣言：天子有詔，尊者當起謝恩。瓚方撥牛糞火，轉煨芋而食，寒涕垂頤，未嘗答，使者笑曰：且勸尊者拭涕。瓚曰：我豈有工夫為俗人拭涕耶？竟不起，使回奏，德宗甚欽嘆之。似這般清寥寥白的，不受人處分，直是把握得定，如生鐵鑄就相似，只如善道和尚，遭沙汰後，更不復作僧，人呼為石室行者，每踏確忘移步，僧問：臨濟石室行者，忘移步，意旨如何？濟云：沒溺深坑，法眼圓成，實性頌云：理極忘情，謂如何有喻齊，到頭霜夜月，任運落前溪，菓熟兼猿重，山長似路迷。舉頭殘照在，元是住居西，雪竇道：君不見寒山子，行太早，十年歸不得，忘卻來時道。寒山子詩云：欲得安身處，寒山可長保，微風吹幽松，近聽聲愈好，下有斑白人，嘖嘖讀黃老，十年歸不得，忘卻來時道。永嘉又道：心是根，法是塵，兩種猶如鏡上痕，痕垢盡時，光始現，心法雙忘性，即真，到這裏，如癡似兀，方見此公案，若不到這田地，只在語

言中走有甚了日。

第三十五則

垂示云定龍蛇分玉石別縑素決猶豫若不是頂門上有眼肘臂下有符往往當頭蹉過只如今見聞不昧聲色純真且道是皂是白是曲是直到這裡作麼生辨。

【本則】舉文殊問無着近離什麼處。不可不借問也無着云南方。草窠

法比丘少奉戒律。實顯人殊云多少衆。當時便與二喝着云或三百

或五百。果是野狐精無着問文殊此間如何住持。抄贊便回轉殊云凡

聖同居龍蛇混雜。得勝忙手風着云多少衆。還我話頭來殊云前三

三後三三。少千手大悲數不足

【評唱】無着遊五臺至中路荒僻處文殊化一寺接他宿遂問近離甚處著云南方殊云南方

佛法如何住持著云末法比丘少奉戒律殊云多少衆着云或三百或五百無着卻問文殊此

間如何住持殊云凡聖同居龍蛇混雜着云多少衆殊云前三三後三三卻喫茶文殊舉起玻

璃盞子云南方還有這箇麼着云無殊云尋常將什麼喫茶著無語遂辭去文殊令均提童子

送出門首無著問童子云適來道前三三後三三是多少童子云大德著應喏童子云是多少

又問此是何寺童子指金剛後面着回首化寺童子悉隱不見只是空谷彼處後來謂之金剛

窟後有僧問風穴如何是清涼山中主穴云一句不遑無着問迄今猶作野盤僧若要參透平

平實實腳踏實地向無着言下薦得自然居鑊湯爐炭中亦不聞熱居寒冰上亦不聞冷若要

參透使孤危峭峻如金剛王寶劍向文殊言下薦取自然水灑不着風吹不入不見漳州地藏

問僧近離甚處僧云南方藏云彼中佛法如何僧云商量浩浩地藏云爭似我這裏種田博飯

喫且道與文殊答處是同是別有底道無着答處不是文殊答處也有龍有蛇有凡有聖有什

麼交涉還辨明得前三三後三三麼前箭猶輕後箭深且道是多少若向這裏透得千句萬句

只是一句若向此一句下截得斷把得住相次問到這境界

【頌】千峰盤屈色如藍。還見文殊誰謂文殊是對談。設使替賢也不堪笑

清涼多少衆。已在言前前三三與後三三。試請脚下辨香

【評唱】千峰盤屈色如藍誰謂文殊是對談有者道雪竇只是重拈一偏不曾頌着只如僧問

法眼如何是曹源一滴水眼云是曹源一滴水又僧問耶耶覺和尚清淨本然云何忽生山河

大地覺云清淨本然云何忽生山河大地不可也喚作重拈一偏明招獨眼龍亦頌其意有蓋

天蓋地之機道廓周沙界勝伽藍滿目文殊是對談言下不知開佛眼回頭只見翠山巖廓周

沙界勝伽藍此指草窟化寺所謂有權實雙行之機滿目文殊是對談言下不知開佛眼回頭